

発 刊 登 録 番 号

11-B553448-000060-01



日帝強制動員被害者支援財団 翻訳叢書 13 報告書

太平丸事件の調査

日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会 編

日帝強制動員被害者支援財団・日本語翻訳協力委員会 訳



日帝強制動員被害者支援財団

発 刊 登 録 番 号

11-B553448-000060-01



日帝強制動員被害者支援財団 翻訳叢書 13 報告書

太平丸事件の調査

日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会 | 編

日帝強制動員被害者支援財団・日本語翻訳協力委員会 | 訳



日帝強制動員被害者支援財団

日帝強制動員被害者支援財団 翻訳叢書 13 報告書

太平丸事件の調査

初版 1刷 印刷 2022年 11月 30日

初版 1刷 発行 2022年 11月 30日

韓国語版編著 日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会編（2006年）
調査責任者：李淵植 調査2課

韓国語版発行 2006年

日本語版発行人 沈揆先

日本語版発行所 日帝強制動員被害者支援財団
ソウル特別市鐘路区鐘路ギル42利馬ビル6階

翻訳 日本語翻訳協力委員会
翻訳にあたり、訂正、追記した個所がある。訳注は〔 〕で示した。

最終監修 李淵植（上智大 科研研究員）

発刊登録番号 11-B553448-000060-01

デザイン・編集 Design21

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、
著作権法上での例外を除き、禁じられています。

日帝強制動員被害者支援財団翻訳叢書 13 報告書

太平丸事件の調査

日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会 | 編
日帝強制動員被害者支援財団・日本語翻訳協力委員会 | 訳

発刊の辞(日本語版)



財団法人日帝強制動員被害者支援財団は、今年の2022年も計5冊の強制動員関連の本を翻訳・発刊します。この出版事業は2019年からはじめ、今年で4年めとなります。この事業は日本の「強制動員真相究明ネットワーク-日本語版翻訳協力委員会」と韓国に関連分野の研究者の方々の絶え間ない努力とご支援、ご協力によって生み出された成果であります。

口述記録集『タンコだって?』は、九州地方への強制動員被害者の6人、関西地方の2人、関東地方の5人、中部・東北地方の3人、ほかの地域の3人など、計19人の強制動員被害者の口述を記録したものです。2005年「日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会」は、要約本(日本語)を出しましたが、今回は全文を発刊します。

『太平丸事件の真相調査』は、強制動員された朝鮮人を数百人乗せて航海していた太平丸が、1944年7月9日に米軍の魚雷により千島沖で沈没させられ、乗船者のほとんどが死亡した事件の報告書です。既存の研究と調査を踏まえ、韓国人の生存者への聞き取りなどを追加してこの事件の原因と結果を分析しています。

『北海道東川町江卸発電所強制動員被害真相調査』は、軍需物資の生産に必要な電力を得るために江卸発電所を建設し、朝鮮人を動員しましたが、その動員被害の報告書です。労務者たちが数多く動員された炭鉱とは違う発電工事現場での被害の様相を知ることができます。

『「朝鮮女子勤労挺身隊」労務動員の調査』は、いわゆる日本軍「慰安婦」として誤認されてきた「女子勤労挺身隊」の動員被害の実態の報告書です。委員会への183件の被害申告書と生存者の口述を根拠に動員被害の全体の姿を示すように努力しました。

『強制動員名簿解題集2』は、委員会に寄贈されたり、独自に収集した資料の中から、強制動員の被害事実を証明する名簿13種を分析し、解説したものです。強制動員期や解放直後の貴重な史料を分析することで、既存の資料や口述記録を補うことができました。

上記の5冊は強制動員を調査した旧委員会が発行した本であり、2019年から財団と協力してきた「日本語版翻訳協力委員会」の皆さんのご協力により日本語に翻訳され、その後、国内の研究者たちに監修していただきました。

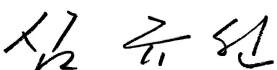
旧委員会解体後に中断していた事業を、財団が再開し、強制動員分野での国内外の研究にお役に立てられることを嬉しく思っております。日本と韓国で長いあいだ活躍されている研究者や活動家、翻訳者の皆さんの献身的なご努力に心より感謝いたします。

財団は、今後も、強制動員分野における様々な研究報告書の作成や学術資料・教育資料の編纂などに努めます。強制動員に関する研究成果が韓国と日本を超えて国際的に広がることを望みます。皆さまの絶え間ないご関心とご支援をお願いします。

ありがとうございました。

2022年11月30日

財団法人日帝強制動員被害者支援財団

理事長 沈 揆 先 

要約文

1. 太平丸事件の概要と背景

1-1. 事件の概要

この事件は1944年7月9日、江原道・黄海道一帯から強制動員された朝鮮人徴用者を乗せた太平丸が、日米間の激戦地であるクリル〔千島〕列島の北端（パラムシル〔幌筵〕島・シュムシュ〔占守〕島）近くを通り過ぎる時、アメリカの潜水艦サンフィッシュ号（正式の名称は、USS Sunfish, SS-281号）の魚雷攻撃を受け、多くの朝鮮人が海のもくずとなった事件である。

1-2. 事件の背景

1943年5月の米軍のアッツ島上陸後、アラスカの方角にのびているアリューシャン列島から撤収した日本軍は守勢となり、北海道の東北にのびるクリル列島から米軍を攻撃するため、飛行場をはじめ、軍事施設を急いで建設した。その過程で朝鮮人が大挙投入されたが、この地域は日米間の激戦地区となり、1943年下半年以後、米軍による空襲と魚雷攻撃が日ごとに増加した。〔以下、クリルを千島と訳記した箇所がある〕

2. 委員会の調査成果

2-1. 被害申告システムによる被害の確認

これまでこの事件は国内の全金亨（チョン・クムドル）氏と北朝鮮の故・黄宗洙（ファン・ジョンズ）氏、日本の旧海軍の今村榮三氏の証言をもとに、江原道の地方新聞と『北千島に眠る』というパンフレットによって、事件の存在については一部で知られていた。委員会がスタートして事件に関する真相調査が進む中で、彼ら以外の生存者や遺族から被害の申告が行われ、ごく限られた文献や証言しかなかった事件の多様な実態を再構成できるようになった。

2-2. 類似の沈没事件の確認

太平丸事件の調査による成果の一つは、これと類似した事件が1944～45年の間にしばしば起こっていたことを明らかにしたことである。太平丸が沈没した北千島だけでなく千島列島全域でこのような沈没事件が起こっており、それにより、江原道以外でも三南地方(忠清・全羅・慶尚道)出身の多数の朝鮮人が死亡していたことを確認した。

2-3. 強制動員関連名簿の問題点を確認

日本側が1971年と1993年の2回にわたって韓国政府に引き渡した朝鮮人強制動員関連資料の問題点を確認した。資料の問題点は、日本側が韓国側に引き渡した時の原本の誤謬と、韓国側が受け取った後に名簿の電算化の過程で起こった誤謬に、大きく分けることができるが、結論的にいえば、原本が本質的に持っている欠陥が、国家記録院の電算入力過程で増幅されたものであることが明らかになった。この事件との関連では、主に留守名簿と死亡者連名簿を検討したが、死亡場所と死亡日時、死亡者名などが明確に記載されていなかった。従って、このような欠陥を持った名簿をもとに日本側が主張した182名の朝鮮人の死亡者はさらに増えることになるだろう。それゆえ、日本側が〔示す死亡者数は〕第3の根拠資料を提示しなければ、そのまま認めることのできない数値である。

3. 事件の歴史性

この事件は一次的には米軍潜水艦による沈没であるが、朝鮮人らが死亡するにいたる根本的な理由が日帝の強制動員によるものであり、植民地支配に由来するものということができる。しかし、この事件の現場は現在のロシアの領土であり、現場調査のためには日本とロシア両国の了解を得なければならないので、沈没現場の調査はもちろんのこと、現場での追悼さえ複雑な手続きをしなければならない。ところで日本は10年に1回ずつこの地域に放置された遺骨の調査と、遺族を招請しての現地追悼を行っているが、韓国政府もこれに対する適切な対策が必要である。特に太平丸事件は千島地域で起こった類似の沈没事件の一つに過ぎず、他の事件に対する真相調査も並行されるべきであろう。

目次

発刊の辞(日本語版)	4
要約文	6
I. はじめに	11
1. 調査の背景	11
II. 千島地域への朝鮮人動員と戦況の変化	17
1. 千島列島の戦略的位相	17
2. 戦況の推移	18
3. 北千島の軍備強化	21
4. 第5方面軍の編成と米軍の逆襲	22
III. 動員過程と事件の経緯	25
1. 動員過程	26
2. 朝鮮人管理の実態	30
3. 出港と沈没の経緯	32
4. 事故の収拾経過	42
IV. 太平丸事件の被害申告の現状と死亡者数資料の検証	47
1. 事件関連の委員会への被害申告の現状	47
2. 死亡者数関連資料の批判的検討	56
3. 死亡者数に関する日本側説明資料の検証	65

V. 結語	75
1. 調査の限界	75
2. 今後の課題	76

<付録>	79
1. 調査関係写真資料	79
2. 太平丸事件全金吾氏からの聞き取り(全文)	82
3. サンフィッシュ号 資料	114

表目次

<表1> アジア太平洋戦争期、北東方面の戦況変化	19
<表2> 千島地域の運航船舶の沈没現況	33
<表3> 沈没事故による千島地域の朝鮮人の死亡事例	35
<表4> サンフィッシュ号撃沈電文	40
<表5> 太平丸沈没死亡者推定表	45
<表6> 死亡者推計関連で渡した資料の目録	66
<表7> 留守名簿登載者中、日本側が死亡推計から除外した12名	71
<表8> 被徴用死亡者連名簿原本の記載事項	72

図版目次

<図版1>戦時下、北東方面の一般図	17
<図版2>極東アジアと太平洋地域の戦況図	20
<図版3>北千島の主要軍事地域	21
<図版4>動員経路 (※ 移動過程は番号順)	25

<図版5>小樽訓練所の推定地	32
<図版6>千島列島海域の沈没船舶の分布図 (地図に表示された番号は上記表2に依拠)	34
<図版7>沈没場所	41
<図版8>柏原地区の位置	44
<図版9>全金夏氏が提供した麟蹄郡の動員被害者名簿	51
<図版10>朴ギョンソク氏が添付した北方軍経理部の召集解除の証拠文書	53
<図版11>被徴用死亡者連名簿原本イメージの記載事例	60
<図版12>同一人の推定事例(左一金本正禎(禎) / 連名簿、右一金本正讃 / 留守名簿)	62
<図版13>左一金田根淑 / 連名簿、右一金田根俣 / 留守名簿	63
<図版14>左一鈴木竜基 / 連名簿、右一鈴木竜基 / 留守名簿	64
<図版15>推計漏落者の死亡地記載方式	67
<図版16>金原東出と金聖信の連名簿の記録	69
<図版17>金原東出と金聖信の留守名簿の記録	70
<図版18>大倉一郎氏、現在、フェリス女学院大学教授	79
<図版19>大井田孝氏、現在、神戸市「戦没した船と海員の資料館」の研究員	79
<図版20>太平丸事件遭難者の救助作業に参加した旧日本海軍の高清水祥氏と夫人	80
<図版21>2005年12月26日、高清水氏を訪問した時に閲覧した「駆逐艦曙便り」	80
<図版22>太平丸事件当時、遭難者の救助に従事した旧日本海軍の田中貞夫氏と夫人	81
<図版23>国内唯一の生存者として知られる全金夏氏	81
<図版24>左側は旧日本陸軍軍人として朝鮮人と太平丸に同乗していた今村榮三氏、 右側は高清水氏	82

I. はじめに

1. 調査の背景

1) 事件の概要

- 2005年3月31日、真相調査の件を受付（委員会－9）
 - － 申請人：金景錫（キム・ギョンソク）
 - － 件名：太平丸事件
 - － 申請の要旨：1944年7月9日、朝鮮人徴用者を乗せた太平丸が米潜水艦サンフィッシュ号（Sunfish）から発射された魚雷によって沈没した。この事件により約1000名と推定される朝鮮人乗船者のうち、相当数が死亡したものと推定される。このことについて真相調査を依頼する。
- 2005年4月11日、真相調査の件で検討意見と議決主文書を提出
 - － 検討意見：この事件は解放以前の米軍の魚雷攻撃によるものである。しかしこれは日本が「強制労働」を目的に徴発した朝鮮人を北海道とサハリン〔樺太〕、クリル〔千島〕列島付近の作業場に配置する目的で移動させる過程で発生したものであるから、本委員会の強制動員被害の真相調査の範疇に入る。
 - － 調査する内容：事故当時の北方の作業場の分布、北千島要塞隊91師団の位置と朝鮮人徴用者の管理の状況、米潜水艦の撃沈電文を含む米軍側の該当地域での作戦資料、申告者の添付資料である『北千島に眠る』の編集経緯と原資料の検討、南韓・北韓・日本に居住する生存者の証言、本件を報道した『江原日報』『江原道民日報』『北海道新聞』の取材源および取材記者への確認、乗船者と死亡者数、朝鮮人死亡者と生存者の事後処理、太平丸の沈没地点と遺骨の所在など。
- 2005年4月15日、委員会議決（案件番号－36号）、真相調査を開始：李淵植担当（調査2課）

- ― 審議決定内容の検討意見：本件は旧日本帝国と米国の交戦行為により発生した。
しかし申請人の調査申請の趣旨に照らして見ると、被害の究極的原因は米軍の魚雷攻撃という直接的行為の前に、旧日本帝国の「強制動員」からはじまった。
ゆえに「日帝強占下強制動員被害真相究明等に関する特別法」第14条1項（真相調査委開始）および同法施行令第19条（調査開始決定）に依拠して、申請に対する真相調査が必要であると判断される。
- 2005年4月22日、日帝強制動員被害真相調査開始決定通知書を発送
 - ― 通知書：日帝強占下強制動員被害真相究明等に関する特別法第14条および同法施行令第19条により（真相調査開始が）決定したことを通知します。

(2)調査経過

- 2005年5月23日、真相調査の件で細部検討案を提出、先行研究を検討。
 - ― 先行研究の検討結果：現在、本件と関連して刊行された出版物は北千島に眠る刊行会『北千島に眠る―太平丸事件と朝鮮人強制連行―』（サッポロ堂書店、2002）が唯一だった。そのほか戦時下の北千島の戦況を把握するには、三上一次編『北千島海軍部隊史』（1985年、非売品）、池田誠編『北千島占守島の15年』（1997年、個人出版、回顧録）、防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書―北東方面陸軍作戦―』1、2と同『戦史叢書―北東方面海軍作戦―』が全てだった（先行研究や関連資料の検討過程で、米海軍史編纂機関(Naval History and Heritage CommandとHistoric Naval Ships Association)所蔵のUSS Sunfish、SS-281の「潜水艦の戦時哨戒・偵察報告書(Submarine War Patrol Reports)」という一次資料の存在は認知したが、残念ながら資料収集や分析までは行うことができなかった）。〔日本語版では114頁に掲載〕
- 2005年8月16日、日本厚生労働省主管「海外戦没者慰霊巡拝」計画での真相調査・現場調査を、外交通商部東北アジア1課を通じて依頼。
 - ― 文書名：「太平丸真相調査に関する件」と「占守島参観の件」

- ― 背景：第1次韓日遺骨協議の時、海外所在の遺骨に対する韓日間の共同発掘・収集・奉還の方法としてパイロット・プロジェクト案が言及されたが、これを根拠に要求、日本語文書「占守島戦没者慰霊巡拝に関するご協力のお願い」。
- ― 日本外務省答弁：「検討する時間が切迫している関係から、次回の韓日遺骨協議で推進方法を論議することを要望」。
- 2005年10月、日本の先行研究者の大倉一郎、谷川透氏に会い、日本人生存者の調査の可能性を打診、沈没船舶の専門家の大井田孝氏に会い、太平丸事件について要請。
 - ― 面接内容：太平丸に関する最初のパンフレット『北千島に眠る』の編纂と資料収集の経緯を聞く。太平丸の乗船者のうちの日本人生存者からの証言聞き取りの協力について論議（北海道・函館居住の旧日本海軍の高清水祥氏を紹介）。
- 2005年11月22日、太平丸事件関連の口述資料収集のため高清水氏の面接方法を内部で検討
 - ― 文書名：「太平丸乗船旧日本海軍の高清水氏の訪韓招待企画案」
 - ― 企画の趣旨：もっぱら真相調査件の口述採録のために海外出張をおこなうよりは、本件の調査とともに調査総括課（調査3課）が担当している、軍関連資料などに対する質疑などを兼ねて面接するために、高清水氏の訪韓を提案した方が合理的な方法である。
 - ― 検討結果：国内の遺家族団体などの反応を考慮し、国内生存者の調査を優先的に行う必要があり、時間がかかる訪韓招待提案の代わりに、調査担当者の年内海外出張を決定。
- 2005年12月25日と2006年1月24日、太平丸遭難者救助に投入された日本海軍の証言を採録（高清水祥、田中貞夫）
 - ― 証言内容：事件当時の「救助者と救助された者の会」の状況、強制動員された朝鮮人らの日常、救助当時の状況と目撃談、太平丸を護衛していた駆逐艦曙(あけぼの)乗務員の救助の経緯、追加証言対象者の紹介、1943～44年の間、北海道・

太平丸事件の調査

千島列島一帯の沈没事件のパターンと戦況、曙に救助された総人員と朝鮮人数、救助された朝鮮人の事後処理、関連する生存者の現況。

- 2006年2月23日、国内の生存者＝全金夏（チョン・クムドル）氏の証言採録とその他の生存者の調査
 - － 証言内容：動員当時の家族の状況と職業、動員の経緯と日時、移動経路、動員期間中の故郷の家族の生活、太平丸乗船の経緯、沈没時の救助の状況、朝鮮人乗船者と生還者数、死亡者の事後処理の過程、生存推定者の名前（ソン・ホンジュン、吉サンナムなど）、小樽の手宮学校の訓練所の生活、パラムシル飛行場建設の仕事小樽送還後の病院生活、1945年2月の帰還の経緯、大倉一郎氏との関係、太平丸引上げ計画の推進経緯など。
- 2006年3月、全金夏氏証言の比較・検証のため、事件当時に救助された旧日本軍生存者の今村栄三氏の口述を要請（家族と電話で7回）
 - － 結果：高齢と持病を理由に口述採録を固辞、ただ書面質疑に対して肯定的に検討すると答弁
- 2006年3月、太平丸事件に関して日本で国会質問（2002年5月10日）を担当した旧民主党議員今野東氏に面接を要請
 - － 趣旨：国会質問の背景と質問の根拠資料の入手経緯の聴取
 - － 結果：落選によりしばらく政治活動を中止、秘書を通じて面接を固辞。
- 2006年3月10日、東京駐在韓国大使館を通じて厚生労働省が推定した朝鮮人死亡者数（182名）の根拠資料の確認を要請
- 2006年4月、厚生労働省の答弁を基礎に本委員会の委認定資料から死亡者名簿を再作成、被徴用死亡者連名簿2万1755名中、陸海軍分離作業によって死亡場所と死亡日時を確認、留守名簿の中から、第5方面軍の記録171名を抽出して重複者を確認（結果、太平丸の死亡推定者203名を確認）

- 2006年5月19日、日本側が提示した死亡者数の再確認と根拠資料を要請、祐天寺の朝鮮人慰霊祭に参席した時、東京駐在官に関連資料を渡す。
- 2006年5月23日、録音起こしを開始
 - － 証言者：全金夏、高清水祥、田中貞夫、大倉一郎、大井田孝
 - － 主面談：李淵植、補助面談：南相九(全金夏)、チャン・ソッキョン(田中貞夫)、李グァンホ(大井田孝)
 - － 録音文作成：李淵植、李孝眞、黄ナリ、校閲：李淵植
- 2006年6月2日、太平丸事件真相調査の経過を報告
- 2006年7月13日、日本厚生労働省の太平丸事件の死亡推定者の説明資料を受領、分析を開始
 - － 報告書作成：李淵植
 - － 地図および各種の添付資料の編集：李孝眞、
 - － 校閲：李淵植
- 2006年8月2日、最終報告書を提出

(3) 調査の方針と調査資料

本件は、真相調査の受付から最終報告書の作成に至るまで、筆者が主務担当者であり、初めから調査の方向と調査日程を調整することができた。調査日程は上記の経過報告項目に記述したので、調査方針に関してだけ、簡略に記そうと思う。

まず資料収集と関連して、この事件は文献資料が貧弱なため、筆者は生存者の発掘によって最大限の口述資料を収集し、本委員会の被害真相管理システムの認定資料と被害申告資料を結合して、事件の全体像を再構成することにした。

太平丸事件の調査

○ 文献資料

上記の調査方針を基に、文献資料を大別すれば、太平丸事件を前後する日米間の戦況資料、北海道以北の日本軍の作戦資料、クリル〔千島〕地域に配置されていた日本人らの回顧録を中心に集めた。これらによってどのような状況で朝鮮人が現地に動員され「輸送船の沈没」という形で死を迎えたのかを明らかにしようとした。

○ 口述資料

一方、口述資料の場合は、太平丸に直接乗船していた朝鮮人と日本人の証言を収集し、証言の内容を比較検証することで事実関係を明らかにしようとした。さらに救助作業に投入された旧日本海軍の生存者達の証言を確保することで、沈没当時の具体的な状況を把握しようとした。そして後続作業として本委員会の電算システムにより太平丸事件に関連する被害申告の書類の内容を分析して口述資料の内容を立体的に比較検証しようとした。

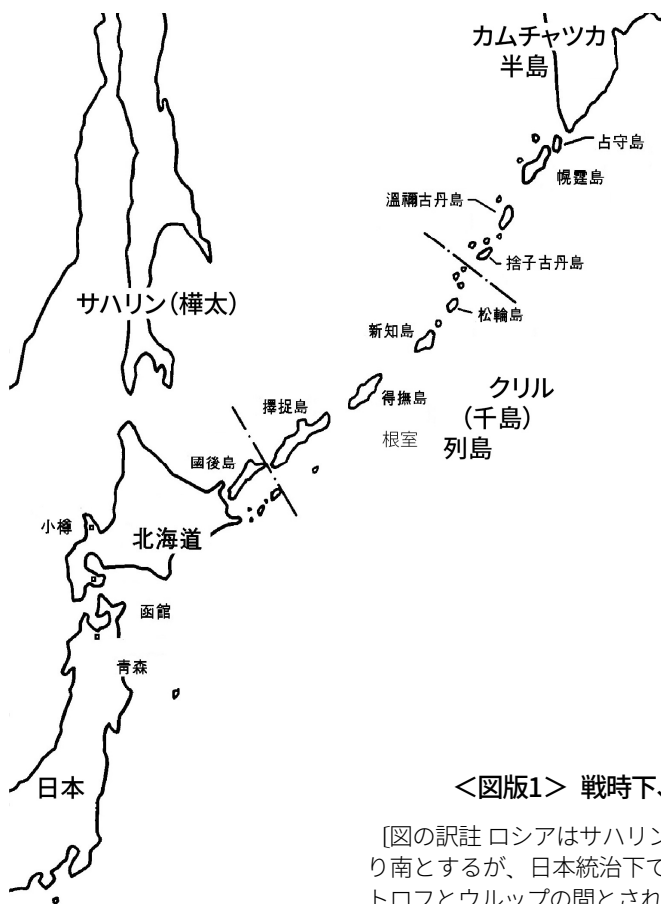
○ 委員会認定資料

最後に本件の核心内容の一つである死亡者数を検証するために2002年、日本の厚生労働省が日本国会に提出した本件関連の答弁書を基礎に、日本側が死亡者数を182名と主張するに至った根拠資料と推計方法に注目した。そこで外交ルートを通じて日本側に質問したところ、厚生労働省が活用した資料が、本委員会認定資料である被徴用死亡者連名簿と留守名簿であることを確認できた。そこで筆者はまず、上記の資料に対して1次資料への批判をおこなった後に、これをもとに直接死亡者総数を逆推計し、上記の資料と日本側の推計方法が持つ問題点を総体的に検証することにした。

Ⅱ. 千島地域への朝鮮人動員と戦況の変化

1. 千島列島の戦略的位相

戦時下、日本で「北東方面もしくは北方」といえば、クリル列島、サハリン、北海道の3地域を総称する。その内、北海道の東北方向に伸びるクリル列島はさらに以南の南クリル、得撫(ウルップ)島と島の間の中クリル、捨子古丹(シアシュコタン)島とカムチャツカ半島の間を北クリルに分かれる。



<図版1> 戦時下、北東方面の一般図

[図の訳註 ロシアはサハリン州南クリル管区をクナシリより南とするが、日本統治下では南千島と中千島の境界はエトロフとウルップの間とされていた]

中クリル以北の場合、年中酷寒がつづくツンドラ地帯であり、人が住むには不適合なため、クリル列島の中で住民が常住していたのは以南の南部地域に限られていた。しかし、北クリル地域は、極東アジアと北アメリカをつなぐ要路として軍事的観点から、早くから飛行場建設の候補地として注目されていた所だ。

日本海軍は早くから北クリルの主要な島である占守（シュムシュ）島・幌筈（パラムシル）島一带に多数の飛行場を保有していたが、1942年、戦線が拡大する中で、陸軍も該当地域に専用の飛行場の建設を推進するようになった。朝鮮人が陸軍軍属としてクリル列島の飛行場の建設に動員された背景は、該当地域の絶対的な人力不足と、戦況の変化による軍事基地増強計画によるものである。

2. 戦況の推移

この地方の歴史は基本的に、ロ日関係を中心に展開してきた。この地に最初に定着したのはロシア人で、17世紀以後、探検家の後裔たちが一部定住しはじめた。しかし1855年、日本人が南千島（クリル）の島々を占領しはじめ（1858年日露修好通商条約）、1875年には北千島まで領土を拡大し（千島・樺太交換条約）、1905年には北緯50度以南の樺太（サハリン）南部を手に入れた（ポーツマス条約）。その結果、19世紀以来、ロシアとの領土紛争の核心地域だった北東地域はアジア太平洋戦争の勃発以前までは主に対ソ戦略基地、ないしは対ソ防御の前哨基地としての役割を果たした。

しかし1941年末、日本がアジア太平洋戦争を挑発し、戦術的次元から北千島各地に配置した戦力をアリューシャン列島の占領に投入する中で、この地域は対米戦争遂行の要地に浮上し、戦争末期には対米本土防御の最前線となった。この地域に対する対米関係を規定する状況は1945年8月9日のソ連の対日参戦時まで続いた。

つまり、太平丸の沈没地でもあった北クリル一帯を含む北東地域は、アジア太平洋戦争の最前線であり、戦況により人的・物的資源の移動が急迫していた場所と見ることができるのである。

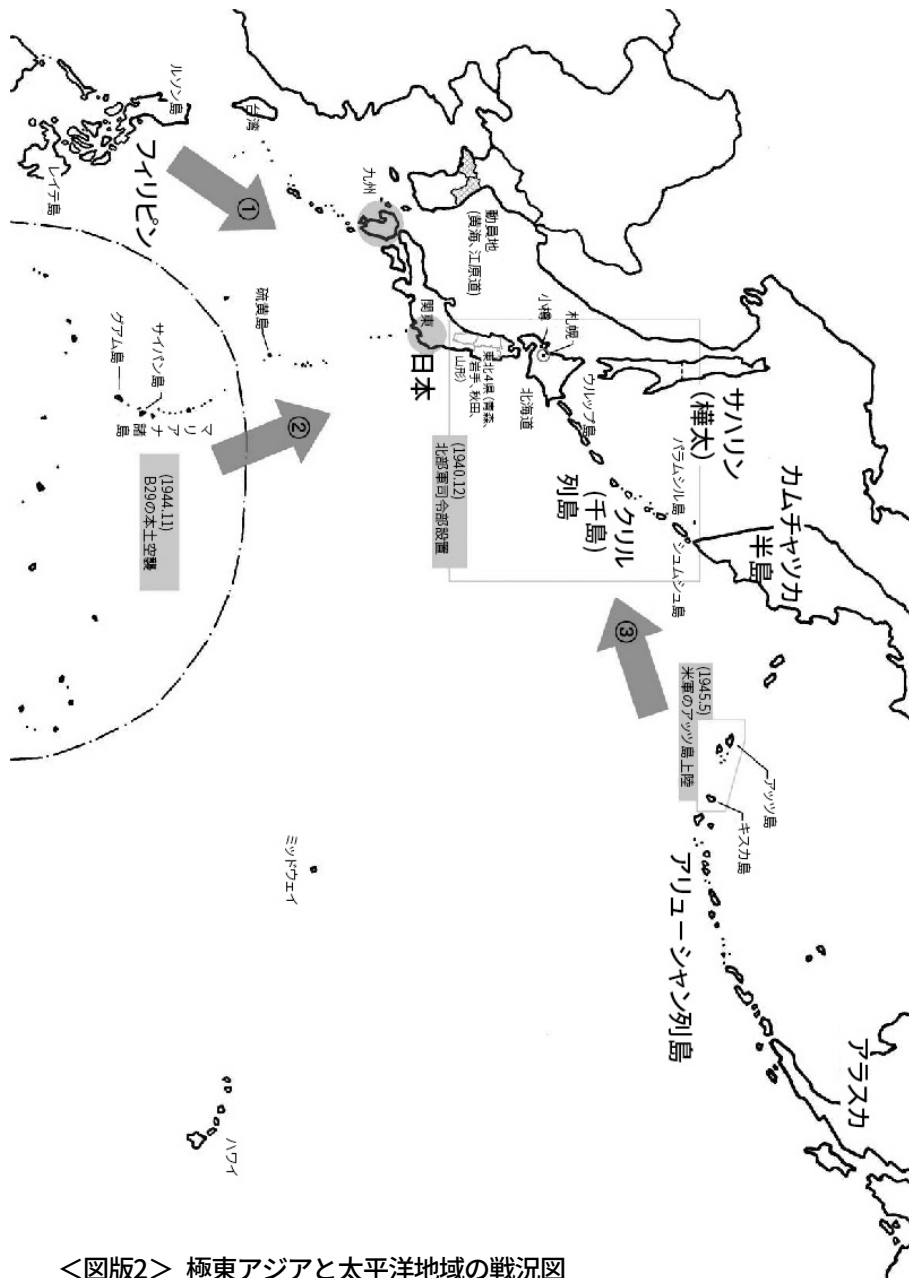
本件と関連して開戦後の北東方面の戦況の推移を整理すると次の通りだ。

＜表1＞ アジア太平洋戦争期、北東方面の戦況変化

時期	主要な戦況
1940.12	札幌に陸軍北部軍司令部を設置。 * 北部軍管区－北海道、千島、樺太、東北4県（青森、岩手、秋田、山形）
1941.12	アジア太平洋戦争勃発。
1942.6	日本、アリューシャン列島を攻略。
1942.8	アリューシャン列島占領後、北部軍の主要任務が対ソ防御から対米攻略中心に転換。
1943.2	北部軍を北方軍に改編、既存の任務にアリューシャン列島作戦を追加。
1943.3	大本営は米国の西部アリューシャン列島反撃に備え北千島守備隊（シュムシュ、パラムシル）、中千島守備隊（ウルップ）、南千島守備隊（エトロフ）を北方軍に編入。
1943.5	米軍のアッツ島上陸（「アッツ島玉砕」）以後、米国の北東方面（千島列島）攻撃が本格化。
1944.2	日本、千島列島に兵力と軍需品の応急輸送を開始、北千島に第91師団、南千島に独立混成第43旅団と独立混成第8連隊を配置。大本営は津軽海峡以北に第5方面軍を編成、北東地域ルートを通じた米軍の本土攻撃に備える。
1944.11	マリアナ諸島から発進した米軍爆撃機B29の「本土空襲」がはじまるなか、北東地域の日本兵力の一部が南方に配置転換される。
1945.1	「本土防衛」のため千島列島と北海道に配置されていた第27軍司令部第147師団、海上機動第4旅団などを本土の関東地方に、第77師団と海上機動第3旅団を九州地方に配置転換。これにより第5方面軍は戦略を修正、北海道・本土防衛に尽力。
1945.8	8月9日、旧ソ連の参戦により千島列島と樺太一帯の兵力が対ソ作戦に電撃配置。8月18日、北千島（シュムシュ）戦闘、8月20日、真岡（ホルムスク）戦闘を最後に8月25日、第5方面軍、作戦を終了、北東方面の戦闘状況が終結。

上の表1で見ると千島列島地域の戦略的位置の変化をもたらした直接の契機はアリューシャン列島をめぐる米日間の攻防だった。1941年12月、真珠湾とフィリピン攻撃以後、太平洋地域の覇権をねらった日本の作戦は速度を増し、その過程で日本は1942年6月、ミッドウェーの陽動作戦でアリューシャン列島のアッツ島とキスカ島を占領した。（この陽動作戦説については、日本でも、アメリカでもいまだに肯定論と否定論が共存している。こういった論争が続いてきた根本的な原因は、1)アリューシャンとミッドウェーの二つの広域作戦を遂行するには、両国の可用戦力が大いに足りなかったという当時の客観的な状況、2)そして、二つの作戦の相互関連性が希薄だという軍事作戦論的な分析から生じたといえる。はたして「アリューシャン作戦は、ミッドウェー作戦の成功のために行われた従属的な軍事行動だったのか」という問題は、太平洋戦争の戦況が大きく転換した契機を深く理解するためには極めて重要な事案である。だが、この調査では、陽動作戦説の可否や真偽とは関係なし

に、実際にアリューシャン作戦に莫大な武器と兵力が投入することにより、朝鮮人の無理な動員を行わざるを得なかったという点に焦点を合わすことにした。)



<図版2> 極東アジアと太平洋地域の戦況図

しかし周知の通り、太平洋の主導権はミッドウェー海戦を起点に、徐々に米軍側に傾きはじめ、1943年1月からアリューシャン列島の攻撃を始めた米軍はついに同年5月、西部アリューシャンの拠点であるアッツ島で日本軍を壊滅させ（「アッツ島玉砕」）、千島列島への爆撃ルートを確認した。

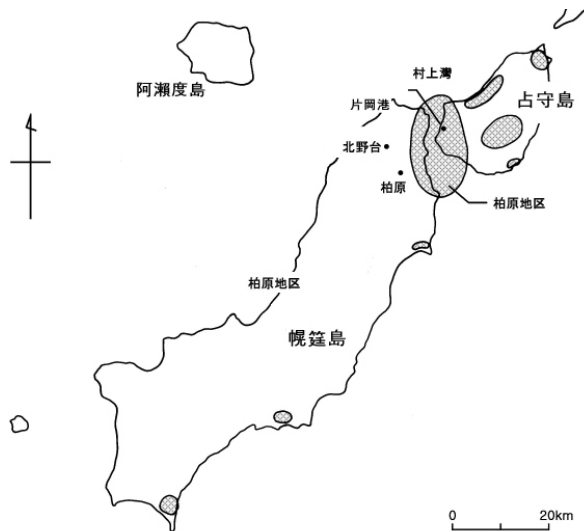
その結果、1943年下半期から日本帝国の膨張は終末を告げ、「本土防衛」が新たな話題となる中で、本土周辺の各部隊は米国（連合国）の攻撃をどう防ぐかに没頭することになった。この過程で連合国の本土攻撃の3大仮想ルート、すなわち①レイテ・ルソンなどのフィリピン島、②グアム・サイパンなどのマリアナ諸島、③西部アリューシャンのアッツ島などが有力な発進基地として浮上した。そのため千島列島地域は、本土と直線距離が最短のアッツ島と最前線で対峙しているだけでなく、何時でもソ連の対日参戦に備えるため、急速な軍備の増強が図られた。

3. 北千島の軍備強化

「アッツ島玉砕」以後、危機が迫った大本営は千島列島地域の軍備を全般的に強化するために兵力を増強・配置し、飛行場建設に拍車をかけた。特に大本営が米軍の千島列島攻略を防御するために要塞化を強力に推進した地域は、シュムシュ（占守）島とパラムシル（幌筈）島を中心とする北千島だった。

両島の要塞化は北方軍によって推進された。北方軍は1943年5月、戦闘司令部をパラムシル島におき、西部アリューシャン撤収の準備とともに千島列島地域の軍備強化と諸般の軍事施設の整備作業を担当した。

ところが中千島以北には住民が



<図版3> 北千島の主要軍事地域

ほとんどいなかったもので、すべての作業は外地の人力と部隊員を利用するしかなかった。そこで北方軍は、工兵連隊補充隊、第七師団派遣隊、北海守備隊第3地区隊を作業部隊に充当し、近くの海域で漁業に従事していた人々を陸海軍が雇用し、不足した労働力を埋めた。しかし戦況が悪化し、米軍の本土空襲が可視化すると、北方軍経理部は北千島地域をはじめ千島列島全域に朝鮮人を飛行場建設の現場に投入した。¹⁾

彼らの作業場はその後、アリューシャン列島から発進した米軍機の主要な爆撃対象となった。当時の米軍の主要な戦略爆撃の対象は、パラムシル海峡とオホーツク海を往来する輸送船、軍用飛行場、そして漁場と缶詰工場だった。1943年7月、アッツ島に対日攻撃基地が完成すると、飛行距離を短縮できた米軍は、随時、偵察機を飛ばし、シュムシュ・パラムシル・アトゥラソバ(旧日本地名・阿頼度島)一帯の軍事施設の動向を把握してB-24、B-25による空襲を開始した。これに対し、日本は高射砲部隊を各所に配置して各守備隊を補強した。

こうして、米軍の主要爆撃対象地である飛行場の建設現場に配置された朝鮮人たちは、現地への移動はもちろん作業のさなかも、いつ生命を失うかもしれないという危険にさらされた。

4. 第5方面軍の編成と米軍の逆襲

大本営は1944年2~3月、北東方面の防衛を強化するために軍の編成を改編し、北海道の札幌に第5方面軍司令部(司令官:樋口季一郎、直轄師団:第7、42、88、91師団)を新設して、千島列島、樺太、北海道など北東地域の全域を総括させた。

第5方面軍は基本的に従来の北方軍を継承した陸軍の組織だったが、南千島の防衛を補強するために新設された第27軍、第1飛行師団、北方船舶隊などと陸海空の統合作戦を遂行するようになった。

これとともに第5方面軍隷下の統帥組織に対する整理も行なわれた。1944年5月以後、アリューシャン列島からの米軍の攻撃が本格化する兆しが見えると、第5方面軍は千島列

1) 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書』—北東方面陸軍作戦2—1971、朝雲新聞社、35,127 頁参照

島に急いで兵力を増派しようとした。しかし北千島は悪天候が続き、また米潜水艦とB-24爆撃機が頻繁に輸送船を攻撃し、新しい兵力の増強が容易でなくなると、既存の部隊を再配置し、変化した戦況に対応しようとした。

しかし1944年夏から飛行距離が大幅に長くなった新型爆撃機B-29がマリアナ諸島に配置されると、日本は、北東方面の戦力を徐々に南洋に配置転換せざるをえなくなったついに1945年1月、「本土決戦」を方針に、戦略を大幅に修正することになった。その結果、第5方面軍の作戦は北海道本島に重心を置くことになり、千島列島に配置されていた戦力も続々、北海道以南の地域に転換されることになった。

このように転換の推移を見ると、千島列島方面に動員された朝鮮人は、アジア太平洋戦争勃発後、北太平洋地域の覇権を狙う日米間の先制攻撃と逆襲の局面の中で、該当地域の軍備拡充のために投入されたといえる。特に朝鮮人が集中的に投入されたと推定される1943~44年は、北東方面の戦況はもちろん、太平洋戦争全体の流れが変わる時点だった。従って北千島に動員された朝鮮人は、戦況が悪化するに伴ってひどくなる動員地の暴圧的環境と米軍の攻撃という二重苦に苦しまねばならなかった。

Ⅲ. 動員過程と事件の経緯



＜図版4＞ 動員経路（※ 移動過程は番号順）

本章では朝鮮人の動員過程と、事件の具体的な経緯を見てみようと思う。動員過程については、太平丸の生存者として知られる北朝鮮の黄宗洙（ファン・ジョンズ）氏²⁾と韓国の全金夏氏の証言³⁾をもとに調べてみる。また、事件の経緯と救助過程については、遭難者救助

2) 北千島に眠る刊行会『北千島に眠る』、2002.4 (日本語版)、36頁。以下、黄宗洙氏の証言は、本書の伊藤孝司インタビューの内容を参照した。

3) 2006年2月23日、全金夏氏の自宅でインタビュー。主面談は李淵植調査官。補助面談は南相九調査官。

作業に投入された旧日本海軍の清水祥氏⁴⁾と田中貞夫氏⁵⁾の証言内容を共に見てみる。

1. 動員過程

1) 動員の時期

動員に関する文献資料は発見できなかった。しかし太平丸事件の生存者の証言を参照してみると、正確な日時は分からないが動員の時期は1944年春と推定できる。フォトジャーナリストの伊藤孝司氏が2001年から2002年にかけてインタビューした太平丸事件の生存者のうち、北朝鮮の黄宗洙氏（1926年生、江原道楊口郡生れ）は1944年5月15日に(徴用)令状を受け取ったと証言している。

また、筆者が直接インタビューした全金夏氏（1922年生、江原道洪川(ホンチョン)郡生れ）の場合は「1944年春（陰暦閏3月23日）に面事務所に連行された」と証言したことがある。⁶⁾ 当時、口述者は「(1945年) 陽暦の正月は小樽で祝い、陰暦の正月（1945年2月13日）は家に来て祝った」といっているが、「6か月の期限で行ったのに、いつの間にか1年経った」という口述をもとに推定して見ると、1944年春頃動員されたものと推定できる。⁷⁾

2) 動員方法

黄宗洙氏と全金夏氏は、共に面書記による強圧的動員を主張している。黄宗洙氏の場合は「逃げたら親に暴行を加える」と脅されたと言い、全金夏氏の場合は「面書記たちが出て来て、見つけたら当然、捕えて行く」ようだったという。

また、彼らは自身が連行されてゆく過程で、介入した人物を詳しく記憶していた。黄宗洙氏の場合は自宅から「○○」という者によって面事務所に連れて行かれた後、「○」と

4) 2005年12月26日、清水氏の函館の自宅でインタビュー。李淵植調査官面談。

5) 2006年1月25日1次、1月27日と2次にわたって田中氏の東京の自宅でインタビュー。面談者は李淵植調査官、撮影はチャン・ソッキョン主査。

6) 2006年 7月20日、電話補強調査。面談は李淵植調査員。

7) 以下、全金夏氏の証言は本報告書の付録「全金夏氏の聞き取り全文」参照

いう面書記が郡事務所まで同行し、そこで身体検査を受けて、郡書記2名と共に集結地である春川(チュンチョン)駅まで行ったという。一方、全金夏氏は郡面里の自宅から面書記の「○○」によって面事務所に連行され、2日間、旅館で過ごした後、集結地の春川駅に向かったという。

特に全金夏氏は動員過程に介入した人物の名前はもちろん、解放後、彼らが徴用から帰った者によって暴行を受けた状況までも詳細に記憶していた。これはまさしく彼らがどのような雰囲気の中で動員されたのかを推測させてくれる。

3) 動員の主体

北方に朝鮮人を動員した主体は、被徴用者の身分の分類により、陸軍関係は北方軍経理部、海軍関係は大湊海軍施設部(青森県)、そして大企業の下請けの「組」(民間の建設業者)が想定できる。

これについては2002年4月に今野東(このあずま)・民主党衆議院議員が提出した「アジア太平洋戦争時、千島への朝鮮人の連行に関する質問主意書」でも論じられたことがある。⁸⁾ 当時の今野議員の質疑は内容上、2つに大別できる。1つ目は太平丸事件に関する14項目であり、2つ目は千島地域の朝鮮人動員に関する全般的な情報と日本の戦後責任に関する10項目である。

その中で朝鮮人動員の主体と関連する質疑項目としては1-5、1-6、2-4、2-5、2-6をあげられるが、質疑内容を簡単に整理すると、次の通りである。

1-5、「朝鮮人軍属の所属は陸軍(北方軍経理部)なのか、海軍(大湊海軍施設部)なのか」

1-6、「釧路市の菅原組(代表：菅原正一)が朝鮮人軍属の動員と北千島地域の労働動員に関与したのか」

2-4、「菅原組、瀬崎組、地崎組が千島地域で担当した軍事施設の工事地域と受注額は幾らか」

2-5、「上記の民間建設業者の元請け機関は海軍(大湊海軍施設部)だけなのか、陸軍(北方軍経理部)も含まれるのか」

8) 提出者：今野東、「アジア太平洋戦争時千島への朝鮮人の連行に関する質問主意書」平成14年9月提出、質問第56号。

2-6、「朝鮮人軍属に対する給与は海軍や陸軍が直接支払ったのか、それとも工事を受注した民間建設業者が支払ったのか」

上記の質疑に対して同年5月10日、日本政府は小泉純一郎内閣総理大臣の名義で答弁書を提出した。答弁書の主な内容は「政府内に事実関係を正確に把握できる記録がなく、答弁するのが困難である」というものであった。ただ2-4から2-6に関する答弁の中で「菅原組は占守島の航空基地の防空トンネルの工事を担当した」という内容があり、この組が太平丸の目的地であり沈没地だった北千島地域の工事を担当していたという事実を確認することができた。

菅原組の存在は全金夏氏の証言からも確認される。彼は救助された後、柏原地区（パラムシル島）で一晩過ごした後、溺死者9人の火葬を目撃した。この作業を担当したのが菅原組の職員だったという。⁹⁾

この証言を根拠に、菅原組が太平丸に乗船した朝鮮人軍属を動員・管理していた中心の主体だったと断定はできない。しかしこの民間建設業者が北千島地域最大の軍事基地である柏原地区の工事を担当し、太平丸の犠牲者の火葬に参加した以上、北千島地域に割り当てられた朝鮮人の管理に直接・間接的に関与した可能性は排除できないといえよう。

結局、太平丸に乗船した朝鮮人たちの動員主体は彼らの身分、1943～44年の戦況変化とそれによる北千島地域の軍組織改編状況、そして死亡者に関する文献資料を通じて推定してみるしかない。

先に表1「アジア太平洋戦争時 北東方面の戦況変化」で見た通り、北海道以北地域の軍管区を管轄する陸軍組織は、戦況によって「北部軍→北方軍→第5方面軍」と再編されてきた。従って太平丸に乗船した朝鮮人が「陸軍軍属」と分類された以上、彼らの動員機関は第5方面軍と見られるし、給与その他の行政処理はその下部組織である北方軍経理部が

9) 菅原組の存在に言及する全金夏氏の証言を一部抜粋とすると、次の通りだ。「朝、朝飯を食べるから、どこどこに集まれと言うので出たら…ただ亡骸を全部棺に入れて、これを置いて来いと。ところがわれわれに持って行けとは言わない。先にそこに、菅原組という組がひとつあった。その組の人が来て担いで行くんだが、モッコで担いで行くのに、念仏を唱えるべきなのに。」当時、菅原組所属の工員の中には三南地方、特に全羅道地域出身が多かった、モッコを担いだのも全羅道出身者だったという。彼らの場合、同じパラムシル島で作業に動員されたが、太平丸の生存者の軍属とは別の作業場にいたようにみられる。

担当したものと思われる。

このことは、太平丸事件の死亡者に関する直接的な記録である「第5方面軍司令部(5HA司) 北方(千島・樺太) 留守名簿(以下、留守名簿)」と被徴用死亡者連名簿(旧日本陸軍在籍簿：以下連名簿)を通して確認できる。¹⁰⁾

つまり太平丸乗船者の動員主体は、編成状況からみれば、第5方面軍経理部とみることができる。しかし実際の動員や現場の作業管理の段階で民間建設業者が関与したことを完全に排除することはできないだろう。

4) 動員規模

伊藤孝司氏は生存者の証言をもとに、江原道から500名、黄海道から500名、都合1000名が小樽に動員され、彼らが結局、太平丸に乗船したと推定した。¹¹⁾

これは主に全金夏氏の陳述をもとにしたようだ。彼は筆者とのインタビューのなかでも、江原道の、郡からそれぞれ100名ずつ、都合500名が動員され、黄海道からも同じ方式で500名が動員されたと証言した。さらに彼は小樽に到着した後、彼らのうち江原道出身者は第1中隊、黄海道出身者は第2中隊に編成されたと証言した。

全金夏氏の証言をもとにすれば、同一時期に江原道と黄海道から動員された人員は1000名程度と推定できるだろう。しかしこの「動員規模」は、彼らが果たして「全員太平丸に乗船したのか」、「朝鮮内の別の地域から別の時期に動員され、太平丸に乗船した者はいなかったのか」という問題を考えれば、この「乗船者数」は変動する可能性があるだろう。¹²⁾

10) 留守名簿には死亡者の「役兵種・官等」が「技術雇員」に、連名簿の場合は彼らの階級を「雇員」に、所属を「第五方面司」と記載している。

11) 北千島に眠る

12) 本件と関連し、動員規模数は、どれだけ多くの朝鮮人が動員され、そのうち何名が乗船し、死亡したのかを明らかにするための基本的な数字である。しかし残念ながら乗船人員に関する資料が全くない状況であり、当時、動員された1000名が全員乗船したかはわからない。ただ全金夏氏の証言によれば、上記の江原道の第1中隊と黄海道の第2中隊全員が太平丸に乗船したものとみられ、これによれば、朝鮮人乗船者は最少1000名と推定することもできる。これと関連してもう一つの問題は、日本政府から移管された資料のうち、太平丸と関連した資料は先に言及した留守名簿と連名簿であるが、これらの資料には死亡者の本籍だけが記され、動員当時、あるいは死亡当時の住所は記載されていない。従って江原道と黄海道以外の地域から、別の時期

5) 動員経路

彼らの北方、北海道・樺太・千島地域への移動経路は、動員された朝鮮人が歩んだ典型的なルートだった。かれらは、各面事務所で召集された後、春川に集結し「ソウル→釜山→下関→青森→函館→小樽」の順に移動した。¹³⁾

2. 朝鮮人管理の実態

朝鮮人は日本に到着し、小樽の手宮訓練所（手宮学校）で約1か月間、基礎訓練を受けてから、山地の基地建設に動員された。彼らが受けた訓練と動員された作業の内容を整理すると次の通りだ。

1) 訓練過程

全金夏氏の証言によれば、朝鮮人は小樽に到着するとすぐに手宮訓練所に集まり、有事に備えて髪の毛と爪を切って遺品として残した後、軍服を支給され、約1か月間、基礎訓練に入った。¹⁴⁾

に動員された人がどれくらい太平丸に乗船していたのかを逆推測する方法がない。留守名簿から太平丸事件で死んだ者のうち、江原道と黄海道以外の本籍地が記載された者は計28名である（このうち厚生労働省が太平丸事件の死亡者ではないと主張した2名を除けば26名）。もし彼らが動員された当時の居住地が本籍地と一致するならば、太平丸乗船者は1000名以上になるだろう。しかし本籍地だけが記され、彼らが江原道・黄海道から動員されたのか、もしくは別の地域から動員されて太平丸に乗船したのかは、確定できない。

- 13) ただ黄宗洙氏と全金夏氏の証言での相違点は、身体検査の場所である。黄宗洙氏の場合は楊口郡で身体検査を受けた後、集結地である春川に行ったと証言したが、全金夏氏の場合は一旦、春川に集結した後、釜山で身体検査を受けたと言った。これについては各地域別に簡易検査をした後、釜山で最終検査を受けた可能性と、動員地域で独自に身体検査を行なった可能性が両方あるので、どの証言が正しいかを判断するのは困難である。
- 14) 北海道・旭川で編成された輸送部隊である「第9師団輜重隊」所属の軍曹として太平丸に乗船した今村榮三（1915年生）氏の証言によれば、日本軍は冬服を支給されたが、朝鮮人には夏服だけ支給したという（『北千島に眠る』37頁）。これは北千島地域の気候を考慮する時、ここに動員され

訓練内容は簡単な制式訓練と水泳が中心になった。陸軍軍属なのに彼らに水泳訓練をさせた理由は、アリューシャン列島の西側地域から米軍の逆襲が本格化し、千島列島に彼らの労働力を投入しなければならなかったためと推定される。

訓練は日本人とは分離して実施し、江原道出身者を第1中隊、黄海道出身者を第2中隊に編成した。

2) 作業内容

作業は基本的に飛行場建設が中心だった。パラムシル・シムシュ島にかけての柏原地区はアリューシャン列島攻撃の最前線に置かれた軍事基地であり、1943年下半期に日本が守勢局面に陥る中で、飛行場の増強が切実だった。しかし急迫した戦況の中で資材と労働力は非常に不足し、工事もごく制限された時間内で終えなければならなかった。その結果、飛行場の滑走路はセメントの代わりに松の板を並べて張る方式を選んだ。

全金亨氏と共に動員された朝鮮人のほか、それ以前に動員されていた朝鮮人たちは飛行場の地を固めて松の板を並べて張る作業と、米軍の空襲が繰り返されたために飛行機を隠すための半地下壕を建設する作業に投入された。¹⁵⁾

3) 作業環境

上記の作業は、上で言及したように劣悪な気候条件のもとで行なわれた。ところが米軍の空襲は作業をさらに困難にした。1943年7月、B-24機とB-25機が空襲を開始して以

た朝鮮人が非常に劣悪な環境に置かれたことを意味する。なぜなら、北千島地域は海洋性の濃霧によって、日照時間が南千島地域に比べて著しく短いだけでなく、10月から翌年の5月まで雪が降り、凍結した海が4月末になってやっと溶け始めるという寒帯の地域だからだ。その上、平均積雪量は1メートルを上回ったというから、夏服だけで耐えることは無理だった。

- 15) 北千島地域の軍事施設増強計画は1943年6月、北方軍が下達した「北千島に於ける施設実施要領」に集約されている。そのうち、太平丸乗船者たちが投入される予定だった柏原地区の増強計画は次の通りである。当時、拡張する施設は、飛行場、海運施設、幕舎、軍機廠、通信施設、干拓地に大きく分けられる。その中で飛行場は北の台、児山(こやま)、別飛(べつとぶ)、占守に建設する予定であり、北方軍経理部と北千島守備隊が担当や支援の部隊だった(防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書』—北東方面陸軍作戦(2) 1971. 朝雲新聞社、36,37頁、表1参照)。

来、空襲のために作業の中断が日常化した。特に柏原地区は爆撃が集中した所であり、千島で最も危険な地域に分類された。

彼らを苦しめたのは寒さと空襲だけではなく。彼らは空腹とも闘わねばならなかった。食事は100～150グラムの玄米や麦飯、そして濁ったおからの汁くらいが提供されたという。しかし鼠を捕まえて食べたり、便秘を恐れず松の皮を食べるほどだったというから、食料問題は深刻だったとみられる。¹⁶⁾



<図版5> 小樽訓練所の推定地

4) 給与

全金彦氏の証言によれば、1ヶ月の給与は150円で、当初の動員期限は6ヶ月だった。しかし故郷に帰る時、貯金通帳には2ヶ月分の月給しか入金されていなかったという。

3. 出港と沈没の経緯

今村榮三氏は「小樽を出る時から十中八九（米軍に）やられると思っていた」と出港当時を回顧した。¹⁷⁾ 太平丸が沈没する前後の千島列島地域の船舶運行状況を見ると、当時

16) 全金彦氏の場合、脚気のためにそれ以上労働をできず、小樽の病院に護送されたが、これは栄養失調と過労によるものだった。ところで同じ船に乗っていた大倉一郎（現、フェリス女学院大学教授）氏の父親は「空腹を知らなかった」と当時を回顧した。「江原道遺族訴訟を支える会ニュース」No7、1996.7.15.（『北千島に眠る』韓国語版、19頁、収録本）。これは日本軍と朝鮮人軍属がそれぞれ違う処遇を受けた可能性を示唆するもので、これが事実なら「千島地域の空腹」は朝鮮人だけと見ることができるだろう。

17) 『千島に眠る』、前掲書、38頁

下士官だった今村氏が事故を予感したのも無理はなかった。太平丸事件の理解を助けるために、当時の千島地域の船舶運行状況をまず調べて見よう。

1) 千島海域での沈没事例

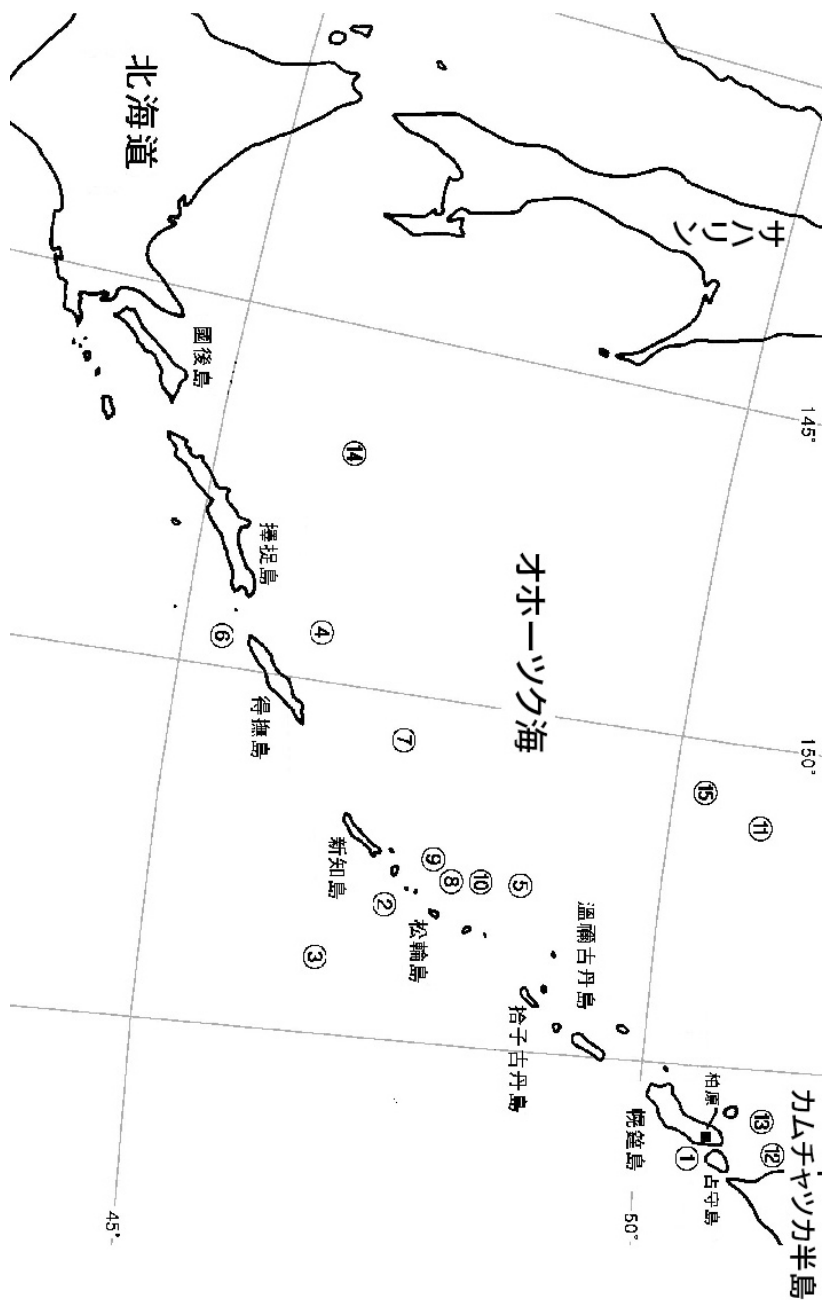
関連資料が最近、日本・神戸市の「戦没した船と海員の資料館」¹⁸⁾によって公開された。その中から千島海域の主要な沈没事故を整理すると次の通りだ。

表2を見ると1943年から始まった米軍の魚雷攻撃による輸送船の沈没が、1944年に入ると日常茶飯事になったことがわかる。太平丸事件はこのような戦況の中で、充分予想できた沈没事件だった。このような事実は表3を見ても確認できる。

＜表2＞ 千島地域の運航船舶の沈没現況

	船舶名	沈没日	沈没場所
1	豊崎丸	1943.3.25	パラムシル島付近
2	隆垂丸	1944.3.13	シンシル（新知）島とマトウワ（松輪）島付近
3	松仁丸	1944.3.14	ウルップ島発、マトウワ島方面運航中に被弾
4	明石山丸	1944.3.2	ウルップ島付近 マトウワ島に到着（3月4日）
5	良洋丸	1944.5.2	船体の浸水による放置後、魚雷攻撃（5月2日）を受け、船員9名が戦死
6	伏見丸	1944.5.3	ウルップ島南東海上
7	興東丸	1944.5.31	マトウワ島発、小樽行き運航中 北緯47.52, 東経151.02で魚雷被弾
8	北洋丸	1944.5.31	マトウワ島発、小樽行き運航中、北緯48.00東経153.00（マトウワ島南方8キロ付近）で魚雷被弾
9	岩木丸	1944.6.1	1944. 5.31、マトウワ島大和湾停泊、陸揚げ中、魚雷被弾（6月1日）
10	日振丸	1944.6.1	マトウワ島大和湾、陸揚げ準備中、被弾
11	高島丸	1944.6.13	パラムシル島出港、小樽方面運航中、被弾
12	明神丸	1944.7.5	オチェルノフスキー海上
13	太平丸	1944.7.9	小樽発、パラムシル島の柏原行き パラムシル島北北西の海上
14	八郎潟丸	1944.9.26	北緯46.32, 東経146.48で沈没
15	白陽丸	1944.10.25	シュムシュ島発、小樽行き 知林古丹島北西の海で魚雷被弾

18) <http://www.jsu.or.jp/siryo/index.html>の「戦没した船の位置」から「1、千島・アリューシャン」地域を参照



＜図版6＞ 千島列島海域の沈没船舶の分布図
(地図に表示された番号は上記表2に依拠)

表3は表2で言及された沈没船のうち、隆垂丸、日進丸、八郎潟丸に乗船して死亡した朝鮮人死亡者を示したものである。彼らの本籍を調べてみると、太平丸死亡者と異なり、京畿道をはじめ三南地方（忠清・全羅・慶尚三道）出身が相当数に達する。

＜表3＞ 沈没事故による千島地域の朝鮮人の死亡事例

	死亡者	死亡日	船舶名	死亡場所	本籍地
1	金谷榮禹	1944.3.13	隆垂丸	中千島	全羅南道
2	高公林	1944.3.13	隆垂丸	中千島	全羅南道
3	金子三喆	1944.3.13	隆垂丸	中千島	京畿道
4	大谷志郎	1945.5.15	未詳	エトロフ島	慶尚南道
5	金島鐘永	1945.5.27	未詳	中千島	慶尚南道
6	岡田正雄	1945.6.17	北進丸	シュムシュ島	[慶尚北道]
7	石田建成	1944.6.4 (*6月1日の誤記と推定)	日振丸	マトウワ（松輪）島	全羅南道
8	陳哲吉	1944.6.1	日振丸	中千島	全羅南道
9	金城和男	1944.6.1	日振丸	中千島	全羅南道
10	鹽田親良	1944.7.16	日鶴丸	千島	慶尚北道
11	金井晃	1944.9.26	八郎潟丸	ウルップ島	京畿道
12	黄村徳用	1944.9.26	八郎潟丸	ウルップ島	慶尚南道

* 出典：委員会被害真相調査システム参考資料、「旧日本陸海軍徴用船死亡者名簿」

表2と表3を通してみれば、このように頻繁に沈没事故が発生していたことがわかる。特に高い情報を扱う将校でなくても、当時の状況から、出港が危険な状況にあることを、誰もが予想できたであろう。当時下士官だった今村氏が「十中八九、やられると思っていた」と回顧したのは、緊張した戦況の中で千島海域を往き来した実務者の実感から出たものとみられる。

それでは出港から救助過程に至る、事件の経緯を詳しく見てみよう。

2) 事件の概要

上記の「戦没した船と海員の資料館」の大井田孝研究員に諮問した結果、戦時中に遭難したすべての船について、遭難報告書を作成し、船舶会社と政府に提出するようになった。

太平丸事件の調査

ていたという。¹⁹⁾しかし残念ながら、太平丸の場合、遭難報告書が残っていないため、その経緯が分からないという。ただ戦時船舶の専門家の駒宮眞七郎氏が1991年に発表した『戦時船舶史』には、太平丸の出港と沈没経緯が簡単に記載されている。その内容を見ると次の通りである。

太平丸：総6284トン。大洋海運。昭和19年（1944）7月5日14時、小樽発、柏原に向かって運航中、（7月）9日09時53分、右舷より魚雷攻撃を受け、これを回避したが、1分後再度攻撃を受け、第1弾が右舷船橋下に、第2弾が1番倉庫に命中、浸水により船体が急に右側に25度ほど傾いたまま沈没し始め、10時05分すべての船員に退船を命令した。そして10時45分、船尾を垂直に立てたまま、全没した。乗船中の第91師団関係の兵員の他1812名のうち902名、船員54名が戦死。沈没位置は北緯51度23分—東経155度48分（北北西120キロ付近）。

3) 出港時刻

現在、日本政府の公式資料が確認されていない以上、上記の『戦時船舶史』の記録をもとに事件の経緯を再構成するしかない。しかし『戦時船舶史』がどのような原資料を根拠に刊行されたのかが分からないので、生存者の証言とともに他の記録などによって事実関係を比較検証する必要がある。

まず、太平丸の出港日時を調べて見よう。

A：『戦時船舶史』—「7月5日14時」

B： 全金夏氏 —「5月4日晚」

C：『駆逐艦曙便り』（1979.10.7）—「7月初旬黄昏」²⁰⁾

上記のA、B、Cの資料を見ると出港日はAとCが、出航時間帯はBとCが近接した内容になっている。ところでこれらの共通部分を抽出してみると、「7月初旬もしくは5日夕

19) 2005年10月26日資料館でインタビュー。面談は李淵植調査官、撮影は李グァンホ調査官が担当した。

20) 『駆逐艦曙便り』は終戦後、曙に乗船していた旧海軍軍人たちの親睦会誌であり、戦争当時の回顧などを収録した非営利刊行物である。上記の出港記事は74—75頁を参照。

方頃」という仮想のデータが出てくる。これをもとに各資料の問題点を検討すると、次の通りである。

A資料の場合は、唯一出航時間を昼の時間帯と記している。ところが当時、駆逐艦・曙に乗船していた高清水祥氏の証言によれば、北千島地域にゆく輸送船は大概、夕方の時間帯に出港し、翌日の夜明け頃に北海道と樺太の間の宗谷海峡を通過する運航パターンを取ったという。だから、昼の時間帯に出港したという記録は事実と違うと主張した。このような内容は全金夏氏の証言からも確認できる。彼は出港日が「4日」という点と晩の時間帯に出発したことを正確に記憶していると主張した。彼がこのような事実を長く記憶できたのは、出航時間をめぐって同僚と言い争った鮮明な記憶があったからである。すなわち同僚は「4日は死の字だからと言って、明日の夜明けに死ぬ」といったが、全金夏氏は4日の晩に船が動いているのを見て「今、船が出発しているのに何をいう」と言い争ったという。

それなら問題は、全金夏氏がなぜ出港の月を5月と記憶していたのかという問題が残る。筆者はこれについて、二つの可能性を想定して見た。一つは全金夏氏個人の記憶上の誤謬であり、²¹⁾ もう一つは生存者の調査時によくある暦の問題である。

筆者は二番目の可能性に重きをおく。なぜなら、動員された朝鮮人は既存の習性上、陰暦で日付を数える場合がほとんどだったし、現在も過去を回想する時、陰暦の節気を基準に答える場合が多いので、それによる差が発生することがある。それでも問題は、どうして2ヶ月も差が出るのかということである。

これについて筆者は、1944年が閏年だったことに注目したい。陽暦で1944年5月に閏月が入り、陰暦では4月が2回入ることになる〔1月、2月、3月、4月、閏4月、5月...〕。その結果、出港日と推定される1944年7月5日は陰暦で5月15日になる。それにもかかわらず、これを補正するには、10日間の誤差が発生する。全金夏氏の証言での出港の月は誤りであり、証言では出港時の状況を理解できる。

資料ごとに欠点はあるが、上記の資料を総合すると、太平丸の出港日時は「1944年7月

21) 『北千島に眠る』韓国語版に収録された『江原道民日報』(1995.8.11.)の記事は「1944年5月4日、北海道小樽市で太平丸に乗り、途中で翌日、魚雷2発を受けて沈没直前に脱出した」と全金夏氏のインタビュー内容をそのまま載せている。その結果、韓国内では太平丸の出港日と爆沈日が、この間、誤って伝えられて来たが、同書の日本語版では編集委員会が補注によって「出港日は7月5日で沈没日は7月9日」と訂正を記している。

4日若しくは5日夕方」くらいと推定できるのではないか。

4) 出港時の状況

『戦時船舶史』の場合、事件の概要が一目瞭然に整理されているが、具体的な状況が抜けている。従ってこの部分については証言と他の資料に依存するほかないが、まず全金夏氏の証言を参照すると、次のようになる。

全金夏氏は「7月4日、陽がみな沈む頃、人々が乗船したが、朝鮮人と日本人が別々に列に並んで乗船した」といい、「太平洋丸の前と両側に駆逐艦がいて、後にも食糧を積んだような船が1、2隻、そして空には飛行機がいた」と回顧した。²²⁾

ところで、全金夏氏の出港状況についての記憶は、他の記録を参照すると、驚くほど正確だった。これについて『駆逐艦曙便り』(1979.10.7.)は、「駆逐艦「曙」、「潮」、「薄雲」の護衛によって輸送船太平洋丸(1万トン級)外4隻の船団が、7月初旬の黄昏頃小樽港を出港したと書いている。これに関する記録は、朝鮮人とともに乗船した第91師団輸送隊(正式名称は第91師団輜重隊)の第2中隊長だった八反田政男の証言からもうかがえる。彼の回顧によれば「信濃丸、太平洋丸、梅川丸、海軍の第2真興丸の順で運航し、駆逐艦曙、潮、薄雲が護衛し、(上空では)航空機も護衛していた」という。²³⁾

上記の内容を総合すると、太平洋丸には江原道と黄海道から動員された朝鮮人軍属²⁴⁾と第91師団輸送隊、そして補充兵隊および乗務員達が乗船し、駆逐艦を含めて7隻が船団を組んで出港したとみられる。²⁵⁾

5) 沈没の状況

太平洋丸の沈没原因は米軍の魚雷攻撃とされている。関連証言によって沈没当時の状況

22) 2006年 7月19日、電話補強調査。電話は李淵植調査官。

23) 『北千島に眠る』38頁

24) 上記の電話補強調査時の全金夏氏の証言によれば、朝鮮人は目的地を知らない状況で乗船したという。

25) 2006年7月18日の清水氏との電話補強調査によると、この中でも駆逐艦薄雲は太平洋丸より1日若しくは2日前に魚雷攻撃を受けて沈没し、その後に太平洋丸が沈没したので、最終的に計5隻がパラムシル島に到着したという。面談者は李淵植調査官。

を調べてみよう。

A：黄宗洙一(沈没前)船の倉庫には弾薬、火薬、軍需物資がぎっしり積まれていて、その隙間にわれわれを詰め込んだ。天井に大きな穴があって、そこから人々が出入りした。...数日前、駆逐艦1隻が沈没して将校が多数死亡したから、弔慰金を出せという話を同僚と聞いた。その時、外から「グァーン」という音が聞こえ、汽笛が2回「ポーッ」「ポーッ」と鳴ると同時に、われわれの前に火柱がそびえ立った。

B：全金亓一船の大体の構造は、一番下の機関室を基準にその上に1階(日本人乗船)、2階(朝鮮人乗船)、そして便所と食堂がある甲板からできていた。甲板をはじめ人々が乗船した所にも空いた空間には各種の品物がぎっしり積み上げられていた。「グァーン」という音がして船がパッと回転したが、再度、他の方向から「グァーン」という音がして、魚雷攻撃を受けた。魚雷が当たった場所は朝鮮人と日本人が乗っていた間と推定される。朝鮮人より下の方に乗船した日本人の死亡率が高かっただろう。

C：『駆逐艦曙便り』一太平丸に敵の魚雷が名中、怪音と共に火柱が上がり船首が沈みはじめると、船尾のスクリューが水面の上に上がった。その後、甲板で無我夢中に機関砲を滅多矢鱈撃ちまくる船員が一人いた。

一方、遠く空中に飛んで行く者、水に飛びこむ者、草でもつかむ要領で水面から出たり入ったりして浮遊物につかまる姿は、まるで水に溺れたネズミが助けを待つような姿だった。これを見守りながら、敵の潜水艦に対する爆雷²⁶⁾ 攻撃に入った。この虚しさ！悲惨な光景は何とも表現できない修羅場だった。

再度、敵潜水艦からの攻撃を恐れ、薄雲が沈没した後、曙、潮の2隻の駆逐艦は爆雷投下を開始した。各艦艇から数十発程は投下しただろう。しばらくして「軽油浮上確認」「投下中止」「救助開始」の合図が上がった。

D：鳶龍源²⁷⁾一私たちがいた船倉の近くに徴用された朝鮮人軍属たちがいたが、敵潜水艦から発射された魚雷が命中したようだった...(必死に甲板まで上って見たら)「アイ

26) 爆雷は潜水艦や潜水艇を攻撃するために作った爆弾で普通、甲板から海に投下すると一定の水深で水圧によって、あるいは特定の物体にぶつかる時に受ける外部圧力によって爆発する武器である。

27) 『北千島に眠る』39頁から再引用

太平丸事件の調査

ゴ、アイゴ」と絶叫する声が聞こえ、2人の朝鮮人を甲板に引き上げた。船は船首から沈んで行った。「グワーン!」という大音響と共に水柱が上がったが、空中へ舞い上って行く人の体が見えた。駆逐艦が沈没地点の周りを回り、上空には飛行機が飛んでいました。

E：今村榮三「午前10時4分頃「魚雷発見!」という声を聞いた。救命ボートに乗って、周囲で浮かんでいる人を引き上げた。救助の終わる午後2時頃、水上に浮く箱に入っていた日本酒をみなで回し飲みして体を温めていた。駆逐艦から300馬力のモーターボート2隻が送られて来て、漂流していた人たちを次々と救助した。」²⁸⁾

以上の証言と『戦時船舶史』の内容を総合してみると、太平丸は1944年7月9日午前10時前後に、米潜水艦の魚雷で沈没した。ところが、被弾時間については資料により、あるいは証言者により若干の誤差がある。従ってこれについて正確な調査をするためには、太平丸を攻撃した米潜水艦の撃沈資料が必要である。

現在、特定の潜水艦に言及した資料は『北千島に眠る』が唯一である。この資料は撃沈電文を根拠に、米海軍所属の潜水艦サンフィッシュ（Sunfish）号が太平丸に魚雷を発射したと記載した。撃沈電文のうちサンフィッシュ号に関する情報を摘示すると次の通りである。²⁹⁾

＜表4＞ サンフィッシュ号撃沈電文

DtHR	Submarine	Pt	Position	Tgt	Size	Attack	Cl	So	Date	Type	Name	Tons	Dm	Location
9/11	281Sunfish	7	51-17 N 155-34E	AK	7500	T2/3DUP	S	AIJ	9	A-AK	Taihei M	6284	8	51-19 N 155-43E
9/11	281Sunfish	7	51-17 N 155-34E	AK	6600	T2/3DUP								

上の資料から魚雷の発射日と攻撃当時の潜水艦の位置、そして発射対象などを見ると、太平丸の沈没日と場所が、ほぼ一致している。しかし問題はこの電文の出典や資料の所蔵箇所が記録されていないという点である。これについては米海軍関係文書に関する調査が求められる。また、太平丸に魚雷を発射した潜水艦がサンフィッシュ以外にもいた可

28) 同上書39頁から再引用

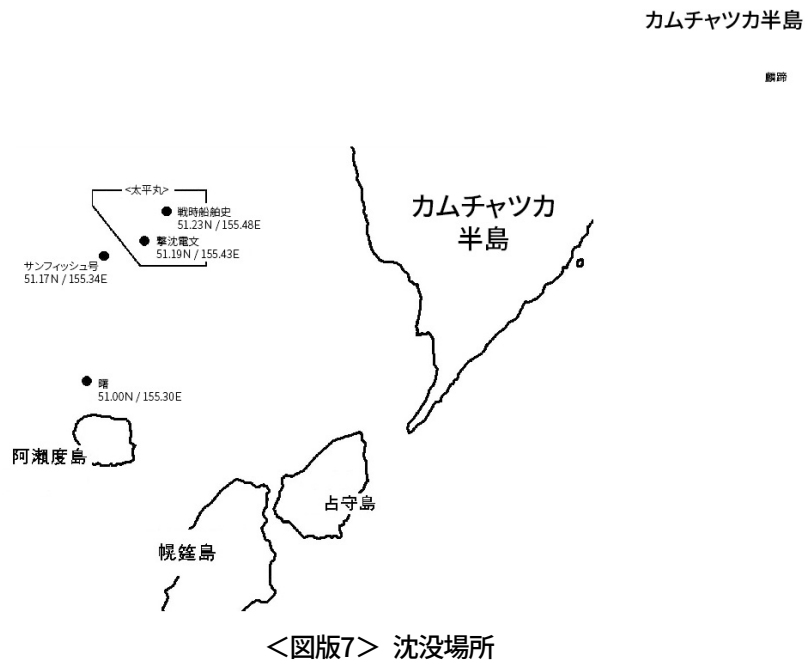
29) 同上書7頁

能性も排除できない。この問題については、本調査では調査期間と予算などを考慮して省略したが、補強調査が必要である。

(〔日本語版追記〕米海軍関係文書について原資料は、「SS-281, USS SUNFISH Submarine War Patrol Report」である。この資料は、米海軍史編纂機関 (Office of Naval Records and History) と米海軍出版印刷所 (NPPSO) が、マイクロフィルムの形で保存・管理してきたが、トータル456枚の哨戒・偵察報告書の全文が、2009年2月から全文がオンラインで公開された。(https://issuu.com/hnsa/docs/ss-281_sunfish))

6) 沈没場所

沈没地に関連する資料を見てみよう。



A. 太平丸

ア. 留守名簿一北千島・阿瀬度島北方50キロ

イ. 『戦時船舶史』51.23N／155.48 E1、パラムシル島北北西120キロ付近

- ウ. 「撃沈電文」 51.19N／155.43E②
B. サンフィッシュ号：「撃沈電文」 51.17N／155.34E③
C. 曙：51.00N／155.30E④³⁰⁾

上の資料を見ると、沈没船・太平丸と魚雷を発射したサンフィッシュ号、太平丸を護衛していた駆逐艦・曙丸の位置を北緯51度／東経155度周辺に集約することができる。

ところで、問題は上記の東経が被弾当時の各船の位置なのか、沈没後の位置なのか、両者が混じっているのかを確認する方法がない。また、被弾した太平丸が運航中だったならば、既存の運動速度により被弾後に移動する可能性もあり、海底に沈む途中に、あるいは沈んだ後にもこの地域の海流によって、最初の沈没地から移動した可能性もある。

従って現場探査が行われていない現在の状況で、現在の沈没地を推定することは無理が伴う。ただ阿頼度島を中心に半径100キロ内外の近隣海域に沈没したものとみられる。³¹⁾

4. 事故の収拾経過

1) 救助経過

事故直後、太平丸を護衛していた駆逐艦・曙は爆雷攻撃を試みたが、すぐに救助作業に投入された。『駆逐艦曙便り』は救助当時の状況を次のように記している。

「本駆逐艦内は、端から端まで救助された人たちでいっぱいになった。外部気温は摂氏5～6度になろうか。われわれ(救助)作業員たちは防寒具を身にまとっていたので作業が容易でなかった。海水の温度は1度くらいだったか。³²⁾ 救助ボートに救助されニッコリと笑って上がって来て、すぐに首をうなだれる者も少なくなかった。気を取り戻せと頬を

30) 曙丸の位置は清水水氏が提供した資料を参照した。

31) 前掲書75頁参照

32) 当時、曙丸で救助作業に投入された旧日本海軍の田中貞夫氏の証言によれば、当時、海水の温度は非常に低いとの記憶であったが、後に他の同僚の話を知ると、実際の温度は13度ほどだったという。太平丸が沈没するわずか1～2ヶ月前でも、この海域には流水があちこちに浮かんでいて、運航が容易でなかったそうだ。

殴った時に、興奮した奴は、多くがそのまま命拾いした。³³⁾

どこの陸軍部隊か知らないが、軍の将兵と朝鮮人も乗っていた。彼らに毛布を与えたら、それを体にぐるぐるまき、スチームに体をぴったり付けたまま、体をぶるぶる震わせて、われわれに「兵隊さん、ありがとう、アイゴ、アイゴ」³⁴⁾ と言っていたのが、今でも耳に鮮やかだ。

太平丸は攻撃を受けて30分くらい過ぎた頃から、船尾のスクリューを水面の上に立てて静かに沈んだ。その後、救助作業は急速に展開され、1時間くらいかかっただろうが、水面に浮き沈みして いる死体の周囲を右回りに3周して冥福を祈った…(後略)」

一方、全金夏氏の証言によれば、事故当日、波が高くなく、そのため死亡者が減ったという。彼は船が沈没した直後、上空に飛行機が飛び、遠くで船が黒い煙を吐きながら近付き、敵の船かと心配したが、その船が救助船だったという。彼は救助船が下ろしてくれたボートに救助され、甲板に上がり、体を温めながら機関室に案内され、そこで貰った乾パンで飢えをしのいだという。

2) 生存者の処遇

『駆逐艦曙便り』の記録によると、曙丸は太平丸の生存者をパラムシル島の対岸にあるシュムシュ島に降ろし、3～4日後(シュムシュ島の)片岡港を発った。この事実は黄宗洙氏の証言にも出てくるが、彼は救助後、シュムシュ島で石材や砂利採取の作業に投入されたという。³⁵⁾

ところが、全金夏氏の証言には少し違う内容がある。彼によれば船が沈没した後、生存者の救助には3～4時間ほど要したし、乗り替えた船は約半時間運航し、ある島に到着したという。その島で服を着替え一晩過ごした後、江原道出身の犠牲者が多かったため、彼らを黄海

33) 言いかえれば、頬を殴っても反応しなかった人たちはそのまま命を失ったということになる。

34) 田中氏の証言によれば、曙丸はほぼ350人程度が乗船できる規模だったが、救助当時には甲板上は人がいっぱいいて、少なくとも600名以上が乗船したという。そして救助された者の中には20代前後に見える朝鮮人が相当数いたが、彼らから意味は分からないが「アイゴ、アイゴ」という言葉を数多く聞いたという。

35) 『北千島に眠る』40頁

道中隊に吸収して1個中隊に再編成した後、再び船に乗って向かい側の島に行ったという。
この島がパラムシル島であり、そこでずっと飛行場の滑走路の作業をしたという。



<図版8> 柏原地区の位置

従って上記の内容を総合すると、事故直後、彼らはシュムシュ島に到着し、翌日、パラムシル島の柏原へ輸送されたと推定される。ただ、シュムシュ島とパラムシル島が非常に近い距離にあるため、彼らがずっとパラムシル島で作業をしたのか、あるいは、シュムシュ島と行き来して作業場を移動したのかは分からない。

3) 事故の規模と死亡者の処理

太平丸事件は、事故の存在は文献と証言により明らかにされたが、重要な点、つまり事故の核心内容といえる乗船者と死亡者数は明確になっていない。文献と証言に出てくる

乗船者と死亡者の推計を整理すると次の通りだ。

<表5> 太平丸沈没死亡者推定表

	資料	乗船者総数	死亡者総数	朝鮮人乗船者	朝鮮人死亡者
1	厚生労働省	未詳	902	未詳	182
2	工藤守夫	2200	1300	450	未詳
3	今村榮三	未詳		650以上	乗船者の半数
4	奥野一男	2000	乗船者の半数	未詳	未詳
5	戦時船舶史	1812	956	未詳	未詳
6	全金夏	3000	1500以上	1000	500前後

* 出典：1 番は2002年 5月10日国会答弁資料、2.3.4 は『北海道新聞』1996.11.18「太平丸沈没 強制連行、朝鮮に多数の犠牲」参照

表5で見ると、太平丸事件は乗船者の規模さえ明らかでないのにもかかわらず、死亡者の推計は「乗船者の半数」と整理されている。従ってこのような資料状況では、正確な死亡者数を推定するのは難しい。

ところで太平丸に直接乗船して救助された今村榮三氏と全金夏氏が共に、朝鮮人乗船者の半数が死亡したと主張していることから、死亡した朝鮮人は日本政府が認定した182人から500人の間と推定できるだろう。しかし余りに最大値と最小値の偏差が大きいのので、この推計には大きな意味がない。

一方、この事件は乗船者数と死亡者数が迷宮に陥っているが、死亡者の処理に関する資料も皆無の状況である。これは既存の証言資料でも同じである。そこで筆者は全金夏氏とのインタビューによって、事故直後の死亡者処理の経過と彼らの遺骨の送還経過について調査した。主な内容を整理すると次の通りだ。

全金夏氏がシュムシュ島に到着した翌日の朝食後、朝鮮人に「全員集まれ」というので行って見ると、屍を入れた棺がずらりと置かれていた。死体はすべて朝鮮人もので、皆で9体あり、棺を山の上まで運搬したのは菅原組の人たちだった。彼らは大部分が全羅道地域の言葉を喋り、1棺ごとに前後に2名ずつモッコを担ぎ、山上に置いてどこかに消えてしまった。そのため、火葬作業は朝飯時間に集まった50名余の救助された朝鮮人が木の枝を集めておこなったという。

太平丸事件の調査

この内容では、収集された死体は何体なのかは分からないが、一旦シュムシュ島まで輸送されてきたと推定される。そして日本人の死体と朝鮮人の死体は別々に処理されたとみられる。

他方、死亡者の遺骨は解放直前に送還されたようだ。全金夏氏が故郷に帰って間もなく、面事務所に「灰の袋」が届いたと連絡が来て、村の人たちと行ってみると、小樽の訓練所で切った髪の毛と爪ではなく「もちの粉のような砂」が入っていたという。このような事実から見ると、当時の遺族に渡されたのは本当の遺骨ではなく、事故地の土や砂だったと推定される。

Ⅳ. 太平丸事件の被害申告の現状と 死亡者数資料の検証

この章では、本委員会の被害真相管理システムによる事件関連の被害申告の事例を調べ、その後、死亡者の推計と関連して、委員会の認定資料と日本側の説明資料の批判的検討をおこないたい。

1. 事件関連の委員会への被害申告の現状

1) 分析の趣旨

ここでは次のような趣旨から太平丸事件関連の被害申告の現状を検討したい。

第一に、国内唯一の生存者として知られる全金夏氏以外の生存者を発掘して調査内容を補強する。

第二に、生存者および死亡者の遺族が直接作成した被害申告の内容を検討することでより豊富な事実を発掘し、既存の文献資料や口述資料の内容と比較し、検証する。

第三に、国内の生存者および遺族がこの事件をどのように記憶しているのかを検討し、「事実」と「記憶」の間に存在する問題点を検証する。

2) 委員会への被害申告処理システムの特性

上記の趣旨のもとで、筆者は3ヶ月間、中央委員会の電算システムによって太平丸事件の被害申告の現状をモニタリングした。しかし筆者はシステム活用の過程で、はじめから難題に直面した。これについて、読者の理解を助けるために、本委員会の組織構成と被害申告電算システムについて、簡略に概説しようと思う。

まず本委員会は大きく見て、中央委員会と各地方市道実務委員会で構成されているが、申告者は上記の組織のうち、どの機関でも被害申告を受け付けられる。³⁶⁾そして被害申告調査システムは、処理段階別に「被害申告 – 被害調査 – 事実確認結果 – (意見

書) – 審議調書 – 審議議決 – 決定通知」の順に進行する。³⁷⁾

各被害申告の件は、基本的にこの過程を通して、最終的に申告者に決定通知書が発送される。ところで、地方の実務委員会受付分の場合「審議調書」段階を基準に、それ以前の段階は各地方で、それ以後の過程は中央で処理するという2重の構造になっている。

3) システム活用上の問題点

このようなシステムは本件の被害申告の調査に直接的な影響を及ぼす。なぜなら、本委員会の電算システムは、「審議調書」段階を前後し、モニタリングできる項目数を変えて、指定するからだ。敷衍すると「審議調書」段階以前には「受付現況」を、以後の段階では「結果現況」を確認でき、「受付現況」段階では「生存の有無、性別、動員地域、動員類型、動員年度、申告事由」だけを閲覧できる。しかしこの段階では動員地域が「国内」と「国外」にだけ区分され、資料整列時に発生する多くの不要なデータを、手作業でフィルタリングしなければならない困難にぶつかる。

その反面、「結果現況」段階では「動員地域」のうち、国外地域をより細分化して検索でき、併せて各地方市道実務委員会に添付した資料を参照できるようになる。従って太平丸事件の場合もこの段階に至って、初めて「ロシアその他」の項目の中からデータを抽出でき、本件の申告者、申告内容、そして各市道実務委員会から移管された各種の資料を活用できるようになる。

しかし、筆者が「結果現況」段階で確認できた「ロシアその他」地域の被害申告は、全部で19件に過ぎず、太平丸事件関連の申告は皆無だった。³⁸⁾

36) しかし2005年12月1日から2006年6月30日まで実施された第2次被害申告の受付は、各市・郡・区単位でだけ施行された。

37) ここで言及した地方の市道実務委員会は16の市道単位とその傘下の市・郡・区単位に分かれており、市・郡・区では「第1次被害調査と事実確認」の作業が行われ、これをもとに各市・道単位では「意見書」が作成される。以上のデータをもとに各申告が中央の委員会に移送されると、「審議調書」作成以後の作業が行われる。

38) 仮に太平丸事件関連の申告事例は確認できなかったが、「結果現況」段階で確認可能な個別のデータの活用の可能性は非常に高いと思われる。上の19件のうち、本報告書3-3で言及した千島地域の沈没事例のうち、八郎潟丸に乗船して死亡した朝鮮人「海軍軍属」の被害申告は、水

このような結果が出たのには、大きく3つの要因が作用した。それは第1に、総被害申告件のうち、「結果現況」段階の電算資料で確認できる審議調書作成の完了件数が、2006年7月25日現在で10%未満という点、第2に、本委員会の被害申告処理電算システムが基本的に申告者の被害判定作業に焦点をあわせて構築されている点、第3に、太平丸事件の調査担当者と各被害申告の審議調査担当者（個別申告件）が分離³⁹⁾ されているという点である。

現状でこのような問題点を克服できる方法は、一旦すべての被害申告についての審議調書作成が完了した時点で、特定事件に対して真相調査を行なうことである。しかし、各真相調査の関連者が老齢である関係から、やむなく真相調査と審議調書の作成を並行するほかないのである。⁴⁰⁾

4) 申告現況の確認方式

結局、筆者は検索領域の最も基礎的な項目である特定人の名前と地域を入力し、被害申告および委認定資料の現状を確認するという、最も原初的な検索方法を選ぶことに

原、大田、釜山でそれぞれ2件ずつ確認された。のみならず太平丸の生存者が初めに到着した片岡港付近やパラムシル飛行場で働いた「労務動員」の被害申告事例が、忠清北道永同郡で2件確認された。これは本報告書では、太平丸事件だけを扱っているが、結果段階での資料を駆使できるようになると、千島地域に動員された朝鮮人「陸軍軍属」「海軍軍属」の労務動員の事例をより総合的に考察することができ、千島地域への朝鮮人動員に関する全体像を描き出せることを意味する。しかし2006年7月25日現在、江原道地域の受付は7497件で、この中で中央委員会へ送付された件は1060件である。そして「結果」段階の資料に接近可能な件は298件にすぎず、「ロシアその他」地域の場合は皆無の状況のため、残念ながら本報告書の作成過程では、このシステムを十分に活用できていない。

- 39) 各審議調書の担当者はそれぞれ軍人、軍属、労務、慰安婦などと被害類型を分け、特定の事件と関係なく各申告の「被害事実」を明らかにするのが主な業務である。したがって自分が担当した申告の特定事件、つまり太平丸事件と関連があるかないかは、副次的な問題である。このような担当者の不一致問題は、審議調書が作成されてから電算システムを通じて太平丸担当者が該当事件関連者をモニタリングする前までは、解消する方法がない。すなわちこの段階では、各審議調書の担当者がオフラインで、特定事件の担当者に個別の情報を通知するしかない。
- 40) これは太平丸事件だけを見てもわかる。筆者が本件に関する調査を行なった、わずか1年あまりの期間内に、真相調査申請人と旧日本軍出身の証言者1名が死亡し、本委員会の電算システムによってようやく発掘した生存者も、やはりインタビュー日程を決めるなかで死亡した。

なった。

ところが、どのような原資料をもとに事件関連者の情報を抽出するかという問題にぶつかった。これを解決できる最良の方法は、国内もしくは日本で太平丸乗船者名簿と遭難報告書を入手することである。しかし先にも見たように、該当資料の存在さえも分からない状況だったので、全金夏氏が作成した名簿、委認定資料などから本籍地と動員地をもとに抽出した名簿、江原道地域の被害申告のうち「軍属」の申告者名簿をもとに検索してみた。

5) 全金夏氏作成名簿での申告の件

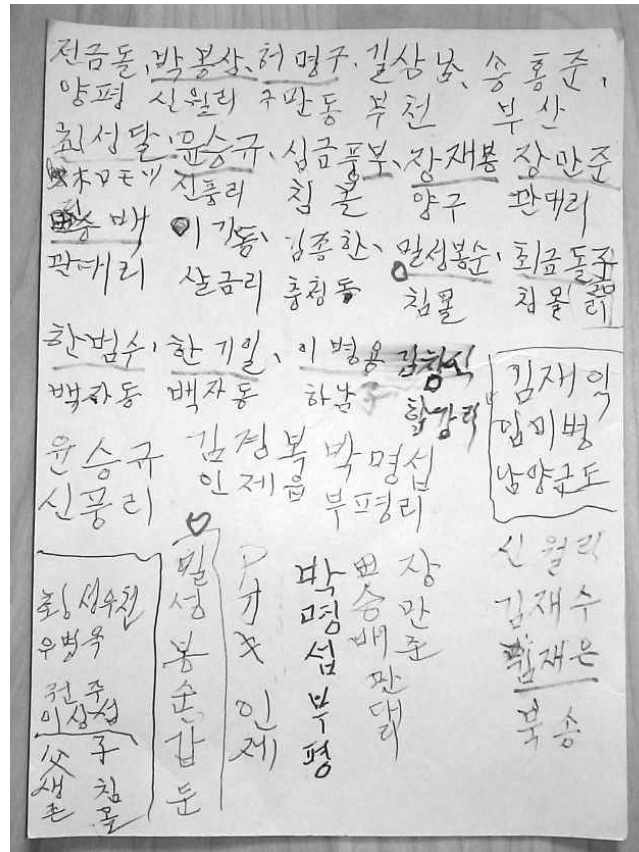
まず全金夏氏が提供した名簿の検索結果を検討すると、彼と一緒に同じ地域に動員された総数29名中「倭政時被徴用者名簿」に記載された者は4名であり、彼らによる被害申告はほとんどなかった。一方、被害申告を受け付けた者は、全金夏氏を含めて全部で4名であり、彼らに関する委認定資料はなかった。⁴¹⁾

しかし幸いなことに彼ら4名の申告書の中には、全金夏氏の証言を裏付ける情報の他に、新しい事実関係の情報も含まれていた。特に、吉サンナム氏の被害申告書と口述聴取報告書が、事件調査の助けになった。⁴²⁾

全金夏氏は口述の過程で、本人以外にも生存者がもっといるはずだと明かした。その時言及された人物のうちの一人が、まさに吉サンナム氏である。全金夏氏は吉サンナム氏について、動員当時の住所と年齢などを正確に記憶していた。したがって吉サンナム氏の口述内容は、全金夏氏の証言を補強するのに非常に重要な意味を持つ。吉サンナム氏の主な口述内容を検討すると、次の通りである。

41) 彼らの受付番号と被害者名は次の通りである。ソウル広津区(クァンジン) - 407吉サンナム、江原道麟蹄(インジェ)郡-264金チャンシク、江原道麟蹄郡-286全金夏、京畿道楊平(ヤンピョン)郡-257チョン・クムドル。

42) 口述聴取者は、ソウル・広津区庁の行政7級の朴ピョンギ氏で、聴取日時は2005年5月10日だった。ところが残念な事実は吉サンナム氏が、この陳述直後の2005年11月に死亡したため、筆者が直接深層インタビューをする機会がなかった。しかし口述聴取報告書が非常に細かく作成されていたので、事実関係を確認するのに大きな助けとなった。



＜図版9＞ 全金夏氏が提供した麟蹄郡の動員被害者名簿

口述聴取報告書によれば、吉サンナム氏の所属部隊は「北千島（シュムシュ島）北方派遣軍第100部隊」で、部隊長は「キムラ〔木村〕ダイ」という日本人だったそうだ。これは全金夏氏の証言からは得られなかった、新しい情報だった。

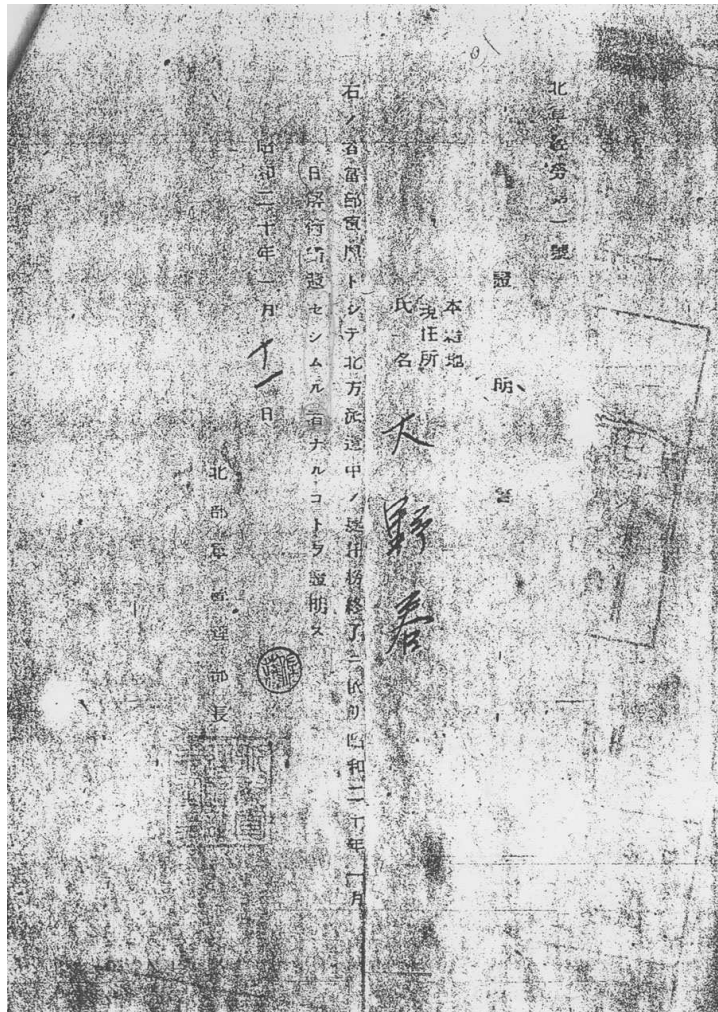
併せて全金夏氏の証言と一致する事実も多い。すなわち、吉サンナム氏は、郡庁で集結して、共に動員された崔ソンドルという人物に言及したが、この人は全金夏氏が作成した名簿からも確認できた。それだけではなく、(彼は)動員当時、日本の警察と一緒に来た〇〇という面書記を正確に記憶していたが、この人物は全金夏氏の証言でも登場する。その他でも動員過程、動員地の状況、帰還経過についての証言が、全金夏氏が口述した状況と非常に似ていた。

その他に金チャンシク氏とチョン・クムドル氏の申告書には、千島地域に動員されて行く途中、魚雷攻撃によって船が沈没した事件の経緯が明記されていた。しかし上で見た被害申告書と「倭政時被徴用者名簿」は、動員時期と帰還日時に多くの誤謬が発見され、ごく断片的な事実だけを言及したケースが多く、調査に限界があった。ただ、全金亙氏が提供した名簿から、少数ではあるが、被害申告者と委認定参考資料記載者が確認されたことは、彼の証言が相当な信頼度を持っていることを示唆するという点で意味があった。

6) 委認定資料から抽出した申告の件

一方、委認定資料をもとに検索した事例としては、チョン・クムベ氏（京畿道安山市-234）がいる。チョン・クムベ氏の場合は「被徴用死亡者連名簿」から死亡事由に「海没（太平丸）」と記載されており、「第5方面軍留守名簿」にも死亡日が「(昭和)19年7月9日」と正確に記載されている。この事例は、委認定名簿に記載されたほぼ200名に達する死亡者のうち、実際に被害申告が受け付けられた件という点に意義がある。

しかし、死亡者と生存者を問わず、委認定名簿に明確な証拠資料がある場合は、むしろ被害調査内容が簡略化していた。被害判定の根拠になる明確な証拠があるから、それ以上の被害状況の詳しい調査はいらないからである。これは中央委員会や地方の市道実務委員会でも同じような状況だった。このような状態になった理由は、先にも言及したように、委員会の全般的システムが特定件の真相調査でなく、申告人の個別被害の判定にあわせて構築されたからだ。その結果、1次被害調査を担当した市・郡・区の職員や中央委員会の審議調書担当者は委認定資料がある申告については、被害者判定に至るまでの行政処理をできるだけ早く進めるために、被害の経緯や状況などの具体的内容を検討しなくなってしまうのである。こういうアイロニカルな状況により、真相調査の担当者は逆に、証拠書類があって被害申告が受け付けられたという良質の事例を収集することが難しくなった。



＜図版10＞ 朴ギョンソク氏が添付した北方軍経理部の
召集解除の証拠文書

7) 審議調書の作成過程で入手した申告の件

これは生存者として被害申告を受け付けた朴ギョンソク氏（京畿・高陽市－708）の事例からも確認できる。⁴³⁾

43) 朴ギョンソク氏の受付の件は、中央委員会の審議調書の担当者を通じて入手した。これは筆者

1944年3月(陰暦と推定)、郡から動員された朴ギョンソク氏は、動員時期、動員経路、動員時の状況などが、太平丸事件と一致している。さらに朴ギョンソク氏は被害申告の受付時に委認定資料がなかったので、1945年1月11日北方軍経理部長が発給した召集解除証明書を添付した。この書類は太平丸に乗船した動員朝鮮人と関連するものであり、調査に重要な端緒を提供する非常に貴重な資料である。

にもかかわらず、朴ギョンソク氏の場合、彼が書類に記録された創氏名を大野春と改名した証拠書類がなく、審議調書の作成が容易でない状態である。この時、審議調書の担当者は「被害判定」が主な業務なために、担当者にとって、この件で最も重要な資料は「創氏と関連した証拠書類」となる。しかし、真相調査担当者である筆者としては、朴ギョンソク氏が全金夏氏以外に新しく明らかになった生存者⁴⁴⁾であることから、北方軍経理部の役割に関する証言などに関心を持つことになる。

本委員会の「被害判定」と「真相調査」業務が二律背反的な矛盾関係に陥り、真相調査にとって大事な被害申告を把握できないことがおきるのである。

8) 江原道地域の「軍属」の申告の件

最後に本委員会の電算システムから、江原道地域で受付けた「軍属」関連の申告をすべて検討してみた。その結果、上記の受付け以外に太平丸に関連した申告と見える3名の申告書を確認できた。⁴⁵⁾

まず「倭政時被徴用者名簿」「第5方面軍留守名簿」「被徴用死亡者連名簿」に記載されたチョ・ナミュン(創氏名:豊谷南允)氏の申告内容と春川市で調査した電話調査報告書をみると次の通りである。

が本件の調査過程で審議調書担当者から入手した唯一の事例である。

44) 朴ギョンソク氏に聴力に問題があり、筆者は婿を通じて間接インタビューを試みた。その結果、朴ギョンソク氏が記憶している事件の内容が、筆者が調査した結果と一致しており、自分が乗船した船の名前「太平丸」を正確に記憶していた。全金夏氏以外の証言者のうち、船の名前、動員地、動員時期を正確に陳述したのは、朴ギョンソク氏が初めてだった。電話調査の日は2006年7月27日。

45) 被害者名と受付番号はチ・ユンシク(江原道-88)、チョ南允(江原道-830)、沈ソンボン(江原道・麟蹄郡-119)。

IV. 太平丸事件の被害申告の現状と死亡者数資料の検証

「1944年4月、日本の北海道から千島列島へ行く途中、海中で英国海軍により撃沈され死亡したという。」－被害申告書－ 46)

「正確な死亡年度は分からず、徴用されて2年ほど経った時、日本の北海道から千島列島へ行く途中、海で英国海軍により撃沈され死亡したと死亡通知書と遺骨箱を受け取ったが、遺骨箱(灰の袋)には海の砂のようなが入っていて、一緒に行った尹グムソクも同じような灰の袋で帰って来て、村で「成仏しろよ」と「祭祀」を行なった」－被害申告電話調査報告書 47)

上で見たように、申告人たちの被害申告の内容は、非常に簡単だ。しかしチョ南允氏の場合は、解放後もずっと本籍地に住んでいた弟が申告したので、それでも「千島列島」とか「撃沈」などのキーワードを確認できた。また、各地方機関では調査を細かく実施したので、「遺骨箱」の送還経過や、一緒に動員された者と彼らの死亡の有無、そして死亡者の遺骨送還の有無などを確認できた。

一方、被害者の弟が申告した場合でも、チ・ユンシク氏の場合は「(除籍謄本に) 昭和19年(1944)7月9日、北方海域で戦死したと記載されている」と簡略事項だけ記載された場合もあり、沈ソンボン氏の件のように太平丸事件との関連を判断するのが難しい申告もあった。

9) 被害申告の検討結果

以上、太平丸事件関連の被害申告書を検討してみた。これを通してこれまでの、ごく一部の文献と証言の領域にとどまっていた事件の被害者達が、国内に実際に存在していた事実を確認したことは、それなりに大きな成果の一つだった。しかし今後、より効率的な真相調査や被害申告処理のためには、被害申告書を検討する過程で表れた二つの問題点を整理しておく事が良いように思う。

第1に、先に見たように太平丸事件調査の過程でも、各市・郡・区で作成した口述聴取報告書や電話調査報告書が大きな助けになった。従って被害申告の受付け後、初期の調査

46) 申告人はチョ南允氏の弟、チョ・ナムシク氏である。申告内容の中で地名などの外来語表記は、申告書に記載された通りに転載した。

47) 調査者は春川市庁の行政8級の李ジョンスク氏であり、調査日時は2005年11月16日。電話調査報告書で言及された英国海軍は、米国海軍を錯覚したものと思われる。参考までに誤字脱字も、そのまま転載した。

過程で、できるだけ詳しい報告書を作成する必要がある。特に動員時期や帰還時期と関連して、陽暦・陰暦の確認など、基本的な事項程度は調査過程で記入する必要がある。

第2に、審議調書の担当者が、現在の委員会内で受け付けられた各真相調査の件についての予備知識を具備する必要がある。現システムの下では真相調査業務と審議調書作成（被害判定）業務が分離していて、相互の協調関係を結びがたい。したがって審議調書の担当者が真相調査の件についての予備知識を具備した状況で、該当の申告については、真相調査の担当者に関連する申告を通報するような運営方法を検討する必要がある。

もちろん、現在の人力と調査システムで、上の問題提起は相当な無理が伴うだろう。特に太平丸事件関連の動員者が集中している江原道地域は、解放と朝鮮戦争を前後して行政区域の調整もあったし、戦争の過程で関連資料が消失して、証拠資料を具備するのが難しい実情である。そのうえ全金夏氏の証言によれば、麟蹄と楊口郡だけでも太平丸乗船者の相当数が今の北朝鮮に行ったり、つれて行かれたりしたという。そのため、解放前の資料には記録が残っているが、委員会の被害申告システムには把握されない者が相当数いると思われる。

このような問題点のほか、申告人の被害申告の内容を見ると、過度に断片的な事実に終わったり、歪曲された形態の記憶を、そのまま記述した場合が多い。このすべての問題を解決するためには、もっと多くの申告事例を発掘しなければならないし、そのためには審議調書の処理比率を大幅に高めなければならないだろう。

2. 死亡者数関連資料の批判的検討

本節では太平丸事件の死亡者数推計に関する委認定資料の問題点を検討した後、それをもとに死亡数の規模を推計したい。⁴⁸⁾

1) 死亡者数推計作業の経緯

本報告書の表5で検討したように、太平丸事件関連の死亡者の推計は資料と証言者に

48) 以下、死亡者数推計関連の委認定資料は、付録の「死亡者推計関連伝達資料目録」を参照すること

よって千差万別である。現状で推計可能な朝鮮人死亡者の数は、日本政府が国会答弁で明らかにした182名を最小値と見た時、最大で500名ほどである。⁴⁹⁾

そこで筆者は、駐日韓国大使館を通じ、太平丸事件関連の国会質疑を担当した今野東・旧民主党衆議院議員に会い、国会質疑の背景と質疑の根拠資料の入手経緯などを聞こうとした。しかし今野氏が個人的な事情から面接を固辞したので、今度は答弁資料を提出した厚生労働省に、182名の死亡者を算出した根拠資料と推計方式を聞いた。日本外務省と駐日韓国大使館を経て、2006年3月13日に受領した答弁内容は、非常に簡単だった。その内容を記載すると、次の通りだ。

「照会事項に関するものです。主意書で使用した名簿は1、韓国側に昭和46年度(1971)に引渡した旧日本軍在籍朝鮮出身死亡者連名簿、2、韓国側に平成5年(1993)に引渡した9種の名簿にある留守名簿を利用して計算したものです。それゆえ2種類全て、韓国側へ渡した資料です」

要するに厚生労働省の答弁要旨は既に韓国側に関連資料を皆渡した状況だから、その内から182名を推計して見よ、というものだった。ところがこの資料を管理している韓国の国家記録院がホームページで公式に明らかにしたところでは、被徴用死亡者連名簿には2万1692名分、留守名簿には16万648名分のデータが収録されているという。この膨大な資料をもとに、推計方式も解らない状況で、逆算して日本政府が182名の死亡者推計を発表するようになった経緯を明らかにするのは、至難の作業だった。

2) 同一名簿に関するデータの誤差

国家記録院で明らかになったデータ数は、日本政府が韓国政府に渡したデータとも誤差があり、本委員会が国家記録院から移管された電算入力エクセル資料とも差異があった。

まず日本側との誤差を検討すると、日本側が1993年に韓国側に提供した名簿のうち、留守名簿のデータ数は6箱、114冊、14万3211名分（重複記載者1万2706名分を含めると15万5927名分）である。従って4531名の誤差が発生することになる。

49) この数字は鄭琪永（チョン・ギヨン）氏が提供した「資料の一覧」に収録されたものである。この一覧表には日本側が1993年度に提供した9種の名簿の内訳とデータ数が記載されている。

一方、本委員会に移管されたエクセル資料は、留守名簿が16万568名分で、プラス10名分の誤差が、被徴用死亡者連名簿は2万1337名分で、プラス41名の誤差が確認された。

資料を渡した側よりも、これをもとに整理した側のデータ数が多くなった以上、これに関する経緯を検討せざるを得ない。そこで国家記録院から本委員会に派遣された関係者に誤差が発生するようになった経緯を聞いた。

関係者の答弁によれば、国家記録院の電算入力とは二つの事項に重点を置くというが、第一は相談人（資料照会を依頼した人）が探している資料を迅速に提供することであり、第二は相談人が探している資料を漏れさせないことという。

このうちデータ数が増えたのは、第二の要因が作用したようだ。上記名簿の場合は、日本政府から複写本の形態で移管され、重複記載されたデータが相当数含まれているだけでなく、同一人についても修正文書を添付した場合があった。ところがこれを国家記録院が電算化の過程で、文書の状態をそのまま入力したという。すなわち相談人が上記資料の閲覧を要請した時、資料への接近性に重点を置いたので、特定人について電算上で同一記録が複数見つかることは問題にならないというのだ。また、実務段階で仮にA氏の資料が原文書Bの後に修正文書B'が添付された場合、実務者には記録の真偽を判断する権限がないので、A氏の資料は2個の記録で電算入力したという。要するに国家記録院の電算入力エクセル資料は、記録の総数がただちに人の総数を意味しないということだ。

3) 182名の逆追跡方式

これによって、データの誤謬が発生した経緯は明らかにできた。しかし各データの原文と対照してみると、国家記録院が電算化する過程で発生した誤謬以外に、原資料自体の欠陥が入り込んでいる状況であり、このような資料の状況から、どのように182名を抽出するのかという問題が、依然として残っていた。

筆者はまず、留守名簿と被徴用死亡者連名簿（以下連名簿）での資料抽出の基準を立てることにした。資料抽出の基準は、次の通りである。

- A. 乗船者の所属（推定）部隊と駐屯地域
- B. 死亡地域と死亡日時

C. 死亡者の本籍地

D. 死亡者の身分（階級）

上の項目を基準に、該当資料を段階別に繰り返しフィルタリングして、最後に導き出されたデータの原文（イメージファイル）を本委員会の電算システムを通して出力した。⁵⁰⁾その後、同一資料ないしは両資料から重複記載された者、間違って記載された者、事実確認が不可能な者を手作業で選びだし、最終的に死亡者を推計することにした。

4) 死亡者数の推計過程（留守名簿）

まず留守名簿では、太平丸乗船者の動員地域が北海道から千島列島地域の間なので、一次的に北方第5方面軍の分野から616名のデータを抽出した後、その中から「樺太(サハリン)」地域を除いた171名の原本を抽出した。⁵¹⁾

この留守名簿の一番上の余白には「19.7.9戦死。北千島阿頼度島北方50軒ニ於テ輸送中敵潜水艦ノ魚雷攻撃ヲ受ケ沈没ス(太平丸)」との記載者のメモが記してあった。これを解読すれば「1944年7月9日戦死。北千島の阿頼度島北方50キロの地点で輸送中、敵潜水艦の魚雷攻撃を受けて沈没した(太平丸沈没)」という記録である。したがってこの名簿に記載された者は、一応、太平丸事件関連の死亡者と推定できる。

ところがこの名簿の記載内容の中には「重複(金聖信)」「前複 除隊(吉田玩善)」の事例も含まれており、上記の死亡原因と異なる方式のメモが発見されたりするが、これは全部で7名である。⁵²⁾

なぜ日本側が同一名簿内の一部の死亡者について、異なる形態のメモを記入したのか

50) 電算データの処理過程では、調査総括課、表永洙調査官の名簿に関する説明が大きな助けになった。特に名簿の信頼度と資料の形態、そして名簿の構成などに関して助けを受けた。

51) 原本の表題は「第五方面軍北方（千島・樺太）一達1850一」で、太平丸関連の死亡者は表紙を含めて原頁1ー25頁、マイクロシート番号2005-2030 頁。

52) メモの内容は次の通りである。「19.7.9戦死確認(白川徳裕)」「死亡(松山愛金)」「19.9.15 北千島戦死(梅原曝斗)」「戦死名票ニテ19.7.9戦死(金光榮)」「N51°23'、E155°47'、19.7.9戦死(西原載善)」。彼らを除いた者はすべて上記メモに続いて「19.7.9戦死」という形態で（右同）表示がされている。

は分からないが、こんな乱雑な資料をもとに正確な数を推計するのは難しい。ただ現状で推定できる留守名簿関連の死亡者は、164名から171名ほどとみられる。

5) 死亡者数の推計過程（連名簿）

今度は被徴用死亡者連名簿をもとに太平丸事件関連の死亡者数を推計してみようと思う。

この連名簿の場合、太平丸関連者が陸軍軍属だったため、まず旧日本海軍在籍の記載者を除いた8、453名の陸軍在籍名簿をもとに、先に言及した推計方式に従って調べて見た。

ところが連名簿の場合、留守名簿より死亡推定者を選び出すのが難しい形態で電算化されていた。最大の問題は、原資料と電算資料のすべての「死亡地」が、一貫した基準もなく様々な形でバラバラに記載されていた点だった。

同一事件による死亡者の死亡地が「ソ連北千島」「ソ連サハリン近海」「ソ連北千島阿頼北方50軒」「北千島ファンヨン〔幌筵の韓国語音〕島」「ソ連北千島阿頼強島北方約50軒」「ソ連北千島阿頼夜島北方約50軒」などと入力されていた。「北千島」といえば島からカムチャツカ半島までを意味する。この広い海域を死亡地と記載したということは、常識から、理解できない。

866	被徴用	松月一郎	5方面軍	昭和19.2.9	北千島阿頼夜島北方約50軒	同上	中區 黄金町
867	同上	吉野聖七	同上	昭和19.2.9	同上	同上	青山区 二坂道 224
868	同上	玉川金塔	同上	昭和19.2.9	同上	同上	西大門口松月町 1.5

＜図版11＞ 被徴用死亡者連名簿原本イメージの記載事例

一方、「阿頼」というのは「アトラソバ」の旧日本式地名である「阿頼度島」を意味するようだが、これもまた「ソ連北千島阿頼」「北千島アヨン島」「阿頼強島」「阿頼夜島」などと記載されていて（電算化で北千島を「北干島」に間違って入力した結果）、データに対する信頼度を大きく落としている。これは明らかに、国家記録院の電算入力過程で発生

した誤謬と推定される。しかしこれはもとはといえば、原本の持つ欠陥が増幅された結果である。

実際、原本の中にアトラソバが「阿軟度島」(連名簿一京畿道／江原道70頁) や、「阿□夜島」(連名簿一京畿道／江原道64頁) などと間違っただけで記載された場合があるので、電算で「アヨン島」や「阿頼夜島」などの変形が起きたのである。そして死亡地の表記も、特定の場所を明記した場合や経度と緯度で表示した場合が混じっていて、死亡事由欄に「太平丸」と記載されたものと、そうでないものが混在している。⁵³⁾ 結局、このような問題は、記載方式に一貫性が欠如しているという原本の欠陥から派生・拡大したものといえることができる。

そこで筆者は、太平丸事件の死亡地と関連があると判断される記録をすべて合わせ、原本を出力した後、死亡日時と死亡事由、原本に記載された死亡地域と死亡者の本籍を、手作業で確認した。その結果、連名簿から合計181名の死亡推定者を抽出することになった。

6) 重複記載者

上記の過程を通じて、留守名簿から171名、連名簿から181名の死亡推定者を抽出した。これをもとに、両名簿に重複記載された者を確認してみた。

そのために筆者は、両名簿を一つのファイルにして整列させた後、同一人と推定される場合、原本に記載された本籍と留守担当者を対照してみた。その結果、134名の同一人と、同一人と推定される12名の事例を確認することができた。

この作業で特に注意を払った部分は、同一人推定者の事例だった。なぜならば彼らが重複計算される場合、死亡者の総数がそれだけ増え、死亡者総数の推計に直接影響を及ぼすからである。ところが原本に欠陥がある場合と、国家記録院で原本を誤って入力した場合が混合し、同一人性を判断するのが非常に難しかった。これに関連するいくつかの事例をみて見よう。

53) 死亡地欄には大概「北緯51度23分、東経155度北方50軒」「北千島・阿頼度島北方50軒」「北千島・阿頼北方50軒」などと記載されていたが、筆者が原本を確認したところでは、被徴用死亡者連名簿に「太平丸海没」と正確に記載されたケースは60名程度にすぎなかった。

＜図版12＞同一人の推定事例（左一金本正禎（禎）／
連名簿、右一金本正讀／留守名簿）

まず図版12の事例を見ると、これは、同じ人に対して日本政府がそれぞれ異なる名前で記載した例に該当する。この事例で両名簿に記載された者は、本籍地と留守担当者が一致するので、いったん同一人と推定した。しかしこの人の名前の内、最後の文字がそれぞれ「讃」と「楨」もしくは「楨」と記載されたために、留守名簿では金本正讃と、連名簿では金本正楨（楨）という、「2名の死亡者」が発生したのである。

IV. 太平丸事件の被害申告の現状と死亡者数資料の検証

[illegible]

右一金田根淑 / 留守名簿

図版13の事例は、両名簿共に、存在しない漢字で記載されたのを電算入力段階で、それぞれ異なって入力した例である。書体の専門家に諮問を求めた結果、両名簿に記載された漢字は存在せず、例えあったとしても朝鮮人の場合、人名に使用しない文字という。この漢字は結局「淑」の誤記と思われるが、同一人がそれぞれ異なる名簿で「金田根淑」と「金田根淑」という人物に変身したのである。

＜図版14＞ 左一鈴木竜基 / 連名簿、
右一鈴木竜基 / 留守名簿

最後に、図版14の事例は、本籍地も郡単位しか確認できず、留守担当者も空欄になっているが、両名簿に同一人と記載されている。ところが国家記録院で連名簿の電算入力時に、「鈴木」を「鈴木」と入力したと推定される。この場合、韓国側の電算資料では、この人が2名に計算される。しかし日本側ではこの姓氏を鈴木と見なす可能性はほとんどないようである。即ち、この事例は韓国側の電算資料を活用した筆者の推計では問題になる

が、日本側では問題とならない例と見られる。

結局、上記の過程から、重複記載者134名と同一推定者12名を加えて、重複計算者を合計146名と推定した。

7) 最終推計結果

太平丸事件の死亡者は、算術的に連名簿181名と留守名簿の171名を合わせた352名中、重複記載（推定）者146名を除いた206名と推定できる。ところが、この中には、ハングル人名表記法の頭音法則により同じ文字を異なる音価に電算入力することで発生した3名があり、それを除くと、203名という結果となった。⁵⁴⁾

この結果が果たして事実をどれだけ正確に反映できるのかは確言できない。しかしこれは先に検討したように、原名簿の欠陥と電算入力の誤謬が混合しており、日本政府の推計基準が不明であったことを考慮すれば、制限された時間内に試みられた最善の推計方式であったと思う。

3. 死亡者数に関する日本側説明資料の検証

1) 日本側の推計資料に関する質疑

上記推計作業の後続措置として、筆者は駐日韓国大使館を通じて、筆者の逆推計過程を説明し、関連資料を提供した後、日本側の推計基準と182名の推算経緯について再度質疑した。⁵⁵⁾

54) つまり、ハングルの読み方は異なっても、表記した漢字を基準にしたら、同一人に見なした。

例えば、「モクチョン・ソンノ [木村成魯]」と「モクチョン・ソンロ [木村成魯]」の場合、どちらの読みでも、1名と計算した (songroは、son no=ソンノと発音する)。

55) 調査2課-233, 「太平丸真相調査の件、経過報告および死亡者数（誤謬）に対して日本政府に確認要請」参照。上記関連資料は2006年5月19日、祐天寺の慰霊祭に参席した時、洪ジョンウク調査官に渡した。

＜表6＞ 死亡者推計関連で渡した資料の目録

	資 料 名	資料形態	備 考
1	「被徴用死亡者連名簿」死亡推定者目録	エクセルファイル	181名
2	「留守名簿」死亡推定者目録	エクセルファイル	171名
3	2種名簿重複記載者目録	エクセルファイル	同一人 134名 同一推定者12名
4	死亡推定者最終推計目録	エクセルファイル	203名
5	留守名簿中の死亡者の資料	写本	26枚 (171名)
6	被徴用死亡者連名簿、死亡者資料	写本	181枚 (181名)

2) 日本側答弁資料の内容

上記の質疑に対して2006年7月7日、厚生労働省社会援護局業務課長名義で答弁書が発送された。⁵⁶⁾ 主な内容は次の通りである。

A. 推計基準一名簿から1944年7月9日の戦死者の内、「北千島阿頼度島北方50キロ」「北緯51度23分東経155度47分等」「太平洋海没」の記録で、一つでも該当事項がある者。

B. 連名簿推計－韓国側が推計した181名には5名が抜けており、3名は同一人で、⁵⁷⁾ 1名は戦死の場所が異なる。従って $181+5-4=182$ 名である。

C. 重複記載者－韓国側は146名と推計したが、日本側の推計結果は159名である。

D. 留守名簿推計－留守名簿に記載された者は全部で171名だが、159名が重複記載されていて、残る12名は太平洋丸事件の死亡者ではない。

E. 最終集計結果－留守名簿に記録された太平洋丸事件の死亡者はすべて連名簿に記載されているので、連名簿の推計結果である182名が最終死亡推定者である。

3) 日本側答弁資料の検証

上記の説明資料で争点となる部分は、韓国側の推計からはずれた人数、重複記載者の数、そして死亡者推計過程での留守名簿の役割ないしは資料的価値と圧縮できる。

56) 上記の答弁書は外務省アジア大洋州局北東アジア課長宛に発送され、筆者がファックスで受領したのは 7月12日だった。

57) 同一人3個の事例が含まれているという意味だろう。

IV. 太平丸事件の被害申告の現状と死亡者数資料の検証

まず韓国側の推計から「落ちた」データで、厚生労働省が指名した5名について検討してみよう。

- ① 京畿道 no.744 金光榮
- ② 慶尚北道 no.929 永山富源
- ③ 慶尚北道 no.957 西原載善
- ④ 平安南道 no.168 金海蘭集
- ⑤ 平安南道 no.392 松城俊雄

筆者が日本の厚生労働省に渡した資料を再検討してみた結果、このような指摘は妥当ではあるが、筆者の推計には全く影響がないことがわかった。

厚生労働省が筆者の「被徴用死亡者連名簿 死亡推定者目録(表6の1番資料)」から上記5名が抜け落ちているという指摘は妥当である。筆者がその5人を目録から除外した理由は、彼らの死亡地が「緯度と経度」で書かれていたり、全く「違う地域」で記載されていたためである。図版15をみると、金光榮と永山富源の場合は、緯度と経度で死亡地が表示されている。そして松城俊雄の場合「頼度岳北方50キロ」と書かれているが、「頼度岳」は「阿頼度島」を誤記したとみられる。

744	雇員	金光榮	55歳	軍医	19.7.9	N 51°23' E 155°40'	戦死	同村 猪月町 420	養母 金在学	同上
392	攻町雇員	松城俊雄	55歳	軍司	19.2.9	頼度岳北 方50キロ	同上	平壤府 吉町146		
929	雇員	永山富源	55歳	軍医	19.7.9	北緯51度23分 東経155度40分	戦死	慶尚道 西面 泉洞 里 945	妻 永山 於心	

<図版15> 推計漏落者の死亡地記載方式

ところが「被徴用死亡者連名簿死亡推定者目録(1番資料)」の「死亡地」欄をみると、すべて特定の地域に記載されていたり、特定の場所の北方何キロ地点と記載されている。

従ってデータの抽出過程で「緯度と経度」を記載した4名と死亡地を誤って記録した1名が抜け落ちたのである。このような現象は先に検討したように、連名簿の死亡地記載方式が一貫性を欠いていたために発生したものである。

しかしこのような指摘は、筆者の死亡者推計に何の影響も与えない。なぜなら筆者は「被徴用死亡者連名簿死亡推定者目録(1番資料)」と共に「死亡推定者最終推計目録(4番資料)」を日本側に提供した。この中で上記5名はすべて留守名簿に重複記載された人たちなので、「死亡推定者最終推計目録」に含まれている。従って彼らの存在は韓国側の死亡者推計総数に全く影響を与えない。

次に韓国側の推計過程で、同一人3名と死亡場所が異なる1名が追加されたという指摘を検討してみよう。

- ① 黄海道 no.287 金原東出／黄海道 no.288 金聖信
- ② 江原道 no.182 金澤允植／江原道 no.408 金澤允植
- ③ 江原道 no.190 金本熙鎔／江原道 no.409 金本熙鎔
- ④ 京畿道 no.905 廣川泰雄：死亡場所（北千島幌筵島）

上記名簿中、金澤允植と金本熙鎔の場合は筆者が提供した「被徴用死亡者連名簿 死亡推定者目録(1番資料)」でも同一人であることを表示し、最終資料である「死亡推定者最終推計目録(4番資料)」では資料に「重複」と表記し、彼らを1名ずつ計算したので、この場合も筆者が推計した最終死亡推計者数に影響を与えない。

すると問題は①と④の事例だが、廣川泰雄の場合は、死亡日時は同じだが、所属部隊が船舶司令部と記載されたものと見え、太平丸関連の死亡者でなく他の不明原因でパラムシル（幌筵）島付近で死亡したと思われる。それならば筆者の推計値は202名となる。

最後に金原東出と金聖信を果たして、同一人物と見られるかという問題を検討しよう。図版16と図版17を見ると、金原東出と金聖信という人物が連名簿と留守名簿の両方に記録されていて、留守名簿では金聖信という者を「重複」で処理した。厚生労働省が両者を同一人と見なせる根拠は、留守担当者と本籍が同じということである。原本の記録を参照する時、それ以外の根拠は探せない。ところがここで一つ疑問視される点は、同一人

IV. 太平丸事件の被害申告の現状と死亡者数資料の検証

ならば連名簿作成時になぜ2つの名前を記載したのかということである。それもno.287とno.288の「連番で同じページ」の中にある。

287	同上	結城筑五 ()	同上	昭 1877	同上	同上	同上	碧城郡秋田面 栗城里495	叔父 柳元益	本に同じ
288	同上	金川源相 ()	同上	昭 1877	同上	同上	同上	同上 月郷里115	父 金川源成	同上
289	同上	木村板植 ()	同上	昭 1877	同上	同上	同上	同上 錦山面 冷井里313	父 木村吉場	同上
290	同上	金原東出 ()	同上	昭 1877	同上	同上	同上	同上 月郷面 長七里	叔父 金昭吾	同上
291	同上	金聖信 ()	同上	昭 1877	同上	同上	同上	同上	叔父 同上	同上

<図版16> 金原東出と金聖信の連名簿の記録

よく同一人の重複、中でも同一名簿内での重複はそれぞれ違うページで発生することが多い。したがってこの事例の場合は最小限、生年月日などの個人情報の後づけされない以上、同一人と断定するのは難しい。なぜなら極端な場合を想定してみれば、留守担当者が伯父なので彼らが兄弟かも知れないし、親戚かも知れない、逆に他の人物なのに本籍地と留守担当者を誤って記載した可能性も排除できない。従ってこの事例の場合は、厚生労働省が彼らを同一人とみなす特定な根拠を示さない以上、上記の資料だけでは同一人と断定できないであろう。

五期司 部隊留守名簿				昭和 年 月 日					
日年編 月入	入隊前 年及所 月其属 日編部	本 籍 地 (在 留 地)	住 留 守 所 所 籍 籍 氏 氏 氏 氏	昭 和 年 月 日	日年編 月入	入隊前 年及所 月其属 日編部	本 籍 地 (在 留 地)	住 留 守 所 所 籍 籍 氏 氏 氏 氏	昭 和 年 月 日
27		月保前長花里	合記漢	27	27		月保前長花里	合記漢	27
28		早音前燃花里	合記漢	28	28		早音前燃花里	合記漢	28
29		早音前燃花里	合記漢	29	29		早音前燃花里	合記漢	29
30		早音前燃花里	合記漢	30	30		早音前燃花里	合記漢	30
31		早音前燃花里	合記漢	31	31		早音前燃花里	合記漢	31
32		早音前燃花里	合記漢	32	32		早音前燃花里	合記漢	32
33		早音前燃花里	合記漢	33	33		早音前燃花里	合記漢	33
34		早音前燃花里	合記漢	34	34		早音前燃花里	合記漢	34
35		早音前燃花里	合記漢	35	35		早音前燃花里	合記漢	35
36		早音前燃花里	合記漢	36	36		早音前燃花里	合記漢	36
37		早音前燃花里	合記漢	37	37		早音前燃花里	合記漢	37
38		早音前燃花里	合記漢	38	38		早音前燃花里	合記漢	38
39		早音前燃花里	合記漢	39	39		早音前燃花里	合記漢	39
40		早音前燃花里	合記漢	40	40		早音前燃花里	合記漢	40
41		早音前燃花里	合記漢	41	41		早音前燃花里	合記漢	41
42		早音前燃花里	合記漢	42	42		早音前燃花里	合記漢	42
43		早音前燃花里	合記漢	43	43		早音前燃花里	合記漢	43
44		早音前燃花里	合記漢	44	44		早音前燃花里	合記漢	44
45		早音前燃花里	合記漢	45	45		早音前燃花里	合記漢	45
46		早音前燃花里	合記漢	46	46		早音前燃花里	合記漢	46
47		早音前燃花里	合記漢	47	47		早音前燃花里	合記漢	47
48		早音前燃花里	合記漢	48	48		早音前燃花里	合記漢	48
49		早音前燃花里	合記漢	49	49		早音前燃花里	合記漢	49
50		早音前燃花里	合記漢	50	50		早音前燃花里	合記漢	50
51		早音前燃花里	合記漢	51	51		早音前燃花里	合記漢	51
52		早音前燃花里	合記漢	52	52		早音前燃花里	合記漢	52
53		早音前燃花里	合記漢	53	53		早音前燃花里	合記漢	53
54		早音前燃花里	合記漢	54	54		早音前燃花里	合記漢	54
55		早音前燃花里	合記漢	55	55		早音前燃花里	合記漢	55
56		早音前燃花里	合記漢	56	56		早音前燃花里	合記漢	56
57		早音前燃花里	合記漢	57	57		早音前燃花里	合記漢	57
58		早音前燃花里	合記漢	58	58		早音前燃花里	合記漢	58
59		早音前燃花里	合記漢	59	59		早音前燃花里	合記漢	59
60		早音前燃花里	合記漢	60	60		早音前燃花里	合記漢	60
61		早音前燃花里	合記漢	61	61		早音前燃花里	合記漢	61
62		早音前燃花里	合記漢	62	62		早音前燃花里	合記漢	62
63		早音前燃花里	合記漢	63	63		早音前燃花里	合記漢	63
64		早音前燃花里	合記漢	64	64		早音前燃花里	合記漢	64
65		早音前燃花里	合記漢	65	65		早音前燃花里	合記漢	65
66		早音前燃花里	合記漢	66	66		早音前燃花里	合記漢	66
67		早音前燃花里	合記漢	67	67		早音前燃花里	合記漢	67
68		早音前燃花里	合記漢	68	68		早音前燃花里	合記漢	68
69		早音前燃花里	合記漢	69	69		早音前燃花里	合記漢	69
70		早音前燃花里	合記漢	70	70		早音前燃花里	合記漢	70
71		早音前燃花里	合記漢	71	71		早音前燃花里	合記漢	71
72		早音前燃花里	合記漢	72	72		早音前燃花里	合記漢	72
73		早音前燃花里	合記漢	73	73		早音前燃花里	合記漢	73
74		早音前燃花里	合記漢	74	74		早音前燃花里	合記漢	74
75		早音前燃花里	合記漢	75	75		早音前燃花里	合記漢	75
76		早音前燃花里	合記漢	76	76		早音前燃花里	合記漢	76
77		早音前燃花里	合記漢	77	77		早音前燃花里	合記漢	77
78		早音前燃花里	合記漢	78	78		早音前燃花里	合記漢	78
79		早音前燃花里	合記漢	79	79		早音前燃花里	合記漢	79
80		早音前燃花里	合記漢	80	80		早音前燃花里	合記漢	80
81		早音前燃花里	合記漢	81	81		早音前燃花里	合記漢	81
82		早音前燃花里	合記漢	82	82		早音前燃花里	合記漢	82
83		早音前燃花里	合記漢	83	83		早音前燃花里	合記漢	83
84		早音前燃花里	合記漢	84	84		早音前燃花里	合記漢	84
85		早音前燃花里	合記漢	85	85		早音前燃花里	合記漢	85
86		早音前燃花里	合記漢	86	86		早音前燃花里	合記漢	86
87		早音前燃花里	合記漢	87	87		早音前燃花里	合記漢	87
88		早音前燃花里	合記漢	88	88		早音前燃花里	合記漢	88
89		早音前燃花里	合記漢	89	89		早音前燃花里	合記漢	89
90		早音前燃花里	合記漢	90	90		早音前燃花里	合記漢	90
91		早音前燃花里	合記漢	91	91		早音前燃花里	合記漢	91
92		早音前燃花里	合記漢	92	92		早音前燃花里	合記漢	92
93		早音前燃花里	合記漢	93	93		早音前燃花里	合記漢	93
94		早音前燃花里	合記漢	94	94		早音前燃花里	合記漢	94
95		早音前燃花里	合記漢	95	95		早音前燃花里	合記漢	95
96		早音前燃花里	合記漢	96	96		早音前燃花里	合記漢	96
97		早音前燃花里	合記漢	97	97		早音前燃花里	合記漢	97
98		早音前燃花里	合記漢	98	98		早音前燃花里	合記漢	98
99		早音前燃花里	合記漢	99	99		早音前燃花里	合記漢	99
100		早音前燃花里	合記漢	100	100		早音前燃花里	合記漢	100

<図版17> 金原東出と金聖信の留守名簿の記録

以上、検討した韓国側の推計から「抜け落とすべき名簿」と「追加する名簿」をめぐる解釈の相違は、日本側が提供した資料の欠陥から始まったが、韓国側の推計に大きな影響を与えなかった。むしろ両方の推計で争点となる部分は、これよりも「留守名簿」が死亡者数推計に与える影響と資料解釈の問題である。

まず留守名簿の登載者中、日本政府が太平丸事件関連の死亡者と認定しない12名の名簿と事由を検討しよう。

＜表7＞ 留守名簿登載者中、日本側が死亡推計から除外した12名

	本籍と姓名	連名簿死亡日	留守名簿死亡日	除外事由
1	江原道 姜本亨奎	19.11.9	19.7.9	両名簿の死亡日が異なる
2	京畿道 谷山奎然	19.12.25	同上	同上
3	江原道 武山貴男	19.12.2	同上	同上
4	黄海道 張双静	無し	21.1.25	留守名簿の死亡日が解放以後であること
5	江原道 平松永壽	19.11.29	19.7.9	両名簿の死亡日が異なる
6	江原道 平海允燮	19.9.16	同上	同上
7	京畿道 松本聖祿	19.12.21	同上	同上
8	江原道 密城奉順	20.1.25	同上	同上
9	江原道 慶林成達	19.9.27	同上	同上
10	黄海道 松山愛全 松山愛金	19.7.9	無し	死亡日だけで死亡場所がない
11	江原道 吉田玩善	無し	無し	19.11.9 除隊（留守名簿）
12	黄海道 金聖信	無し	無し	留守名簿の金原東出と同一人

表7から日本側の推計方式の特徴を見ると、厚生労働省は両名簿の内、記載事項が異なる場合、連名簿を基準に死亡者を数えていることが確認できる。これは結局、留守名簿を使わず、連名簿だけを土台に死亡推定者を推定したことを意味するが、両名簿の記録が相反する時、なぜ留守名簿より連名簿の記録を採るのかということについての説明がない。これは2002年、日本の国会に提出した答弁書で「主意書で使用した名簿は1、韓国側に昭和46年度（1971年度）に引渡した旧日本軍在籍朝鮮出身死亡者連名簿、2、韓国側に平成5年（1993年度）に引渡した9種の名簿にある留守名簿を利用して計算したものです」という内容と全く異なる推計方式である。それならば答弁書で敢えて、留守名簿に言及した理由は何なのか。

そこで筆者は上記12名について連名簿の原本を出力して再度、表を作成して見た。

表8を見ると、連名簿に記載された人々は死亡日時だけが違うのではなく、死亡場所と死亡事由が太平丸事件の死亡者とは違っていた。結局、厚生労働省は、両方の名簿から彼らの死亡日時が一致しなくて推計から除外したのではなく、死亡日時と死亡場所、そして死亡事由が異って記載されていたから除外したのである。

＜表8＞ 被徴用死亡者連名簿原本の記載事項

	本籍と姓名	記載番号	死亡日	死亡場所（事由）
1	江原道 姜本亨奎	236	19.11.9	北千島・三塚山（戦病死）
2	京畿道 谷山奎然	496	19.12.25	札幌陸軍病院（戦病死）
3	江原道 武山貴男	177	19.12.2	北緯49度、東経10 [ママ] 度（戦死）
4	黄海道 張双静	592	無し	小倉病院（戦病死）
5	江原道 平松永壽	233	19.11.29	榮安丸（戦病死）
6	江原道 平海允燮	234	19.9.16	千島第1陸軍病院長崎分院（戦病死）
7	京畿道 松本聖祿	495	19.12.21	北海道函館陸軍病院（戦病死）
8	江原道 密城奉順	232	20.1.25	札幌陸軍病院小樽分院（戦病死）
9	江原道 慶林成達	235	19.9.27	北千島幌筵91師団経理部（戦病死）
10	黄海道 松山愛全 松山愛金	361	19.7.9	無し
11	江原道 吉田玩善	391	18.9.15	中国・河南省（戦死）
12	黄海道 金聖信	288	19.7.9	北緯51度23分東経 155度47分

ところで果たして被徴用死亡者連名簿が、死亡者推計で絶対的な資料的価値があるものと認められるかが、疑問視される。例えば11番（江原道吉田玩善）の事例を見ると、この人は両方の名簿に死亡日が記載されていないが、「留守名簿」に1944年11月9日付で除隊したという記録があるので除外したという。ところが連名簿を見ると、この人は1943年9月15日に河南省で既に戦死したと記録されている。

このことは、この人が太平丸の死亡者と見られるかという問題とは別に、日本側の提供する名簿の信頼度に疑心を持たせる。すなわち日本側は何の説明もなく、連名簿を根拠に182名の死亡者を推計したが、上記の事例を見れば、連名簿が完全な資料ではないということである。

この点は日本側が提示した12名の事例の中からも、いくらでも確認できる。例えば12番の金聖信の場合、先に見たように、留守名簿の金原東出と同一人であると主張する根拠が提示されていない。また、4番張双静の場合、連名簿には死亡日が記載されていないが、留守名簿に解放後の死亡日が記載されているから、太平丸の死亡者と認められないとした。ところで1～3番、5～9番の事例では両方の名簿の記録が相反する時、留守名簿の記録を懸命に否定するが、唯一4番の事例でだけ留守名簿の記録を根拠として提示する理由

が分からない。

要するに、厚生労働省が韓国側に提示した説明資料と推計方式は、単純に太平丸事件の死亡者の推計問題で終わるのではなく、日本政府が作成した名簿自体の欠陥を自ら告白する結果を生むものとみられる。従ってこのように、至る所で欠陥をさらけ出す約17万名余の原資料をもとに203名の死亡者を推計し、182名を主張する日本側の答弁資料を批判するのは、それ程意味がないようだ。

元来、筆者が試みた死亡推計作業と日本側の説明資料の検証過程は、実際の死亡者数がどれくらいかを明らかにすることを目標としたが、その成果は、意外にも実死亡者数とは無関係に、「日本がどういう方式で死亡者を推計」したのか、「彼らが援用した資料がどんな限界を持っていたか」という点を明らかにすることになった。

V. 結語

1. 調査の限界

1) 報告書の作成時期と委員会の被害申告処理システム

本件の調査方向と関連して重要なテーマの一つが、委員会の被害申告の処理システムを十分に活用することだった。すなわち筆者は委員会で受付けた被害申告を検討することで、新しい事実と生存者を発掘し、各地方単位に移管された添付資料を合わせることで、極めて制限された文献資料と証言の領域にとどまっていた、本件の全体像を復元しようとした。

しかし本委員会の被害申告システムが、申告者の被害判定に焦点を合わせて構築された点、太平丸乗船者の相当数が以北（北朝鮮）に本籍を置いていて被害申告が減った点、そして被害申告者の調書作成が終わっていない状況で、本報告書を執筆しなければならなかった点などが複合的に作用して、上記の趣旨を完全には生かすことはできなかった。

2) 口述資料の不備な点

本報告書は、太平丸に乗船していた全金夏氏と、救助に投入された旧日本海軍の田中貞夫氏・清水祥氏、沈没船舶の専門家大井田孝氏の貴重な証言と助言をもとに構成された。しかし『北千島に眠る』の刊行時、伊藤孝司氏のインタビューに応じた北韓の黄宗洙（ファン・ジョンス）氏が既に死亡し、一緒に乗船していた旧日本陸軍の今村榮三氏とのインタビューがかなわず、全金夏氏の証言を比較検証する機会が制限された。

3) 調査人力の問題点

日本側に関連事項を問い合わせるためには、韓国側が事前に具体的な資料を提供しな

なければならない。しかし原資料の規模が余りにも膨大であり、筆者個人がこの資料を加工・分析するには物理的限界があった。その結果、本報告書で整理した死亡者の推計内容は、日本の2次返信までしか収録できなかった。もし調査人員が補充されれば、日本側が具体的な資料を添付して韓国側の質疑に誠実に応じているだけに、より充実した調査を進めることができるだろう。

2. 今後の課題

本委員会が、活動期間が限られた政府機関であり、この報告書が「最終報告書」であり、今後の課題を整理することは、筆者には負担であるが、他の機構や他の方式の調査が続いて行なわれることを前提に、残された課題を整理すれば次の通りである。

第1に、本委員会では江原道地域の審議調書作成が完了した後に、各地方から移管された電話調査報告や口述聴取報告などを合わせ、補強調査を進める必要がある。そうすれば、審議調書の完了が10%未満の時点で作成された本報告書より、はるかに良質の調査結果を得られるだろう。

第2に、本件の死亡者の逆推計過程で委認定資料原本の欠陥と委認定資料の電算化の誤謬が発見された。従って、国家記録院で既存の電算資料を再修正し、外交ルートを通じて日本側と質疑資料と答弁資料を持続的にやり取りすれば、問題になったデータの補正が可能であろう。

第3に、本件の沈没地点は現在、ロシアの領土であり、歴史的に露日間の利害関係が複雑に絡み合っている地域だけに、現地調査のためには日本とロシアの協力が不可欠である。しかし、本報告書の作成時には、韓日間で現地追悼プログラムについての合意が充分できあがらず、現場の調査が原則的に不可能だった。従って今後、韓日間の現地追悼に関する論議が進展すれば、ロシア側の了解を得て、今後、現場での調査を推進する必要がある。

第4に、本報告書は一つの事件を取り扱ったので、記述の過程で省略したが北海道・サハリン・クリル方面を包括的に合わせて、この地域でなされた朝鮮人動員の全体像を眺望する必要がある。太平丸乗船者が陸軍軍属だったために、委認定資料の検証過程で海軍軍属の死亡者の資料には言及しなかったが、類似の沈没事故が委認定資料と被害申告システ

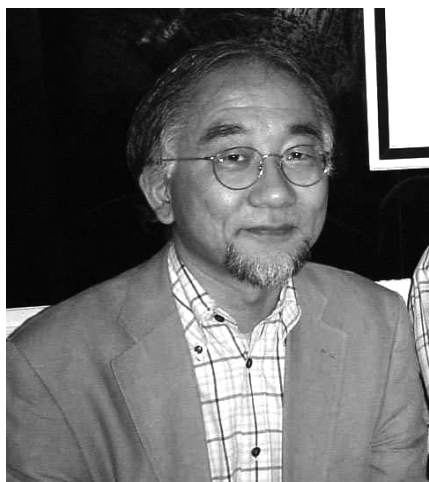
ムで数えきれないほど多く証明されている。さらに千島地域の軍属動員は、北海道を中心とした北方の労務動員とも密接な関連があることを付記しておきたい。

従って今後、労務、軍属などを包括して北方地域の朝鮮人動員体制全般にわたる調査を行なえば、この地域の徴用船の沈没事故がもつ歴史的意味をより深く窺い知ることができるだろう。

最後に本報告書を作成する直前に他界された、真相調査申請人の金景錫(キムギョンソク)氏と太平丸遭難者の救助作業に参加された田中貞夫氏の冥福を祈る。併せて頻繁な電話補強調査にも快く応じて下さった全金夏氏、事件に遭遇した経緯から朝鮮人救助過程まで詳細に語ってくださった高清水祥氏、親切に太平丸事件について助言を下された大井田孝氏、この事件を世間に知らせることで日本の戦争・戦後責任問題を提起された大倉一郎氏、そして本調査に協力してくれた調査2課の職員すべてに、感謝の言葉を贈り、本報告書を終えることにする。

<付録>

1. 調査関係写真資料



<図版18> 大倉一郎氏、現在、フェリス学院大学教授。

大倉氏は2005年10月20日、東京で筆者と接見時に、太平丸事件との個人的な因縁と日本国内生存者の現状を聞かせてくれ、今後の調査方向について長い時間にかけて様々な現実的な助言をいただいた。



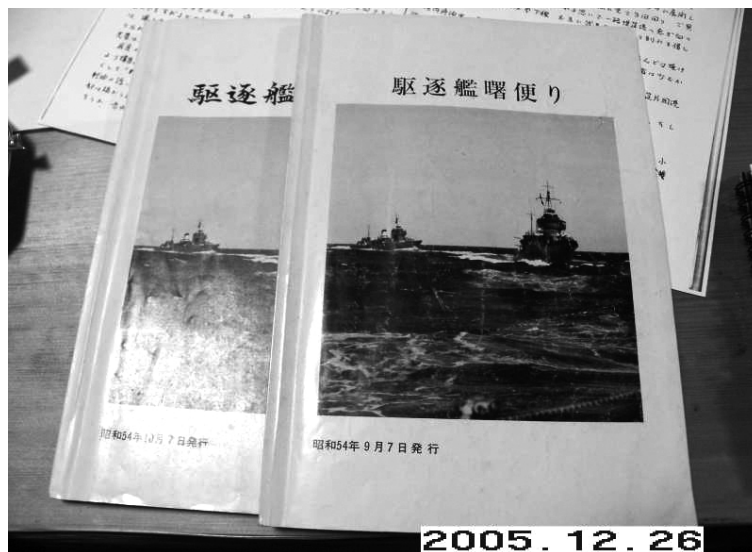
<図版19> 大井田孝氏、現在、神戸市「戦没した船と海員の資料館」の研究員。

2005年10月26日、筆者と接見時、氏は太平丸の記録の現状と沈没推定地、魚雷発射時の米潜水艦の位置などについて教えて下さった。



＜図版20＞ 太平丸事件遭難者の救助作業に参加した旧日本海軍の清水祥氏と夫人。

清水氏は2005年12月26日、北海道函館の自宅で太平丸の出港及び沈没時の目撃談とともに、所蔵中の「駆逐艦曙便り」の文献記録を提供してくれた。



＜図版21＞ 2005年12月26日、清水氏を訪問した時に閲覧した「駆逐艦曙便り」



<図版22> 太平丸事件当時、遭難者の救助に従事した旧日本海軍の田中貞夫氏と夫人。

田中氏は2006年1月28日、筆者と接見した時、清水氏とともに駆逐艦曙に乗船していて、東京と埼玉の自宅で2度にわたり事故当時の目撃談を話してくれ、併せて旧海軍関連の所蔵資料を快く提供してくれた。田中氏は本調査進行中の2006年4月に他界された。



<図版23> 国内唯一の生存者として知られる全金彦氏。

彼は2006年2月23日、楊平の自宅で筆者とのインタビューで太平丸事件全般についてくわしく証言してくれた。のみならず随時の電話補強調査に快く応じて下さり、本人以外の生存推定者の名簿を提供してくれた。



＜図版24＞ 左側は旧日本陸軍軍人として朝鮮人と太平丸に同乗していた今村榮三氏、右側は高清水氏。

この写真は「太平丸沈没時、救助作業に参加した者と救助された者」の親睦会の時、二人で一緒に撮った写真で、高清水氏から提供された。残念ながらいつ撮影したのかは分からない。今村氏から電話で掲載許可を得て載せることができた。

2. 太平丸事件全金丕氏からの聞き取り (全文)

口述者	全金丕（チョン・クムドル、1922年生れ、男性）
面談者	主面談者－李淵植、補助面談者－南相九
面談日時	2006年2月23日
面談場所	全金丕氏の自宅
面談時間	2時間53分
記録形態	MP3 / ビデオ（記録時間：同上）
面談回数	1次面談、電話による補強面談
記録文作成	李淵植、李孝眞
1次校閲	李孝眞、李グァンホ
最終校閲	李淵植
備考	口述同意書に記載された採録制限要望項目以外でも、口述者の私生活と直結した項目は、口述内容が変わらない範囲で最終校閲者の判断の下、一部加筆した。

面談者：これ（口述同意書）はどういうものかと言うと、今日は2006年2月23日。私どもは日帝植民地下で強制動員された方々の被害を調査する部署、真相糾明委員会から来ましたが、今日、私どもが全金夏翁を訪ねた理由は、太平丸事件についてお聞きしたくて来ました。そこで、ご老人は海に落ちた時、あるいは日本に連れて行かれた時のことをずっと話されていますよね。それでこの話された内容から「太平丸事件とはこういうものだった」と、私たちが報告書を作成します。その時、ご老人が今から話された内容を「利用してもよい」というものです。ご老人が、自分の話を報告書に活用して利用してもいい。その同意書です。これは他の意味を持つものではありません。まずこの2枚を簡単に作成して下さい。よく見えませんか？

口述者：よく見えない。

面談者：そうですか？ご老人がここに、ご自分の名前を書けば良いのです。ペンは私がお貸します。

口述者：文字も書けなくて。

面談者：そして、この前の部分は。

口述者：代理が書いたら駄目か？

面談者：ご老人が書いてくれないと、ここに名前だけ書いて下さい。

口述者：ここに書くのか？

面談者2：ここです。

面談者：ちょっと待って。ご老人。はい…

口述者：このパッチム（終声字）、パッチムが分からん。

面談者：そう、パッチムが本当にはっきりしませんね。ここにパッチムを書けば…ここにご老人のお名前を書いて。支えて差し上げます。ここは漢字。漢字で、はい。

口述者：（私が）風邪引いて。

面談者：はい、お辛いですね。はい、そしてここに生まれた日。何年度、何月、何日…、お生まれを書かれれば。

口述者：19……

面談者：1920、22年5月、何日？大丈夫です。5月1日。陽暦、陰暦ですか？

口述者：陰暦だよ。

面談者：陰暦、それでは私が陰暦と、はい。そして名前をもう一回書かれれば良いです。はい、その下に書けば良いです。はい、そこに、ここにサイン。

口述者：サインはできない。

面談者：良いです。それで。

口述者：それなら印鑑押すか？

面談者：いいえ、できました。ありがとうございました（以上、口述同意書を作成）。

太平丸事件の調査

面談者：今日、私どもがお訪ねした理由は、ご老人が太平丸に乗られたじゃないですか。そうでしょう？それでその当時、今日は太平丸事件についてお伺いして、あの当時に北海道から千島の方に人々がたくさん連れて行かれたじゃないですか？その話も一緒にしていただけたら、ありがたいです。ご老人は1922年生れですから、今年、韓国式で何歳におなりですか。年齢は？

口述者：85。

面談者：80、85歳。そんなになられるのですネ。それではあの当時、ご老人は中国にしばらく行っておられたのですか？

口述者：ん？

面談者：中国で2年ほど暮らされましたか？

口述者：中国に暮していて、出て来た。

面談者：初め、最初に生まれた所はどこですか？

口述者：面。

面談者：洪川郡。

口述者：洪川郡チョニョン〔哲亭？〕2里。

面談者：洪川出身ですね。兄弟は何人ですか？

口述者：兄弟は、私は7人兄妹で、男の兄弟3人と姉4人。

面談者：4人兄弟？

口述者：一番の末っ子だよ。

面談者：末っ子ですか？

口述者：うん、みんな死んで、今は私一人残った。私たちの長兄は中国で死亡し、姉もみな死んで、私一人だけ残った。

面談者：それでは、中国にはいつ行かれたのですか？洪川で生まれて。

口述者：いや、それは洪川で生まれて、その郡の面に入って、住んでから。

面談者：暮すのは、また、麟蹄の南面に暮していて。

口述者：中国にいった時は斗村で暮していた。中国の話はなぜ……。北海道行った話、そっちをしようよ。中国にいつて暮した話までしなければならない？

面談者：中国のどこに行かれたのですか？

口述者：中国？間島省安図(アンド)県永慶(ヨンギョン)郷古城(コソン)村というところがあった。とても山奥で。そこからが、90里とか。

面談者：そこから？

口述者：うん、安図県から90里と言ってたよ。私たちの永慶郷から安図県まで90里になる。そこが遠い。2年間住んで。〔朝鮮の10里＝日本の1里〕

面談者：何歳の時、行かれたのですか？

口述者：中国に行った時20歳、22ではなく21歳で入ったかな？

面談者：それでは、成人してから行かれたんですね。

口述者：そう、そこに行き、咸鏡道の阿吾地で、身籠った息子を中国に行って生んで出て来た。帰って来てここで育てたが、軍隊に入りベトナムに行って死んだ。

面談者：ベトナム戦争の時…。

口述者：それで今子どもたちは三人兄弟に娘一人いて、ところで子どもたち兄弟が、3人が残っている。息子が4人、娘が一人生まれたが、今では上の息子を埋葬し、その下に男一人、娘一人、3人埋葬したんだ、それで四人兄妹が残って、そうして見ると、これは順序が変わったかな？〔口述者の記憶不鮮明〕

〔以下は、どんなふう to 動員されたのですかという面談者の質問への回答とみられるが、原書にはこの質問が欠落している〕

口述者：郡面里にいて捕まり、それで面事務所に連れて行かれ、そこで日にちが経って、二晩過ごしたかな？面事務所に行って旅の宿に皆そこに閉じ込めておいて、また春川(チュンチョン)に出て一晩寝て、そしてに行って一晩寝て、釜山でも空き家に入れられて寝た。

面談者：宿ではなく？

口述者：寝てから二日目に身体検査をして、下関に渡ったんだよ。下関行くのに船倉で一晩寝て、地べたのままだよ。

面談者：地べたですか？

口述者：うん、そこで一晩寝て、その次は大阪、名古屋、東京を過ぎて、青森側には入らなかった。まっすぐ函館に行くので、汽車が船の中に入って、そうして海を渡って行った。

面談者：汽車が？汽車が船の中に入るのですか？船にこうやって乗って行く？

口述者：汽車が船の中に入ると、レールが外れて。

面談者：ああ、レールがあるのですか？

口述者：また海を渡って行ってからレールに乗って行くのだよ。そうして小樽に行ったんだ。

面談者：小樽まで真っ直ぐ？

口述者：小樽までずっと行って、そこで降りて(現北海道小樽市手宮町附近・推定)あるじゃない。手宮学校。

面談者：手宮学校？

口述者：うん、そこで訓練を受けて。

面談者：何の訓練を受けたのですか？

口述者：軍事訓練だよ。なに、陸軍軍属で行ったのだから。

面談者：陸軍軍属で行ったから。

口述者：階級のない軍人。階級はないよ、軍服は着ていても。

太平丸事件の調査

面談者：軍服はくれるんですか？

口述者：うん、そこでひと月近く、訓練を受けた。

面談者：ひと月？

口述者：そして行ったんだ。ところでその日なんだ。5月4日と思っていたが、その日ではないのかな？その日にとにかく船に乗った。船に乗ったのだが、これが船なら、われわれはこちら側に乗り、日本軍人はこちら側に登って行ったかな？ここにハシゴのようなもの置いて、そちらに這って登っていったが、陽が沈むころ船に乗った。人がとても多く乗った。乗船したが、その日の夕方寝て、明日の明け方に行くというんだ。なぜかと聞いたら4日だから。その日が4日で。その人は日本人は四日には出ない。四は「死」の字だからと。

面談者：縁起が悪いと？

口述者：ところで、いや暗かったんだが、じっと横たわっていたら船が出るんだよ。それで私が「おい、この船出るな」と言ったら、「明日の明け方に出るそうだよ。こん畜生め」と誰か言うんだ。それで私が「こん畜生、お前こそ何を抜かす？船が今動いているのに、何を騒ぐ！」と言った。晩に出たんだ。夜を明かして進むんだ。その日の朝、朝飯を食って、昼飯時になったんだが、その日は私が飯の当番なんだ。飯をよそって分けてやる順が廻って来たんだ。それで服を、救命胴衣(チョッキ)を着ていたんだが、それを脱いで腰に巻き、飯を持って来ようと思ったんだ。行くとしばらくして来いと言うんだ。それで部屋に入り座っていたら、(入って見ると)日本の奴らこの下に、だから日本人たちが乗っていて、われわれは端っこに乗った。日本人はいい所に乗って、われわれは悪い所に乗ったんだ。

面談者：上甲板に乗ったのでしょうか？ 甲板が二重になっているから上甲板。

口述者：一番下には機関室、その上に1階、またその上に2階、われわれの甲板の上は3階だよ。そうして乗ったんだが、こうやって座っていたら、「ドカーン」というんだ。でかい音がしたから、私はそのまま飛び上がってしまい、天井にぶち当たって落ちたんだ。連発だ。「ドカン、ドカン」。大きな船なのに一発でひっくり返った。そこで一か所あっちから撃って、こちらでも撃ったと思ったんだが、でも、一か所から撃ったようだ。それで船首の先では大騒ぎで、見下ろしているんだ。日本の軍人たちはわれわれで塞がっている後に、押し寄せるから私たちが邪魔になって出られないんだ。われわれが一番高い所にいるから。それでも何とか這い上がって来た。這い上がって来ても他の人をほったらかしにしては、逃げられないから。それでつかんで引っ張り上げた。私一人が、私一人だけでも相当数引っ張り上げたよ。沢山引っ張り上げたが、後で船が地に着いたのか、どうなったのか分からない。でも沈むんだ。こうやってまだ船首は持ち上がっているんだが、こうやって。持ち上がっていても、そこに船長と私

だけ立っていた。人々はみんなどこかに行ってしまう。水中にいる人は上がることもできず、それでも船長がこうやってハンドルを握って立っていた。船長が、この人は日本人。その内に、水がザブザブと入って来たら、船長はそのまんま自殺したんだ。万歳を叫んで、そのまま落ちて行って死んだんだ。だから私一人が残った。こんな船がこうやって持ち上げられて。こうだったのが、こうなって水がどんどんいっぱいになる。四方から、こちらに旗の台のようなものが立っているだろ？船に？そこにロープがあって、人々がフーッ（船が）陸地に着いたと思って、逃げないで甲板の上でそのまま待ってるんだ。すると、こりゃ駄目だと、彼らは必死に飛び降りるんだ。やたらに。海の中に飛び込む。ロープを皆結んであるだろう？紐。それに伝ってどーっと降りて行く。ところが船のプロペラ(スクリューのこと)が廻ると、これに当たるとそのままバッサリ胴体が切断され、海に放り出される。こうして沢山死んだ。

面談者：ああ、だから、船がこうやってあったら、今こちら側にプロペラがあったら、人々は甲板の上に立っていたでしょう。それなら遠くに跳んで降りないと、こうやって間違って跳び降りると、プロペラにそのまま…

口述者：ロープにこうやって結ばれているから、こうやってロープに乗って降りて行くんだ。

面談者：プロペラに引っかかれれば…バッサリ

口述者：プロペラに当たって亡くなった人も多かった。そうやって降りて行っても。田んぼに蛙が死んでいて、なぜかお玉じゃくしが真っ黒になってくっついて来るだろ？そんなありさまだ。船が陸に着いたら、また上って来いといったのだが。船が沈み始めて「ドカン」と煙突が破裂したんだ。船が水の中にズブズブと沈み込んだ。痕跡もなくスッポリ沈んでしまった。潜水艦が水中から撃ったんだ。何がどうなったかは分からない。私が船にいて見たのだが、あっちに人が浮かんでいて、海面に何か真っ黒なものがぬっと浮かび上がったら逃げ出した。何か鳥の尾のようなのがこうやってあって。それが潜水艦だった。私はそれが何かと思ったんだが。今見ると潜水艦なんだ。それで潜水艦が逃げ出し、船がスッと沈んで行くと、次は器に水を汲んだかのように穏やかになった。その日は波が静かだった。波が強かったら、もっと死んだだろう。波が起きなかった。そしてサッと沈没したので、漂っている人々が少しいた。少しいたので飛行機が、後で飛行機がまた来た。アイゴ、もう死ぬ。飛行機が来たら、今度はどこに逃げるか、死ぬほかない。そしたら日本の飛行機だった。日本の飛行機が飛んで来てグルグル旋回する。またあちらから、また船が真っ黒い煙を「ポンポンポン」吐きながら、急接近するんだ。ああ、「今度こそ本当に死ぬ。敵の船か」と思って。ところが船が錨を下ろしボートを降ろして、われわれを引っ張って救い上げてくれたんだ。引き上げて船に拾い上げて運ぶんだ。救助、救助兵。救助船。それで救い上げられて、アヤー。ところが一番初めは怪我人、海に落ちて死にそうな人を先に助けた

す。元気な者が上げてくれと言うと、足で蹴落とす。上げさせない。一番最後に拾って乗せてくれた。そして乗ったら服が濡れて寒くて我慢できない。すると下の階に下りろと言う。機関室に入ると、とてもぽかぽかして、暑くて暖かくて、それが本当に良いんだ。その時まで昼食を食べられなかったが、乾パンを持って来てくれて、乾パンの箱、乾パン。こんな箱あるじゃない。足でギュッと踏みつけると、グシャッと潰れて、それを取り出してやたらに投げてぶけまけると、ヒヨコが集まって拾って食うように、必死になって拾って食い。それで出発した。

口述者：それで着いた所は柏原。そこでは将校たちが長い刀を下げて、金の紐で飾った、そんな人たちが出て来て、手旗信号で一生懸命身振りするんだ。手旗信号知ってる人少ない。私は咸鏡道で沢山みた。

面談者：手でこうして、こちらに行け？

口述者：手ぶりを見ると暗号が解るんだ。手旗信号をすると、船がそこに着けると。それで下船すると、いつもなら見向きもしないのに、われわれを見て敬礼をして大騒ぎなんだ。金糸服の連中がむやみに敬礼して立ってる、われわれに。それで下船するといくらも行かずに。何か倉庫のような所、壁もまともではなく、屋根だけの。そう暗かった。そこに入るとチョコレートとか、色々な物が置いてあって、明かりを点けて御飯をくれた。飯をひとかたまりずつ貰って、それを食べたら寝ろと。初めは服を着替えさせた。服が濡れた者はみんな着替えた。ある場所では帽子をくれ、他では上着をくれて、また違う所では下着をくれて、このように積んでおいて、くれる。着替えて夕食を食って、ろうそくの火を点けた。ところが敵機が来たといえば、それもまた消さなければならない。でも結局、敵機が来なかったので飯を食って。飯もそんなに長い間食えるのか？ホンの少ししかないのに。そのままそこで寝ろと。座ったまま眠って。朝おきて飯を食べたら、それから出て行くが、どこそこに集まれと言う。どこか分からないけど、死体が皆、板の上に置いてあって。ここに集めて置いたと。ところがわれわれに運べとは言わない。われわれより先に菅原組という組があった。その組の人々が来て担いで行った。モッコを担ぎ、モッコで担いで行くんだが、何か声をだしたんだ。かれらが何をしたかという、念仏ってあるだろう？念仏を唱えながら担いで行った。9人だよ、9人を。山を登って行くと、平たいところがあって、誰かが「南無阿弥陀仏」と言う、ある人が「観世音菩薩」といって担いで行ったんだ。前を担いで行く人が「観世音菩薩」といえば、後の人がまた言って。置いた所には木があって、沢山の人たちが木の枝を折るんだが、鎌があるか、斧があるか？素手で折って火を焚く。9人全員を焼いて、そこでその日の夕方まで骨を冷ます。皆冷めないと骨のカケラを取り出せないじゃないか。山の崖で、杭に1、2、3、4と書いて9本、シャベルで掘ってそこに埋めておいて。こうして近くに埋めたんだ。9人を埋葬し

た。そして埋め終って降りて来ると、また、行く。行こうと言うんだ。どこに行くのかと聞くと、船がそこにあった。船に乗ると、そこには韓国人がいた。誰かは分からない。船に乗って渡ると、そこがホロムシロ（幌筵）だ。ホロムシロに行くと、そこに飛行場があった。飛行場を整地した。飛行場を平坦にして、セメントも使わずに、松の板があるだろう？松の板、こんなに厚いやつ。松の板に穴を、機械で穴をあける。釘を打って、こうやって敷く。飛行機が降りてスーッと滑走すると、ガタンガタンこうなる。われわれが飛行場を広げて、そこでした仕事はそんなもんだったよ。ところがそこは太陽の出る日がひと月に10日程度しかない。（あの北の方だから）曇りや雨が続き、どんなに寒かったか。寒いせいか、木が大きくならないんだ。朝鮮松が多いんだが、朝鮮松がわれわれの生き残る道だった。枝が皆こう出て、地面に着く。松の実がなる。するとネズミがそれを食べる。後に、ネズミを見たら捕まえて、焼いて食べた。腹が減ってどうしようもないんだよ。飛行場に行って働くのだが、朝飯を食べて、雨がザアザア降っていても、降りやまなければその日の仕事はない。降り続くかどうか分からなければ行くしかない。飯を食ったら仕事に行かなければならない。それで仕事に行ったら雨がいっぱい降ると仕事はない。仕事がなくとも昼食時間まではシャベルをつかんで立って、そのまま時間を過ごさないといけな。飯を持って来たら一握りずつ食べて、雨が止んだらまた働いて、止まなければ、やることなく帰って来る。こんな状態が毎日で、空襲。この旗が上がると、ラッパか何かを吹く。先にわれわれが行って死体、人を焼いて埋めた所、そちらがよく爆撃された。ところで、そこが柏原という所だが、「柏原方面、爆弾投下」「警戒警報」「空襲警報」。毎日、そうなるتماず隠れる。隠れていて解除され、降りて来ても誰かは戻ってこない。また戻って探しに行くと、グウグウ眠っているんだよ。叩き起こして連れて来るんだが、そうして歳月を送った。その年、ジャガ芋や白菜をはじめて植えた。ところでジャガ芋を植えたら、丈がこんなに大きくなった。白菜を植えたが、葉が裂けて。寒くて上手く育たない。普通、夏はそんなに寒くないじゃない。ところがそこに行くと、ソ連にカムチャツカ半島というのがある。

面談者：そうです。カムチャツカ半島。

口述者：カムチャツカ半島だが。

面談者：ホロムシロからこうやって見えますか？

口述者：遠くに見えるのだが、今はホロムシロ（幌筵島：パラムシル）というのを知っている。その時はホロムシロという話も聞かず、柏原とだけ知っていた。今、日本で何かわれわれの船が沈んでいるんで、そこの写真を持って来たんだが、そこではないようだ。私が見たところ。でもそれ見ても行けない。絶対に探せない。あそこは私の他にしっかり判る人はいない。けれど私にひどい虐待をして置いて。罵声を浴びせて犬畜

生のような苦労しながら、また日本へ行くの？金(補償金)も貰えず、今でも行けるなら行きますよ。しかし、私が今行くのはきついよ。私が行くのなら、息子が一人ついて来ないと。うちの婆さんも、いたら追いかけて来るが。息子がついて来ないと。息子はバスの運転手で、嫁もバスを運転する。二人ともバスを運転するよ。金も皆払ってくれないと。だからきついよ。息子たちは日本人を憎んでいるよ。本当に払うのならきちんと払って、きちんと解決して(そうするんだろう)。毎日そうやって私たちが行くと、何か、団体、大学教授、そんな人たちに会うんだが。私たちを良く訪ねてくるよ。ところで中国で裁判して、中国は勝って、その時200万円ずつくれると言ったが、中国は少ないからと貰わなかったとか。けれど大学教授たちの話では韓国は200万ウォンくれるとか。自分からは今までくれたこともなく、とぼけるだけで。あん畜生ども、竹島(独島)が自分たちの領土と最近も大騒ぎじゃないか。あいつらは解放後に自分たちが帰る時、「10年経ったら会おう、15年経ったら会おう」なんて言う奴がいて。この畜生らが戦争をもう一度やろうというもくろんでいるんだ。こいつらは私の考えでは、竹島が自分たちの領土だとしきりに言い張るのは、いつの日か、戦争を一度やろうという意味だ。アヒャー、いつも我が国は外国語を学び、なすべきことができない。今は英語を学ぶと、また大騒ぎだ。あの時は日本人の言葉、日本語を学べと懸命に努力したが、今はまた、他の国の言葉だけを学んで。学ばない訳にも行かず。あちらの人に対しても通話するには言葉ができないといけなから。私たちはもうどうでもいい。米国人も韓国語、本当に上手なのが多いよ。外国人たちも言葉を学ばねばならず、初等学校から教えるって。ああ、われわれは、飛行場のあった所は地面を掘って、半分は地面の中で、半分は地上にある。家を建てた。一番上は木の枝を折って、葉がある草を沢山覆って置いて、飛行機が来ても見えないようにしておいた。

面談者：偽装するのですか？

口述者：飛行場の横でも、飛行機は全部地中に入れてあり、壊れたやつ、使えないやつを向こうの広場にひとつふたつ置いておく。そこを皆爆撃する。騙されてしまうんだ。私はもう老いてあちこち病んで、どこにも思うようには出かけられないし、今それを探すたって、それでも探す？私が行かなかったら絶対に探せる人はいないよ。私を連れて行こうとするなら、私の気分を高めてくれて、行こうと言わなければ。犬畜生以下の扱いしておいて、探しに行こうと言うのかい？日本人はわれわれをとっ捕まえてあんなに働かせてから、給料もくれずに、ただ殴って、大変な思いをさせた。日本人はもともと人種が悪いよ。大人も「おい」、子どもも「おい」。こいつら、いつどこでわれわれを大事にした？「おい！半島、半島」、われわれを見て半島、半島という。年寄りも若者も「お前、お前、おい、こっち来い」。こんな罵声ばかりで、一度でも大切

にしてくれたか？餓鬼扱いして。だからわれわれ韓国人も、人種が少しはマシ？われわれも中国人に対して「こん畜生」「こいつ」と、犬のように扱ったじゃないか？あの時、中国人を人間として見たか？われわれのように口も利けなかった。われわれは日本の奴の手先だったから、少しはマシか？でも中国人で日本語話す人にはあわてふためいたよ。その人が40歳位だったか、その人と中国の蛟下(キョハ)、敦化(トヌア)に行ったんだ。待合室に行き座っていたら、中国の巡査がその時、二階から降りて来て、私と一緒にいった人の手帳をさっと懐に入れてしまうんだ。こいつどうして手帳を盗むんだ、盗んでいいのか[と思った]。そいつはそのまま座っていたので、私はパッと立ち上がり、ほっぺたをなぐって足で蹴飛ばした。そいつ、そのまま凍りついて、私が日本人だと思い、騙されて返事もできなかった。ある集落に入ると正門に歩哨がいた。それも銃を背負った歩哨だ。日本語を話せば、そのままパスだ。中国人は日本語を話す人が一番恐いんだ。日本語を話す人さえ見たらたじろぐんだ。こんな話、しない方がいい？

面談者：いいえ、構いません、楽にどうぞ。

口述者：あの日、波が高かったらみんな死んでたよ。私も死んでた。あの日は波が立たず、あの日は器に水を汲んだように非常に静かだった。大波も立たず。大波が立ったら、人をもっと死んだ。非常に平穏だった。でも、あそこに行こうと言うのに、私をその気にさせてくれない。ここからの飛行機代でも出してくれない。昨午、会長が平壤に行こうと言う(北韓で開催された共同集会の件と推定)。北韓と共同で。平壤に行くとしても、経費を誰が出すの？経費も出さないで、私に何ができる？会長はあちらに行けば、北韓の人に接触すれば、何でもあるという。私なら何ができる？そこに以前、私があの船で救い上げた人が若干いる、黄海道の人。

面談者：黄海道の人。

口述者：私の家に来たんだが、私は思いもよらなかったが。手紙が来たからと。あの時、私を引き上げてくれてありがたい、と言って。金剛山が家から近いかと聞くので、近いと答えると、金剛山見物でもしに、一度来ると言ったのに。しかし6・25(朝鮮戦争)が起きてしまい、その人たちも来られず。私が北韓に行って、あの時、一緒に行った人たちに会えば喜んでくれる人が多い。私が沢山の人引き上げて。誰を引き上げたのかも知らないよ。けれどその人たちが話をするよ。「貴方があの時、救ってくれて生きられた」と、手紙が来たんだよ。それで知ったんだ。

面談者：戦争が起きてからは、手紙も来なかったのでしょうか？その前は手紙などがこうして…

口述者：戦争が起きて。その時(遺族会長の訪問時)、私が平壤に行けば、その人たちと会えるだろう。また、韓国にいた人たちは大変だったし、北韓にいるのは一緒に千島に行った人たちだよ。麟蹄邑にいた人たちで。私は南面にいた。村にいた中で一緒に行った

太平丸事件の調査

人は多いよ。その人たちにも会うよ。会えばまた、懐かしがる人も多い。私なら何も問題起きない。私が平壤に見物に行ったことないかと？解放前に平壤には何回も行ったよ。でも行けないでいる。

〈休 息〉

面談者：それでは札幌や、小樽に行った話をして下さい。

口述者：札幌？

面談者：はい、4年前ですか？その時は？小樽？4年前に行かれたでしょう？札幌、小樽？

面談者2：金景錫（キム・ギョンソク）会長と行った時ですよ。

口述者：いつ行ったかって？あそこに行って来たの、何時だっけ？札幌に行ってもう4年。

面談者：4年？

口述者：村にいた。何があって行って来たのかな？

面談者：どうして行くことになったのですか？会長さんが行こうと言ったんですか？

口述者：札幌に行く時？うん、その時、裁判があって。

面談者：裁判が？

口述者：行って裁判した。あちら(北韓にいる)の人たちは皆来れず、会長さん夫婦と私が羽田空港から飛行機に乗って札幌に行った。そこに新聞、放送記者が来て、撮影して。それで次は小樽に行くと。札幌で泊まって、その日はどうしたっけ？プルコギパーティが開かれて、私だけその人たちと飯を食ったんだっけ？とにかく日本人と私だけで食べたことは覚えているんだが、その日の夜はそのまま寝て、朝起きて朝飯食べて、撮影記者まで、3人だったかな？うちの会長夫妻と私と。そうやって小樽に行って降りたら、まず手宮学校に先に行ったっけ？私が穴の中に入って働いた所。明治天皇が水を飲んだのも(1881年、明治14年に天皇が小樽を訪問した時に飲んだ薬水の場所と推定)。それで一旦、サンカグ会社〔原著では「山岳」と推定、輸送あるいは土木関係会社とみられる〕が行く道だから。その会社から行ったんだが、会社は全部なくなっていた。それならここは船倉、そこに船が着く…。

面談者：小樽？どこ、小樽？船倉って？

口述者：小樽の船倉に行った。

面談者：ここに倉庫がずらりと並んで。ここが船着き場、倉庫がずらりと並んで、船の倉庫。

口述者：ここは船が着く所で、ここが新作路(道路)。札幌の方に行く所。ここら辺に山があって、ここにサンカグ会社が、この山の下にあった。その会社は、ここが正門なら、こうやって行って、ここが壁、ここが倉庫。ここに倉庫があって、ここが物置小屋、ここに倉庫があって、また物置小屋。ここに来て私が寝ていた所、そこには何人かい

た。この下には偉い人たちが来て会議をしていた。この倉庫には、サツマ芋が積んであった。それで日本人の奴らがサツマ芋をくすねて食べていた。私が「このサツマ芋どこから持って来たの？」と私が聞くと、よく教えてくれない。「お前たちだけで食うな！」私が諭すと、「あっちに行ってみろ」と。あっちに行くとあると。行ってみたらサツマ芋が積んであった。そこでサツマ芋引き出して食べた。ところがその家（サンカグ会社の建物）を壊してしまったから、探せない。それで日本人たちと歩き回って、町内の人たちにサンカグ会社があったかと聞いても分からない。これでは私が嘘を言ったことになる。その付近の人たちがサンカグ会社を知らないなんて、そんな馬鹿な。サンカグ会社があった方に、山に登る車が通る道があった。

面談者：ちょっと待って。

口述者：車の道が…。

面談者：それ全部を憶えているんですか？

口述者：何？

面談者：だから、日本人がサツマ芋をくすねて食べていたのも、全部覚えてるんですか？すごいですね。

口述者：私は今病気がちだが、私の記憶力がどれだけ良かったか、ハハハ。

〈休 息〉

口述者：日本人共と私が一緒にいたんだ。韓国人は甘いもの、良く食うかと聞くんだよ。だから私が下関に行った時、日本軍人たちが私たちを連れて行ったのだが。こいつらが、何かあると「誰か朝鮮飴ちょっとくれ」とかいってくる。われわれのを取り出すと、もっとくれと言う。私がそこの中学校の校長の所で、シャベルで掘ってジャガイモを少し植え、蒸して食べたりした。

面談者：そうですか、ハハハ。

口述者：一度は50銭を持って行っただが、果物屋に行って果物を思う存分食べた。リンゴでも何でも思う存分食べた。食べてから全部でいくらかと聞くと、50銭だと。食べた分だけでも50銭と言うので、お金を全部取り出したら、残りは持って行けと皆入れてくれるんだ。そうやって50銭出して食べたりした。

面談者：あの、それでは…。

口述者：鳥肉を食いに行けば、日本人は80円〔ママ〕分食べる。韓国人は銭が惜しいので30円分だけ、最高で銭を惜しんでやたらに食べる人でも、30円分だけ。鳥肉が15銭して、最高に大きいのは50銭。牛乳パンみたいなもの、鳩の肉みたいなのが、1羽だと50銭だ。われわれにとっては10円、15円になる。韓国人は30銭分食べたら、もう食べな

太平丸事件の調査

い。金が惜しくて。日本人は80円も食べる。その時は、月給150円くらい。だからひと月の月給の半分だ。われわれはそうは食べられない、金が惜しい。食べればあいつらより、沢山食えるが…

面談者：うん、量はもっと多いのに、そうですね。

口述者：タダだったら分からないが、金を出して食うのは、もっと食べられる？金出して食うのは、食ってみたって。

面談者：そうですね。ご老人、故郷から日本へ行った時の話、少し聞きましょう。日本に行ったのは22歳？23歳？

口述者：23歳。

面談者：23歳、韓国式(数え)で。その時、結婚していたんですか？

口述者：はい、長男がその年、満1歳で祝った。

面談者：1歳のお祝い？

口述者：あの年、長男の1歳祝って、それから行った。

面談者：7人兄弟の末っ子じゃないですか。その時、故郷ではどのように暮らしていたのですか。ご両親の面倒は誰が見ていたのですか？

口述者：父と母は私が見ていました。

面談者：末っ子なのに？

口述者：兄たち皆チンピラみたいなもので。長兄は中国で暮し、2番目の兄は旌善(チョンソン)郡臨溪(イムゲ)面骨只(コルチ)里〔江原道〕という所の鉱山に行き、ダイナマイト爆破に遭って、死んだ。25歳で死んだ。3番目の兄はベトナムに行って、25歳で死んだ。兄弟全部死んで、私一人残った。故郷に行っても、友達もみな死んで誰もいない。私だけ生き残った。

面談者：その時、ご両親を見て、そして今度は1歳の子？

口述者：息子？

面談者：息子、1歳。韓国式で数え年では2歳。

口述者：父と母と妻、息子の4人家族を置き去りにして連れて行かれたんだ。その時は配給を貰ったそう。

面談者：父、母、妻と息子。それではあなたが連行されたら、働く人がいないじゃないですか？

口述者：いないよ。だから面(村)で配給をくれた。

面談者：その時、主に連行された人が、当時あなたと一緒に連行された人たち…。

口述者：私の話を聞きな。だから原州(ウォンジュ)から100名。

面談者：原州100名。

口述者：横城(フエンソン)が100名、楊口が100名、麟蹄が100名、今、北韓になったが。

面談者：フェヤン(淮陽)？

- 口述者：淮陽だよ。金剛山を越えて。そこから100名、だから江原道から500名行ったんだよ。
黄海道から500名。だから1000名連行されたんだ。
- 面談者：どこかで集まって行ったんですか。春川？
- 口述者：面で集まって頭数を揃える、100名を。
- 面談者：100名ずつ？
- 口述者：面[郡]で100名揃えて春川に行って泊まり、ソウルで寝て、釜山で寝て、釜山で身体検査をして。
- 面談者：どんな検査をしたんですか？
- 口述者：この丸いフタのようなものがあるじゃない。そこに綿棒のようなのをガラスにさして、こうして後の穴に刺す。土に手を付けて四つん這いになって、尻を剥く。ただそれだけ、ハハハ。
- 面談者：なぜ、そんなことするのですか。
- 口述者：それが身体検査だよ。釜山に行って身体検査で一人落ちた。この人は帰るのが大変だった。
- 面談者：どうして？
- 口述者：旅費もないし。そこを出て下関に渡った。原州から2人生きて帰った。横城からも2人が生きて帰った。後はみな死んだ。みんな死んだ中で2人ずつ生きて帰った。楊口は13人生きて帰った。麟蹄が50人くらい生きて帰った。淮陽が麟蹄より多く生きて帰った。そう、黄海道から100名、原州から100名、横城100名、楊口100名、麟蹄100名、淮陽100名、500名行った。われわれの中隊長が日本人そっくりで、黒縁眼鏡をかけて、日本人そっくり。日本語もうまかった。
- 面談者：朝鮮人なのに？
- 口述者：そこで中隊を編成して、われわれが1中隊。黄海道が2中隊。われわれの中隊長はパリッとして身長が低く、黄海道の中隊長は背が少し高い。われわれの中隊長は日本人をあごでつかっていた。だがすぐに死んでしまった。原州から行った人で、まだ16歳にしかないのが、捕まって来た。
- 面談者：16歳？
- 口述者：一人で送っては可哀想だからと、何、自分も金稼ぎたいので口実にして、父親もついて来たんだ。だからそこは父子が行った。ところが息子は船が沈没して、そこで死んだ。父親は助かった。(息子は) 原州の李サンソプという人。父親の方は名前を憶えていない。横城から一人は、名前を憶えてなくて。禹ビョンウクという人はあの時、創氏を「ウド」とした。その人は生きているが、来ない。その人や原州の人、横城の人はここに来ない。みんな散り散りになって、今は私一人だけ。みな死んで私一人生き残った。生き残っているのはさっき釜山に行った人、その人の名前は...、私より年下だ。

太平丸事件の調査

面談者：一緒に太平丸に乗った中でご老人以外にも、釜山にもうひとり生きていらっしゃるのですか？

口述者：釜山にも一人いて、富川（ブチョン）にも一人いる。

面談者：ああ、そうですか。その方の姓名は？釜山に行った方。

口述者：釜山？釜山のどこかは分らん。あの時、嫁の婚姻届、息子が嫁をとり、婚姻届をしに来た人。

面談者：さっき、とても懐かしいと。

口述者：その人が。

面談者：名前は？

口述者：ソン・ホンジュン。

面談者：ソン・ホンジュン氏。その方の年齢は、貴方より若い？

口述者：いま80歳くらいになるかな… わからない。

面談者：年下でしょう。

口述者：私よりずっと幼い。

面談者：あの当時に日本に連れて行かれた時は、幼かった。そして富川には？

口述者：吉サンナム。この人たち二人は同じ村だ。今、南面富坪里九萬洞（クマンドン）という所、そこに彼らは住んでいた。

面談者：同じ村の人ですか。吉サンナム氏は年齢がどれくらい？

口述者：私より年下。私より幼い。

面談者：今まで私は全金夏おじいさんが唯一の生存者と考えていました。だから、貴方が太平丸に乗船して生き残った人々の中で一人しかいないと考えていました。だから全金夏おじいさんが太平丸に乗って生き残ったのは一人だけと思っていました。この人たちも同じ船に乗っておられたのですね。

口述者：そうだ。同じ村から行ったんだ。その人たちは九萬洞（クマンドン）という小さな村、小川を越えた村で、私はこちら側の村。

面談者：それでは、全金夏翁の日本名は何ですか？

口述者：日本名？私は学校でも「ゼン・キンドツ」と呼ばれた。

面談者：全金夏（ゼン・キンドツ）。そのまま読んだのですネ？

口述者：ゼン・キンドツと呼ぶ。私は創氏もしなかった。

面談者：創氏もしなかったんですね。

口述者：ゼン・キンドツと呼んだ。裁判所では「チョン・クムドル」と。

面談者：チョン・クムドル。それでは、創氏をしなかった？

口述者：創氏をしなかったので、二つの書き方の名前を、印鑑も二つの書き方のものを持っていたんだ。クムドルと。

面談者：キンドツ？

口述者：「クムドル(金豆)」と書くから、カネの「金」の字と…

面談者：「ドル」の字は日本人があまり使わない字だから。

口述者：名前は石の「ドル」の字だといい、チャドルの「ドル」の字と言っても判らない。この「ドル(豆)」の字が「願」の字と似ていて（「願」ではなく「原」の字の錯誤）。だからどこかで印鑑を押すと、私を「金原」と呼ぶ。だから「カネハラ」と呼べば、そのまま答えてやる。

面談者：うん、それでは戸籍では「チョン・クムドル」とだけなっているのですか？

口述者：戸籍でも族譜でもチョン・クムドル(全金豆)となっている。

面談者：簡単ですね。それでは面にいた人を一人ずつ選んで100名揃えたじゃないですか。誰が来て連れて行ったんですか？ご老人を。

口述者：沈〇〇（個人情報保護の次元から削除）という奴が、その時の面書記だ。

面談者：面書記。沈〇〇？

口述者：その男は面長にまで出世した。今は死んで、もういない。また、連れてゆく時、朴ボンサムという者もいて。何年前かまで生きていたが、死んだ。

面談者：朴ボンサムはどんな人？

口述者：私の隣に住んでいた人。その男は本当に字も知らない者だったが、何年か前に死んだ。死んだと聞いたのに葬式には行けなかったよ。

面談者：連行する時、何といって連行したのですか？

口述者：有無を言わず。私は朝起きて服を着て、パジ（袴）の紐を結んでいたら、誰かやって来た。その時、中国から帰って来て、他人の家の居間を一つ借りて5人家族で住んでいた。出て来い、というので出て行くと、「行こう」という。「どこに行くんだ？」と聞くと、「面事務所に行こう」という。これはひっかかったな。面書記達が訪ねて来たら、捕まるもんだと思っていたから。けれど行った。ところが朴ボンサムという奴が家に来て、何か、行ったり来たりした。それで私が「逃げろ、逃げろ」といった。私が捕まっていながらも、逃げろと。

面談者：逃げろって？

口述者：あいつ、その時になって初めて分かったんだ。飛んで行った。それで捕まらなかった。ところが次の日に、捕まって来た。私が逃げろといったから、逃げるには逃げたんだが。後で捕まってしまった。どこかに行って長い間隠れていたら良かったのに。あいつは少し足りないんだ。もともと金の計算も良くできないし……ハハハ。

面談者：ちょっと拙い所があったんですね。

口述者：悪口は良くするんだが。

面談者：ご老人、日本に連行された時、日本語は上手かったのですか？

太平丸事件の調査

口述者：いや、その時は下手だった。

面談者：それでは日本語は日本に行って習ったんですか？

口述者：日本に行っても何も学べない。韓国の中で熱心に日本の工事をして、その時習った。
日本に行っている時は学べなかった。どこか外国に行っても、外国人と多く接触しないと習えない。中国も同じ。

面談者：中国へは何をしに行かれたのですか？

口述者：稼いで食うために行った。

面談者：故郷では仕事がなかったんですか？土地とか。仕事は？

口述者：私はそんな工事だけした。

面談者：工事の仕事。

口述者：鉱山で金を掘ったり、石炭を掘る仕事もした。

面談者：農業はしなかったんですか？

口述者：土地がないから。

口述者：そのまま続けて。私は出稼ぎに行かず、そこで暮らしたことがほとんどない。

面談者：工事がある場所について行くんですか？

口述者：そうだ、ついて行った。私は咸鏡道の阿吾地にも行って住んだりした。

面談者：あ、それで行かれたんですね？仕事のために阿吾地に。

口述者：それで、行って暮らして、そこから中国に近いので、歩いて。

面談者：そこ〔中国〕でも工事しました？

口述者：兄が先に行って一緒に暮らそうというので行ったんだ、中国へ。

面談者：阿吾地に行かれた頃、結婚されたんですか？

口述者：うん。

面談者：結婚式はどこでされたんですか？で？

口述者：いや、それは江原道の通川(トンチョン)。

面談者：通川で式をして。

口述者：通川郡の庫底(コジョ) 邑で式をあげた。

面談者：妻と阿吾地に行ったんですか？

口述者：うん。

面談者：ご両親はここにいらっしゃって？麟蹄に引き続き？

口述者：違う。その時、母は長兄と咸鏡道阿吾地にいた。そして兄が逃げ出してしまい。一緒に住んでいたのに、逃げ出してしまった。

面談者：安図県まで行って、再び麟蹄に来た、その年に、捕まったんですか？

口述者：だから秋に来て、冬を過ごし、春に捕まったんだ。連行されたあの年、小樽で陽暦の正月を祝い、陰暦の正月は家に戻って祝い、元旦を2回祝った。

面談者：それでは1944年の春に小樽に行ったんですね？

口述者：春に、小樽に。

面談者：解放の1年前？1年前の春に？

口述者：そこで陽暦の正月を祝い、家に帰って陰暦の正月を祝い、そしてその年、農作業をした。他人の農地を借りて農作業をしていて、解放となり、日本人が追い出された。それでここに、そのままいたが、その頃、また加平(カピョン:京畿道)で暮らした。〔解放後〕……ある日、昼食を食べていたら放送があった。

面談者：何ですって？

口述者：ラジオ放送が、日本で裁判する人を募集すると。それで飯も食わずに座って聞いていたらそんな話で、お婆さんたちが裁判を起こすと、それなら今すぐにでも行って見ようと、春川に行った。金景錫(キム・ギョンソク)会長を訪ねて行った。話をしたら、良いねと、その時入会した。裁判、訴訟で1年に2回ずつ通った。5年で判決が出たが、負けたよ。金も取れず敗けてしまったのだから、どうする？上告しなければ。

面談者：裁判の名は何ですか？それはどんな裁判ですか？

口述者：私は労賃を全然受取っていないのだから、労賃をくれと。5年もかけて負けた。5年で終わらせなければならぬのに、10年かかり、今年で15年目だ。1992年から今までだ。裁判して終わって出て来ると、日本の同胞が追いかけて来る。私がここで金を勝ち取れば、日本にいる同胞も受取れる。私の解決がされないと日本の同胞達も受取れないと、非常に固く信じている。ここで一緒に「おじさん、早くその鍵を開いて」と。私が金を受取ってはじめてみんなが受取るようになるんだと。陳萬述(チン・マンスル)という人が慶尚道の陸軍に行った。私と同じ年齢...

〔陳萬述は徴兵され雲南省の遮放での戦闘で負傷、解放後も負傷部位の激痛に苦しみ、江原道訴訟に参加、1996年死去〕

面談者：陳萬述さん。

口述者：陳萬述。その人は死んだよ。私と同じ年齢だが死んで、息子と一度一緒に行ったんだ。

面談者：ああ、江原道遺族訴訟ですね。

口述者：陳萬述も、私が解決しないと、私がカギを握っていて、私が開けなければ、自分が明けると。

面談者：小樽に行く時、春に行かれたでしょう。小樽まで半月かかるでしょう？

口述者：半月？ どうして半月もかかる。サッと行けば.....。

面談者：麟蹄を出発して。

口述者：行って寝て、行って寝て、何日かはかかるが。

面談者：10日ぐらいかかりますか？

口述者：いいや、麟蹄の面で全員募集され、そこで寝る時も消防団が歩哨に立って。

太平丸事件の調査

面談者：消防隊が？

口述者：われわれが逃亡するかと思い。われわれは下宿で寝かされ、消防団が皆歩哨に立って、100名皆、捕まえられて来たんだ。出発して春川に行き、ある旅館で一晩寝た

面談者：春川の旅館で？

口述者：一晩寝て、ソウルに行き天一旅館と言ったか、そこで一晩寝て、神社参拝させられたが、神社ではなく、寺に入った。寺で参拝した。

面談者：どの寺で？

口述者：わからん。今考えてみると寺だ。毎日、神社参拝したのに……。行くのに春川で一晩寝て、ソウルに行って天一旅館で一晩寝て、山の中腹にある寺で参拝した。その時が閏3月23日になる。ところで慶尚道を通ると、麦を刈った畑もあり、まだ残っている畑もあった。ある人は麦をかき集めて縛っていた。そして釜山では駅前で降り、山の方に登って空き家に連れて行かれた。

面談者：100名を？500名を？

口述者：そう？いやわれわれ100名だ。その家で寝て明くる日、出て身体検査をして、船に乗った。連絡船に乗ったが、皆吐いた。

面談者：船酔い？

口述者：私は、船酔いは少しもせず、そこでくれる物を皆食って平気だった。下関まで来たが、皆ほとんど死んだ〔ような状態だった〕。

面談者：船酔い？

口述者：ある人は病院行って。下関に到着したのに、船倉で寝ろと言う。そこで寝て明くる日列車に乗って、大阪という所は非常に大きい。原州より大きいと。大阪を過ぎて名古屋が見えた。何か知っていたか？名古屋が見え東京へ着いた。小泉の奴が神社参拝したじゃない。

面談者：あ、そこでは神社参拝をしたんですか？

口述者：神社参拝はしたが、東京ではしなかった。東京では寝なかった。北海道に渡って函館に行った。そこで髪を切って爪も切って入れた。

面談者：どこで？函館で？

口述者：いや、小樽で。

面談者：小樽で。

口述者：封筒に入れて、神社参拝に行く時入れて、われわれが万一死ねば、それを〔故郷に〕送るといったが、違った。死んだ人たちに来たのを見ると、みんな砂だ。海の砂で、もち米の粉みたいな砂、それを封筒に入れて。

面談者：小樽でひと月間、訓練を受けた時ですが。小樽駅から遠いですか？訓練を受けた場は？

口述者：駅から？駅は山頂じゃないか。

面談者：山の頂上の方？

口述者：小樽〔港〕は駅から真っ直ぐ降りて行かないと。

面談者：そうです。駅から真っ直ぐ下ると海辺じゃないですか。それなら訓練場は反対側の山の方にあったのですか。

口述者：訓練場？

面談者：ひと月、訓練されたんでしょう。

口述者：小樽に手宮学校というのがあって。

面談者：手宮学校というのがあったんですか？

口述者：手宮学校、そこで訓練を受けた。

面談者：朝起きると何からするんですか？

口述者：朝起きると、体操して飯を食い、「使役」といって働きに行く。訓練終わると、海で船に乗り、海水に入る。そこでやたらに放り込まれる。

面談者：水泳のできない者は？

口述者：救命胴着というのがあって、それを着る。綱、捕り縄のようなのを1本ずつくれて、これを下げて行く。海に入って訓練をする。救命胴着を着て海に入り、水に落ちるとあお向けになる。あお向けになって、うつ伏せになってはいけない。海女のように空だけ見て、喉が乾くと水を飲めと、乳頭のようなものの口にくわえて。救命胴着の中にあらかじめ粉パン、米をつく時に出る粉、パン粉乾かして1、2個ずつ、3、4個入れてある。腹が減るとそれを取り出して食べる。戦争中に使うものなのに、それを皆取り出して食べる。腹が減るから。

面談者：ああ、有事の時に食べるようにくれたものを取り出して食べるのですか？

口述者：急な時に食べるように貰ったものを皆取り出して食べる。訓練だが、捕り縄を結ぶ方を教えてくれる。ここで結ぶ。ここで結べば、向こうから引き上げても、巻き込まれないように結ぶ方法がある。それを教えてくれる。腰に結んでおけば船から引っ張り上げられる。ある人たちは（水に飛び込んですぐ）はい上がる。船にはい上がるのを再び、足で蹴飛ばして…。

面談者：また飛び込めと？

口述者：訓練だよ。ど田舎の山奥にいた人が海に飛び込めばどうなる。

面談者：そうですね。海をはじめて見た人もいたでしょう。

口述者：一度海に飛び込んで見たら怖くて。だから船にはい上がろうとすると足で蹴るんだよ。

面談者：訓練所では朝鮮人だけがいたのではなく、日本人も一緒に訓練を受けたのですか？

口述者：それは調教。日本人は調教。

面談者：その訓練所で訓練されていた日本人はいなかったんですか？

口述者：ああ、その人たちはわれわれと同じ場所ではない。

太平丸事件の調査

面談者：山奥にいた人たちが主に訓練されたんですか？

口述者：日本人は指揮者。上等兵、伍長、そんな指揮して。伍長からは長剣をつけている。背の低い奴は、刀を引きずるので、何時も持ち上げていた。訓練に行来するのに、裏道の方に足が向く。なぜなら新作路（道路）を堂々と歩けば、将校も多く往き来するから……。長剣(将校)が向こうから来たら、挨拶せねばならない。「左向け左！右向け右」と非常に煩わしかった。

面談者：それが嫌で、裏道を通ったのですか？

口述者：挨拶せよ、敬礼せよという。指揮者(引率者)一人が敬礼して、われわれは去ったことも。しかし私は手を抜いた。働きに行くのに荷物を担いで行かねばならないのに、つらいとみな放り投げて持って行かない。

面談者：みつかったら大変じゃないですか。

口述者：登り下りするのに、いい加減なのを見ると「お前、何か？」「班長でございます。」「あ、そうか」となる。そうして登って行った。班長だと言うと、大体済む。

面談者：班長でもないのに？

口述者：班長だという。班長と言えば、分かったという。嘘も方便って言うじゃないか。

面談者：要領がよかったんですね。

口述者：私は15歳から遊んで食って来たんだから。学校も途中で辞めて鉱山に入って、鉱山で育った。私はどこに行っても弁護士なんかには負けない位だ。言葉が上手で嘘をよくついて。どこに行ってもうまい手をつかった。殴られる奴はよく食べる。私は殴られもせず。

面談者：訓練の最中に逃亡した人もいましたか？

口述者：逃亡してどこへ行くの？逃げる所がないのに、行く所がないじゃない。

面談者：ひと月訓練を受けて。次にホロムシロ(パラムシル)の方向に行ったでしょう。小樽から北に行けば樺太でしょう？こちらに行けば樺太。

口述者：樺太はソ連だ。

面談者：そうです。小樽からこちらに行けば、樺太の右側をこのように遠くに行けばカムチャツカ、ホロムシロがここにあるじゃないですか。

口述者：樺太は、私は忘れた。樺太はどこら辺？

面談者：ここが小樽です。

口述者：私には見えない。

面談者：ここが小樽です。ここから北に上ると樺太。右側にずっと行くとカムチャツカ、ホロムシロ、シュムシュ、こうなります。ご老人はこのような行かれたんです、船に乗って。ここがカムチャツカ。ここが小樽。ここから船に乗って、こう行ったんです。ここで船が沈没したんです。この辺で。

口述者：それは私がひと晩とひと昼行った所だ。だから1昼夜になる。

面談者：それではご老人は44年の春に小樽に連行され、ひと月間、小樽で訓練を受けました。ところで米軍の潜水艦が魚雷を発射したのは7月9日となっています。

口述者：7月9日？

面談者：陽暦で。ところでその当時、陰暦を使っていたのですか？

口述者：あの時は陰暦の日数だったのか、陽暦の日数だったのか、全部忘れた。日時も知らず、知ろうともせず。もう家に帰るのは皆駄目で、ここで全員死ぬんだと。

面談者：日時を気にならなかったんだ。

口述者：「もうみんな死ぬ」と。ところで、腹が減ってグーグーいう。目は空ろで、ある人はむくんで。私も一生懸命我慢したが、最後は耐え切れなかった。米びつに飯を入れてついで廻す、米びつに水を注いでかき混ぜて飲むのだが、それもしくじると殴られる。飯をこのようにずらっと並べておいて、一つずつ入って行き、飯一つ貰って汁一つ貰って出て行くのだが、途中で一つずつ盗んでしまう。そんなことがよくあった。みつかると殴られる。順番に進むのではない。われわれだけそうすると思ってたら、日本人も一緒にした。彼らはもっとする。

面談者：一番ひどい時に行かれたんですね、1944年度に。

口述者：腹が減るから、することは皆一緒。日本人も大きな茶碗を選んで殴られて。

面談者：それではひと月訓練を受けて、そこで船に乗ってこの島に行って働くじゃないですか。主にどんな仕事をしたんですか？

口述者：その時は車。車に掘った土や石や砂を、皆乗せる。飛行場に行って、凸凹なところがあるじゃないか。そこに持って行って、注いで平坦にする。

面談者：平坦にする。

口述者：平たくしてから松の板を敷けば、そこに飛行機が飛んで来る。セメントもなくて。

面談者：セメントが足りなくてそうしたのですか？

口述者：使う、新しい飛行機は土の中に洞窟を掘ってそこに隠し、使えないのを庭に1機ずつ置くと、米軍がそれを爆撃する。

面談者：それではあの当時、はじめ故郷から100名が一旦出発したでしょう。500名中、麟蹄の人が100名で。その100名は同じ飛行場で、ずっと一緒に働いたのですか？

口述者：その100名が？皆、死んで、生き残った者だけで中隊編成をした。われわれの中隊長は死んだが、黄海道の中隊長は死ななかった。黄海道の中隊にくっつけられて、苛められたよ。黄海道の人はよく殴るんだ。

面談者：今の話は、太平丸から生き残った後の話でしょ？

口述者：生き残った者がふたたび中隊を編成。

面談者：再編成するから、私が伺いたいのは太平丸の人たちは死ぬ前にひと月、訓練受けたでしょう。ひと月の訓練を受けて皆太平丸に乗ったんですか？そうではないでしょう？

太平丸事件の調査

口述者：半分？ いや、全員乗った。

面談者：ひと月訓練を受けて、はじめて乗った船が太平丸ですか？

口述者：太平丸。後は護衛船。

面談者：横に駆逐艦が1、2隻、後ろに1隻あるでしょう？

口述者：行く時に。

面談者：行く時の話です。

口述者：両側に、行く時に。

面談者：駆逐艦あけぼの（曙）とか何とかあるでしょう？

口述者：前に1隻、横に1隻、後ろからもついてくるのがあって、飛行機が飛び、そうして行った。あの日の夕方は飛行機も来ずに。それで魚雷だという。魚雷。魚雷が海中で当たって、「魚雷が命中した」と言った。その時、護衛艦がどこに行ったのか、いない。全部いなくてわれわれの乗った船だけいた。全部いなくなって、どうなったのか。

面談者：ところがその護衛していた船に乗っていたお年寄りの話を聞いてみると、このように一緒に航海していたが、魚雷が1発ではないそうです。何発も撃ったようですが？

口述者：2発、連発。

面談者：当たったのが2発、船に2発当たったという話ですか？

口述者：連発でやられたが、1発当たると「バーン」とひっくり返るよ。バーンとひっくり返って、私の感じでは向こうに1発撃ち、こちらにも1発撃ったようだ。それ分かる？ そうじゃない。一か所から撃ったんだ。バーンとひっくり返って、また当たったから両側から撃ったと思ったんだ。私も両側から撃ったと思った。あの大きな船が1発当たるとバーンとひっくり返る。水中ではいとも簡単にひっくり返る。

面談者：今のお話は小樽でひと月の訓練を受けて直ぐに、初めて乗った船が太平丸で、太平丸に乗ってどこかに働きに行く途中で命中したのでしょうか。生き残った人だけでも一度集めて中隊を再編成したが、黄海道側にくっつけられたんですよね？

口述者：われわれ江原道の小隊が黄海道にくっつけられた。われわれの中隊長が死んだから。われわれの中隊長の弟が小隊長の1人になり、原州から息子を連れて来た老人も小隊長をした。

面談者：それではホロムシロで飛行場の工事をし続けたのですか？ もともとホロムシロでは安全に降りと思っていたのに、死んだじゃないですか？ もともとその人たちを小樽で乗せてパラムシルで降ろそうと、船が行く途中に沈んだのだが、その中で相当の人たちが死んで、残った人だけホロムシロに残って作業をしたのですか？

口述者：そうだ。慶林成達（チェ・ソンドルの創氏名）という人が、そこで死んで埋めたんだが、私はその人を埋めた所は知らない。なぜなら、その人… 私がそこでチョソン命令（帰郷命令）というのを貰って帰って来た。私が先にチョソン命令を貰ったのだが、

慶林成達（チェ・ソンダル）にも命令状が来た。だから私と一緒に帰国するはずだが、私は先に帰国した。ほかの人たちより、私は先に帰国した。彼が「アイゴ、私は帰れない」と言うから、「どうして？」と私が聞くと、「私は死にそうで帰れない」と言う。それで私一人で帰って来た。〔被徴用死亡者連名簿では、慶林成達は1944年9月27日に幌筵島で戦病死〕

面談者：それでホロムシロを出たのはいつ頃ですか、その年の秋？

口述者：初秋？ 秋だよ。

面談者：初秋。再び北海道に来たんですか？再び北海道の小樽に…

口述者：北海道に来て日本の中隊に入った。初めは病院に入院し、出てからは日本の中隊に編成されて入隊した。われわれの中隊の人が来て、そちらに送られた。日本の中隊での、日本人の奴らの名前は一つも判らない。中隊長に対しても何時も「中隊長殿」と呼んだ。名前を教えてくださいませんか？聞いても言ってくれない。誰だ誰だか判るかい？日本の中隊に入っている時には、よく日本人を捉まえて揺さぶったりした。ある時には家に遊びに行き、休み時間には胸倉つかんで。それでも私が戻ってくると一度は迎えてくれる。こいつらが私の額を触ってみて、自分の額と比べてどちらが固いと。そんなにして日本の奴らと焼肉も食いにでかけたりした。

面談者：それがさっきの話だったのですか？

口述者：学校の校長の庭のジャガ芋も掘って日本の奴らとふかして砂糖をつけて食べた。日本の中隊にいた頃はそんなふうだった。

面談者：それではホロムシロにいた時、働いたのは2、3ヵ月位になりますか？太平丸が沈没して生き残った人たちは陸地に上ったじゃないですか？ホロムシロに。ホロムシロで飛行場の工事を2、3ヵ月したのですか？

口述者：分からない。2、3ヵ月、もっとやった。ところが脚が痛くて仕事ができず、どこか行く所もなく。初めは「何が痛い。仮病だ。仕事しろ」と囲まれて(強要され)、連れて行かれて、死ぬか生きるか。…とにかく日本人が指揮するので、車を押して行くと、車がひとりで落ちて行く。日本人の奴らが追って来ては、シャベルでやら殴る。シャベルで尻を何遍もなぐると、まともに歩けなくなる。痛くて座っていると、仕事をしないと殴る。アイゴ、痛くて仕事もできず、歩くこともできず、仮病だという。しかし仮病じゃないと言った。そこにも病院があって行くと、医者が診察して飯の札をくれた。初めは粥の札だった。粥に湯を足して食えば、何時もより多い。でもそれが何日持つ？もっといたらおコメのご飯の札をくれた。飯にありつけたら、体が少しは治ったのだが、それでも「まだ駄目だ。出て行け」と。チョソン命令状が出たんだ。

面談者：あ、その時は仮病ではないと思ったんですね？

太平丸事件の調査

口述者：チョソン命令状が来たというのが、まともによく聞こえなかった。

面談者：チョソン命令状をもらえば、再び北海道に帰れるのですね。

口述者：貰って見たら、本当にチョソン命令状だった。それなのに早く帰してくれない。この機会を生かして行かねば。慶林成達（チェ・ソンドル）にもチョソン命令状が出たと。一緒に行く友達が出来た。ところが死にそうで行けないと、それで私一人で来た。その人はそこで死んだ。その人一人だけそこに埋葬されている。私一人出て来て病院に入ったんだ。病院で日本人は、同期たちが差し入れに来る。面会に来るが、私の所に誰が面会に来る？その人たちは何か餅のようなものを持って来て、少しおすそ分けを貰って食べ、毎日治療してもらった。床の上で脚を空中に上げて。ゴムのハンマーで打って「ああ、脚気だ」と言う。

面談者：脚気？

口述者：脚気。ここをこのようにゴムのハンマーで叩くと。だから治療を受けに病院へ入院して数日間入院し、通院して治療を受けた。

面談者：あ、脚気。栄養不足などで、それで仕事もつらく。

口述者：飯を食えなくてなる病だと。それで医者が飯をくれた。初めは粥をくれ次に飯をくれた。ところで、青木ソショという人がその病院に小使いでいました。麟蹄邑の人で、その人のおかげもあって。

面談者：あ、朝鮮人ですか？

口述者：うん。青木ソショという人。その病院で小使いをしていたんです。そのおかげで。それで飯の札も貰って、ご飯も貰ったんです。

面談者：気力を回復したのは病院生活じゃないですか？病院でチョソン命令状を貰い。

口述者：病院で過ごして。

面談者：病院にひと月くらいいたんですか？

口述者：ひと月もいなかった。

面談者：それからは、日本。

口述者：そして日本の中隊に送られた。

面談者：牛肉も食べに行き。

口述者：日本人と接触して日本人と一緒に寝て、一緒に食って。

面談者：それは軍人ではなく、軍属のケースですネ。陸軍軍属じゃないですか？ご老人が。

口述者：階級章のない軍兵長。

面談者：だから。それなら日曜には休ませてくれましたか？

口述者：日曜日とか、そんなのはない。いつもそこにいた。

面談者：それでは牛肉をどこに食べに行ったのですか？

面談者2：牛肉ではなく、鶏肉でしょう？

面談者：うん、牛肉。

口述者：牛肉は退院して、日本の中隊に入っていた時、日本軍属と一緒に。日本軍属の人たちが牛肉を食べに行こうと言う。それで行った。

面談者2：日曜日に行くのですか？

口述者：日曜日とかではなく、機会があると抜け出て。

面談者：あ、内緒で。

口述者：内緒で行かないと。日本の中隊に入っていると一つは楽だ。

面談者：何が楽なんですか？

口述者：日本の中隊に入っていると、その人たちと勘違いされ、殴られることもなく、その人たちと一緒に扱ってくれる。われわれ韓国人の中隊と知られると、この畜生たちが殴る。間違えるとやたら殴る。そして日本語も一つもできない者はもっと殴られる。言葉ができないと。何か言われたら答えないと。

面談者：返事しないと殴る。

口述者：私は嘘でも日本語を少し話すから、奴らと一緒に良く抜け出す。アホだよ、あいつらは。山裾の急斜面の畑でジャガ芋を掘る。村の人がジャガ芋を掘りに行く。すると、その時、モッコの棒でかます一つずつ運んで行く。二つも三つも。芋掘っている所に行ってジャガ芋を少しくれと。好きなだけ持って行けと。私はそんなに持って来なかった。くれるだけ持って行く。来てやたらにかき集めて入れてくれる。くれたら持って来る。そのままゆでて皮をむいて砂糖を、このようにかけて一杯ずつよそって食べる。いいよ。奴らも。

面談者：いつ朝鮮には帰られたのですか？

口述者：何が？

面談者：北海道にいて、韓国に来たのはいつですか？ 再び家に、故郷の家に帰って来たのはいつですか？

口述者：その年、昭和、昭和19年度に来たよ。いや、日本の昭和20年…

面談者：に降伏しますよね。

口述者：20年の正月をそこで祝った。そして陰暦の正月を家に帰って来て祝い。そしてその年農作業をした。他人の土地を借りて農作業をしたが、解放になった。

面談者：その話ですか。

口述者：ある日友達と、面かどこか行くと言うから行った。ところで、彼らはハアハアと息をはずませながらきた。「どうしてハアハアしてるんだ」と聞くと、里長、いやその時は区長だ、「区長が死んだ」という。「なぜ？」と聞くと、棍棒でやたらになぐった、後には下駄でやたらになぐったと。

面談者：昔（戦時中）、われわれを連れて行ったからと？

太平丸事件の調査

口述者：あの時は区長が選ぶんだよ。勝手に指名されたんだろう。区長、区長の命令で、めったやたらに連れて行ったんだ。

面談者：どうして人を指名したの？

口述者：里長が印をつけた。誰々はどこの誰を連れて来いと。里長が死んだ。死ぬほどなぐった。それで、その明くる日、どこかに逃げた。春川のどこかに逃げた。春川に行き、そこで暮らして死んだ。

面談者：ご老人が故郷に帰ることができた理由は何ですか。日本人が軍属として連行したら、戦争に負ける時までそこに縛って置いておく筈なのに、故郷に帰って来られたじゃないですか。ご老人。

口述者：期限があるじゃないか。われわれは初めてだったから、家に帰る時は労賃を貰おうという考えもできずに捕まって行ったんだ。ところが、そこに行って訓練を受け、お前は一月に月給150円、期限は6か月と発表した。下関から釜山に渡る時には連絡船が破損して船がなかった。

面談者：そうです。航路が断たれた時でした。

口述者：われわれの中隊は非常に寒い時に出て来たが、船が入らないから連絡もない。そこで冬になった。冬にチョソン命令が下りた。それならどうやって帰る？来た時のようにまた乗って、函館に行かず、札幌の方に抜けて、青森に来た。アイゴ、その時、どれだけ雪が降ったか、青森では地面の雪を掃かずに屋根の雪を掃く。地面の雪は足で踏む。屋根から降ろさないと家が壊れるという。青森のどこかに入ると、旅費といって100円ずつくれた。

面談者：旅費？

口述者：うん。汽車は無料で乗せてくれ、旅費だといって100円ずつくれた。

面談者：それでは青森から真っ直ぐ汽車に乗って来たんですか？

口述者：青森から東京に、東京からすぐ大阪に下りて来て、下関に来たと思ったら、九州にまた行く。一晚、船倉で寝て船に乗り、トク島（竹島）が見えた。釜山に来た。釜山に着いたら、（我々を朝鮮から引率してきた）何とかという、その悪いやつを見つけて、いっしょに殺そうと内密に作戦をたてたんだ。ところが、釜山に着くと、その日本人がそこにいたんだ。そいつが、「おい！そこにいる江原道、江原道、さっさとこい！」と叫んだ。そいつが催促したので、予めたてた作戦のことはすっかり忘れて…。故郷に帰れると喜んだよ、みんな。まったく！あいつらとそこで喧嘩になるのが解るから、すぐ汽車に乗せてしまった。さっさとわれわれを押し込めた。

面談者：頭を使えないように？

口述者：喧嘩できないように、急いで汽車に乗せられた。そこでばやっとしていたら喧嘩が起きた。そこでも、恨みたっぷりの奴がいる。

面談者：あ、日本にいた時は一緒に働いていたのに。

口述者：そこに来て、目茶苦茶に殴って殺してしまおうと。殺しはしないが、ある程度、殴った。双方ぶつかって。

面談者：両方に別れて。

口述者：そこで殴ったり蹴ったりした。ところがすぐに腕章した日本人の奴が、行く時と同じように来た。来いというから従った。ああ、何でそんなに気分がいいのか。私たちが死なずに生還したということは、少しも考えられなかった。

面談者：それで昭和20年の陰暦の正月を故郷で祝うことになったんですね。

口述者：陰暦の正月は家に帰って祝ったじゃない。陽暦の正月は北海道で祝った。陽暦の正月の時、われわれに来いと言って餅をついた。日本人たち餅つく時、一生懸命杵でつくじゃない。韓国の餅と違って。そうやって餅つきを手伝って、それをまた盗んで来ては、分けて食う。貰って食った奴も鞭でぶたれ、盗んで来た者も殴られて。

面談者：ところで6ヶ月契約で行かれたが、6ヶ月経って契約が終わったから、故郷に帰してやるという話でしたよね？

口述者：6ヶ月が1年になった。

面談者：そうですね。

口述者：連絡船もなく、戻れずにとどまっていたから。逃げ回っていても、何かしろと言われたら手伝って。どこかで石炭運べと言われたら運んで。それでも月給は月給としてくれるのが原則なのに。

面談者：そのお話ですね。6ヶ月の約束で行ったのに1年間いることになって、残りのお金は1文も貰えなかったのですか？

口述者：そう。私は2ヶ月分。2ヶ月分は何とか貰った。全部で240円。

面談者：故郷に帰ったら貯金通帳に？

口述者：うちの親も立派なものだ。そのお金一銭も下さないで、そのまま、あった。稼いだのだから、使っても良かったのに。

面談者：1年間いたのに2か月分だけ入っていた。

口述者：だから、その残りだからと損害賠償すればいいんじゃない？

面談者：貴方が1年間不在だったのだから、年取ったご両親と妻子。

口述者：何？

面談者：貴方が北海道に行っていた間、家の人たちに変化ありませんでしたか？

口述者：家では配給を貰って食い、時には他人の仕事を手伝い…どうにかこうにか元気に暮らしていたようです。

面談者：それでは24歳で帰って来たんですね？23歳で行って。

口述者：うん。陽暦の正月を祝ってから来たから。

太平丸事件の調査

面談者：それから何年か経って戦争が起きたじゃないですか。以北（北韓）と。それでまた、軍隊に行かれたんですか？

口述者：いや、行かなかった。私は33歳で身体検査を受けたが、第2乙種だった。だから徴兵には行かなかった。だが(近くの)29歳の人は行ったよ。その人は入隊して無事に何ごともなく帰って来た。軍人の除隊証明一つない。とにかく私は行かなかった。李承晩博士が特命を下したじゃない？「年を食った人はそのまま後方に」と。それでわれわれは免がれた。だから行かなかった。今、ある人は私の歳で行かなかったのなら、逃げたと言う。この村の人もそんな話をする。逃げたのかと。それで私は説明した。

面談者：ご老人が北海道に行かれたことが、新聞にも沢山出たそうですが、北海道新聞にも載り、江原日報にも…

口述者：私の出ない新聞はない。写真も…私の写真がないものなどない。

面談者：見ると、大倉一郎と…

口述者：うん、大倉牧師。われわれが日本に行けば、そこに泊まる。

面談者：川崎にあるあの教会？今はあの教会を辞められたでしょう？

口述者：大倉が？

面談者：今は大学の先生でしょう？

口述者：大倉の下に韓国人が一人いて、今はその人が牧師になった。

面談者：そんな話でしたネ。

口述者：私は米1斗を持って行った。米持って行く人もいて、手ぶらで行く人もいる。

面談者：それでは北海道に行かれた時は？

口述者：北海道では、向こうで食わせて貰って。

面談者：誰か北海道から招待したんですか？

口述者：うん？

面談者：北海道へ、金景錫会長ご夫妻と一緒に…

口述者：北海道行く時？札幌に団体があるじゃない？そこで「来い」と言うから。私を呼んで皆探せば…北千島に行って船が沈没した場所を探することができる。だから私を調査のために連れて行くのだよ。

面談者：例えば、ここじゃない、あそこじゃないか。こんな風に？

口述者：あの船が引き揚げられたら、お金沢山儲かるよ。私でないと、あの船探せないよ。私はあの船の左右を全部見ており、記憶が生々しい。でも、ほじくり返してなくなったところを、私がどうやって探すの！でなければあの洞窟で働いていたところ、明治天皇が水を飲んだというところを私が全部探した。そしたら「もう良い、行こう」だって。それなら、あの船を引き揚げないと？だから私は日本人たちに「貴方達、間違っている」と言った。あの船を引き揚げなければ。あそこには貴方達のお祖父さんもい

るし、兄弟もいる筈なのに、なぜしないんだと？日本人は全滅状態だった。なぜなのかといえば、お前達は人間差別をしてそうだった。人間差別とは何か？お前達は船の中でも良い所に乗り、われわれはどうして悪い所に乗せるのか？結局、われわれは先に放り出されて、お前達はもっと死んだのだと説明した。あまりにも人間差別をしたと言ったんだ。裁判の場でもそうだった。お前達はあまりにも人間差別をして、(韓国人より) もっと多く死んだんだと。

面談者：それで日本人がより多く死んだんですね。裁判の場でそんな話されたんですか？

口述者：人間差別をしたから、お前達が多く死んだと。韓国の判事は服装をバリッと出て来るだろう？ところが日本の判事は寝ていて、布団の中から出て来たようだったよ。韓国の裁判所がどれだけ立派か。なのに日本の裁判所は狭くて、ガラス窓ひとつともに見えない。そんな所で裁判をする。そして日本の大学教授？あの人たち、いつ顔を洗ったのか、いつ顔を洗ったのか…ある人は洗顔もしていないようだ。韓国人のようにきちんとした格好ではない。

面談者2：飛行場での作業の時、韓国人はどの程度いましたか？

口述者：1個中隊。

面談者：1個中隊いなくなって…

口述者：2個中隊を1個中隊に編成したのだから、1個中隊は全部死んだ。

面談者：1個中隊は何名ですか？

口述者：1個中隊は何名なのか？…1個分隊が20名からだろう？うん……ところでそんな風にはならない。あの時、人が多かったのか、足りなかったのか…よく分からない。洪城の人が一人…ホロモシロ(パラムシル)に渡っていった。洪城の人は40歳ぐらい。初めて行って、まだ鉄条網も張ってないのに、少しくれたご飯食べて、夜明け頃、そこに入り込んで。その人腹が減って、盗み食いしようと食堂に行った。でも何かないと。食堂の後に行って真っ青に漬かったサバ1匹を盗んで、むしって食べていて捕まった。それでその人はサバを口にくわえさせられたまま、あちこち現場を引きずられ、立たせておいて。何か書かれて。現場に行くと分隊長が誰かを呼んで、それを読ませる。その人は犬のように立たせられて、するとその人は泣くんだ。…犬のようにあのしょっぱいサバくわえたまま、口がたたれた。われわれの分隊にも来たが、うちの分隊長そのさまを見て泣き、読むこともできなかった。その人は生還したが名前は知らない。とにかく洪城の人です。あの、禹ビョンオクと一緒にいった人だ。生還したが、裁判にも来ない。原州からもひとりも来ない。

面談者：日本政府が言うには、太平丸が沈んで死んだ人が約120名だそうです。朝鮮人です。

口述者：日本人がそう言ってるの？

太平丸事件の調査

面談者：溺れ死んだ人はもっといるが、朝鮮人は大体そうだと。ご老人が考えるのはどうですか？

口述者：120名？とんでもない。なんで120名しかないの？

面談者：太平丸に乗っていた朝鮮人は何名ですか？

口述者：2個中隊だ。

面談者：先程、お話された1000名？黄海道の人、江原道の人みんな乗っていた？

口述者：とにかく1個中隊いなくなった計算だから。黄海道の中隊が多く生き残った。

それで、われわれ江原道中隊がそっちに合わさって1個中隊になった。

面談者：だから朝鮮人1000名が乗って、その半分が死んだというのでしょうか？

口述者：われわれ韓国人が1000名以上死んだんだ（口述者の瞬間的な計算間違い）...

面談者：いいえ、ご老人のお話は1000名の半分は死んだという話ですよ。

面談者2：1個中隊無くなったのだから。1000名乗っていて名が1個中隊だから。半分は死んだというお話でしょう？

面談者：120名死んだというのは話にならない？

口述者：話にならない。一つの郡から100名行っただけに。私の記憶では原州が2、横城も2、楊口が13人生還し、麟蹄が約50名生還、淮陽が50名生還した。

面談者：だから、江原道だけでも300名以上死んだだろう、そうでしょう？江原道だけでも。

口述者：うん。

面談者：ご老人、今日は3時間も…本当にありがとうございます。お疲れでしょう？

口述者：一日中やる時もある。ここに放送記者が来て、昼食もとらず一日中やった。私ももう、うんざりだった。一昨日も春川(太平洋戦争遺族会)の奥さんから電話が来た。それで心配だったが、奥さんから適当にあしらえと言われた。

〈休息〉

面談者：これがご老人作成の太平丸乗船者名簿ですか？

口述者：私が故郷に行けば、この人たちが申告したのか、確認して見るのに…

面談者：これは麟蹄の人たちですか？それなら私たちが申告したのか照会してみます。ところでこの赤い下線を引いてある方は、何ですか？

口述者：お？それは名前。チャン・ジェボンという人。楊口のどこかに移住してそこで死んだと。

面談者：あ、上が名前で...、下が

口述者：地名。下が地名。冠岱(クワンデ)里、何、楊口…

面談者：ここ、シムグムプンブ〔ブ=父〕は誰でしょうかね？

口述者：この人は、沈何とかだが。慶林成達と同じ村の人だ。吉サンナムと。この人も死んだ

が、息子の名前がゲンブンだ。この人は今どこに住んでいるのか分からない。故郷に帰って、この人たちが申告したのか…。

面談者：私たちが一度照会してみますよ。

口述者：行きもしないでかい。この人は「アオキ」〔青木〕といって…麟蹄邑の人だ。だから私がこうやっておおまかに記している。手が痺れて書くのがなかなか大変だよ。元々、字も上手くない。

面談者：私たちがこれを持って行ってもいいですか？

口述者：だめ。

面談者：それでは、私たちが写真に撮って行きます。

口述者：そうと知っていたら、どこかに清書しておいたのに。思い出して一つ書き、また一つ書いて…、南洋群島に行った人も2名書いたが、その人たちはわれわれより先に行った人たちだ。その人たちは皆、死んだ。

面談者：思い出すたびにメモしておかれたんですね。

口述者：金ジョンハンという人も忠清道のどこかに引っ越したが、非常に親切だ。私よりよく食べる人で。恐らくもう死んでいる。そしてまた、いつかその時…何か灰の封筒が来たと言うので行ったら、面事務所で言うには、これを持って行って葬儀をするより、ここで処理した方が良いじゃないかと。もしも骨のカケラや焼いた粉が来たら分からないが、砂や土のようだから、ここで処置するのが良いじゃないと言って。また人々も皆それが良いと言うから。そこで川辺に行って火を起こして焼いたら、紙の封筒が燃えて砂がサラサラと出て来て。でもわれわれの髪の毛と指の爪を切っておいたのがある。それは多分、神社のお堂にある。それはどうなったんだ。小泉が神社参拝するところにあるんじゃないのか？靖国神社の汽車の煙突の所で私のインタビューもした。

面談者：今日は本当にありがとうございました。長時間お疲れ様でした。時間を余りに多く奪ってすみません。それではお元気で。また、連絡致します。

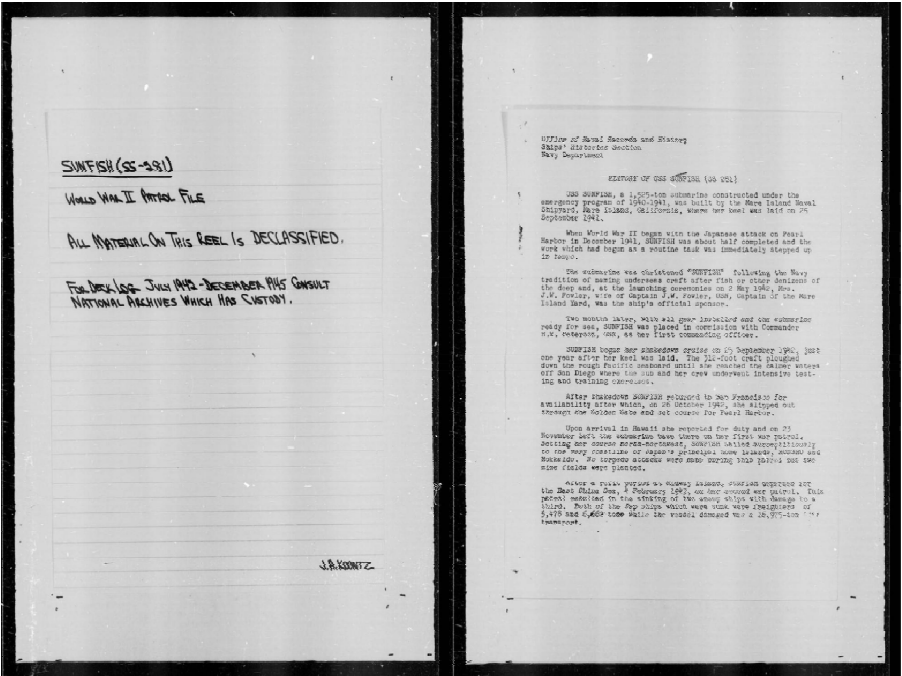
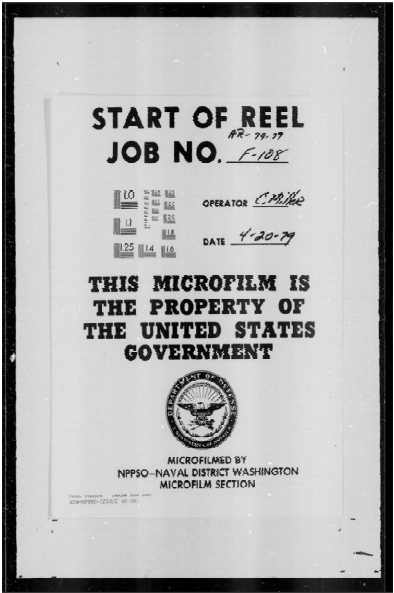
3. サンフィッシュ号資料(日本語版追加)

Sunfish (SS-281)

Submarine of the Gato class



Navy	The <u>US Navy</u>
Type	<u>Submarine</u>
Class	<u>Gato</u>
Pennant	281
Built by	Mare Island Navy Yard (Vallejo, California, U.S.A.)
Ordered	9 Sep 1940
Laid down	26 Sep 1941
Launched	2 May 1942
Commissioned	15 Jul 1942
End service	26 Dec 1945
History	Decommissioned 26 December 1945.



出版参加者

日本語版(2022)

企画・発行

日帝強制動員被害者支援財団

理事長：沈揆先

事務処長：盧慶達

企画弘報局長：黄晟鉉

担当：李秉熙

日本語翻訳

日本語翻訳協力委員会

翻訳：藤井正昭 校訂：李洋秀、竹内康人

翻訳にあたり、誤りは訂正し、字句を補った個所がある。訳注は〔 〕で示した。

最終監修

李淵植

上智大 科研研究員、ソウル市立大学校博士(Ph.D)、ソウル特別市人材開発院講師

主要著書：『朝鮮引揚げと日本人』、『引揚・追放・残留』

韓国語版(2006)

日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会編（2006年）

調査責任者：李淵植 調査2課

口述採録：李淵植、南相九、チャン・ソッキョン

挿図作業・録音文作成：李孝眞

録音文校閲・名簿分析：李淵植



日帝強制動員被害者支援財団